
響ミソラ小説 ときめきの恋心編

スーサン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

響ミソラ小説　ときめきの恋心編

【Nコード】

N4646V

【作者名】

スーサン

【あらすじ】

スバルのことが大好きなミソラがあの手、この手でスバルを誘惑する、キャラ崩壊小説です。

18禁ギリギリのラブライチャイチャ小説をご要望の方はぜひ、
ここで！

一度、サイトに載せたものをそのまま、こっちに移してるだけです。
最新小説は下のURLで読めます。

旅侍の電腦絵巻

http://www.geocities.co.jp/Boo
kend-Ohgai/7631/

ミソラとスバルの海岸デート

「うーん……太陽が気持ちいい！」

さんさんと照り返す、太陽に、私は思いっきり伸びをし、海を見つめた。

今日は、海辺の写真撮影のために海に来ていた。といっても、正確に撮影を行うのは明日で、今日は旅疲れを取るための、一日休憩である。

なんせ、今日のために、マネージャーにムリ言って、余裕を持たせてもらったんだもん。だって、今日は……

「ようやく、ついた……」

電波ロードを伝い、全身汗だくとなった少年の姿に、私は自然と笑顔になった。

「いらっしやい、スバル君。結構待ったよ」

「あ、ごめん、ミソラちゃん」

困った顔ですぐに謝りだすスバル君に私は首を横に振って、笑った。

「いいよ。ちゃんと、来てくれたし……時間もたっぷりあるから、今日はめいっぱい、海を楽しもう？」

「そうだね？ 委員長たちも、連れてくればよかったかな？」

それじゃあ、予定狂っちゃうよ。今日は、スバル君と一緒に海を楽しむに来たんだから。

「それよりも、さっさと、泳ごう？ スバル君、ちゃんと、水着もって来たよね？」

「うん。抜かりなく……」

持ってきたビニールバッグの中に入った水着を見て、私はますます、ワクワクした。

うーん、感無量。

この日のために、今までキツかった、仕事量も我慢したんだもん。

今日は、めいっぱい……

「あ、ミソラちゃんだ!」

そう、ミソラちゃん……って、え。

「ミソラちゃん、サインください!」

「きゃ〜。ミソラちゃんよ。可愛い!」

「写真、一枚、お願いします!」

なにに、この人たち。今日、ここにすることは内緒のはずなのに……

「ミソラちゃん、有名人だからね?」

さりげなく達観している、スバル君に突っ込みをれたかったが、今はとりあえず……

「逃げるよ、スバル君!」

「え、ちよつと……海は!?!」

暢気に海はどうするのかと尋ねるスバル君を引っ張り、私は野次馬の群れから逃げた。いった。

「おい、あいつ、俺たちのミソラちゃんをかつさらっていったぞ?」

「許せね〜……ミソラちゃんが純真だから、そこをつけ込んだな?」

「ファンクラブに連絡だ。あの男を特A級犯罪者にしろ!」

な、なんだか、怖いこといってるけど、い、いざとなったら、守ってあげるからね。

はあ〜……

まさか、海に入る前に、妨害にあうなんて、思わなかった。

せっかく用意した水着も、パアになっちゃったし……

いつもなら、大抵は、うまくいくはずなのに、今日は厄日だな……

「どうしたの、ミソラちゃん。顔がゲッソリしてるけど?」

「う、ううん……ごめんね。海に来てもらったのに、遊べなくて?」

「気にしてないよ。それに……」

海岸の道路から見える、悠然とした海を見て、スバル君はニコツと笑ってくれた。

「こうやって、海を眺めながら、散歩するのも楽しいよね？」

「スバル君……うん。そうだね!？」

海に入れなくっても、ここは立派な海。こうやって、海岸デートもオツでいいかも。

そうこうやって、時間は夜になった。

せつかくの楽しい時間も、静かに締めくくられようとしたとき、スバル君は、ビニールバッグから、ある物を取り出し、悪戯っ子のように微笑んだ。

「夏の海といえば、やっぱり、花火だよ？　たくさん、持ってたから。一緒にやろう?」

「花火。やるやる!　私、ロケット花火とかやりたい!」

「いいよ。じゃあ、ロケット花火、セットするね?」

砂浜の砂でロケット花火土台を作り立たせると、スバル君はチャッカマンを渡してくれて、火をつけるよう促した。

「なんだか、ドキドキするよね。こういうのって……」

実際、スバル君の顔が、ライトに照らされて、なんだか、いつもよりも、ずっと格好良く見えるから不思議だ。

ボツ……シュピィィン!

「わーっい、飛んだ飛んだ!」

「よかったね。じゃあ、次のやろうか?」

花火はたくさんあるから、昼の分、海を満喫できなかった分、花火を楽しめそう。

それに、スバル君と夜の海での花火って、とっても楽しい。

出来れば、こんな時間が、いつまでも続くといいな。

でも、時間も花火の量も有限で、気付いたら、ホテルに戻る時間

になっていた。

花火も最後の締めにとっておいた、線香花火だけになり、スバル君は、少し儚そうに、一本手渡してくれた。

「じゃあ、これ、最後にしようか。夜更かしすると、ミソラちゃんの仕事に支障がきそうだし」

「……うん」

もっと、遊びたかったな……

でも、時間もないし、スバル君には私のワガママのために、ここに来てもらってるし、これ以上、迷惑をかけるわけにはいかない。素直に諦めるしかないか……

「ミソラちゃんと、海にこれてよかったよ」

「え……？」

「海には、いい思い出がなかったから……」

「……」

グレイブ・ジョーカーで消されてしまった、委員長のことを思い出したんだね。

あの事件は、無事、委員長を元の姿に戻して、解決したけど、それでも、みんな、答えるものがあつたんだね。

「来年も、ミソラちゃんと、一緒に海で花火をしたいな？」

「スバル君」

カ〜と顔が熱くなるのを感じ、私は慌てて、燃え尽きる線香花火を見て、答えた。

「ま、また、これるよ……だ、だって、私、スバル君のことが……」
ビ〜〜ビ〜〜……

「……」

誰、こんな大事なときに電話をかけてくる奴。

「はい、もしもし……」

ドゴンツと、凄まじい怒声がハンターVGから響き、私はひっくり返りそうになった。

どうやら、ホテルに戻ってないことで、マネージャーが切れ、怒

つてるようだ。みんなも心配しているらしく、私は仕方なく、花火のゴミを片付け、スバル君に帰ることを伝えた。

「じゃあ、僕も帰るね」

ホテルに泊まっていけばいいじゃないかと、言いたかったが、それじゃあ、スバルのご両親が心配するし、これ以上、ワガママはいえない。

でも、やっぱり、まだ、一緒にいたい。

「あ、そうだ」

名案を思いつき、私はお尻のポケットから、小さなデジカメを取り出し、スバル君の肩を抱きついた。

パシャッ……

「ミ、ミソラちゃん？」

顔を真っ赤にするスバル君に、私も顔を真っ赤にし、走り出した。

「そ、それじゃあ、写真集できたら、真っ先に贈るから、絶対見てね？」

「う、うん……」

お互い気恥ずかしさを残し、ホテルに帰ると、私は、さっき、撮った写真を見て、笑顔になった。

「スバル君。すごいマヌケ顔……でも」

なんども、私を救ってくれた、ヒーローなんだよね。

「これ、消去せずに大事に取っておこう。スバル君……」
大好きだよ。

その一カ月後、写真集は無事出来、スバル君の家に贈られた。

ただ、気がかりが、ちよつと、過激な写真もあるから、写真集で、変なことしないか、ちよつと不安である。

だって、スバル君だって、立派な男の子だもん。でも……

スバル君、しっかり、私のこと、女の子だって、見てくれるよね。

スバル君……大好き。

温泉と混浴とムフフ♪

「ふう〜……」

ちょうど、やり終えた宿題のプリントをランドセルに仕舞うと、スバルは、疲れを取るようにベッドにダイブした。

「ふう〜……しがらみから開放されるって、気持ちいい」
ぷるるる……

『おい、スバル……電話だぞ?』

ハンターV Gから漏れる、ウォーロックの声に、スバルは面倒くさそうにハンターV Gを取り出し、連絡機能をオンにした。

『やつほ〜……スバル君。これから、温泉に行こう。いいところ、見つけたんだ!』

「ミ、ミソラちゃん……」

あちゃ〜と、顔を隠したくなる思いを隠し、スバルは出来るだけ、ニコやかな、笑顔を作った。

「あの、なんで、いきなり、温泉に?」

『あれ……だから、いいところ見つけたから、一緒に行こうって、言わなかった?』

「僕、お金持ってないよ?」

『電波空間通れば、一瞬だよ?』

それはそうだが、自分はいく先ほど、ようやく、宿題を終わらせ、ベッドに寝転んだばかりだ。

なんで、疲れる思いをして、敵のウジャウジャいる電波空間を伝って、温泉に行かなきゃ、いけないんだ。

だが……

『ねえ、いいよね、スバル君?』

「……」

ウルウルと目を潤ませ、可愛くおねだりをするミソラにスバルは、ため息を吐きたくなった。

「わかった。すぐに向かうよ」

『やった〜……じゃあ、すぐに迎えに行くね?』

「え……?」

シュバンツと閃光爆弾でも、撃ち放たれたように部屋全体が真っ白く光り、スバルは、呆れた顔で呟いた。

「ミソラちゃん……不法侵入って知ってる?」

「気にしない気にしない?」

ハープノート電波変換しているミソラは、勝手知ったる他人の家のごとく、さっきまで勉強に使っていた、スバルの勉強机のイスに座り、笑っていた。

「じゃあ、いこうか?」

『ああ、あまり、気は乗らねーかな?』

スバルと同じように、ウォーロックも疲れた顔でため息を吐いた。

「トランスコード、シューティングスターロックマン!」

スバルの身体に光りが纏い、弾け飛んだ。

ロックマンに電波変換したスバルは、ウェーブロードに向かって飛び上がり、宙に消えた。

「あ、待ってよ、ロックマン!」

ハープノートも慌てて、ウェーブロードに乗っかり、ロックマンの前に立ち、指差した。

「こっちこっち……なんと、秘境の温泉宿なんだよ!」

「その秘境によく、ウェーブロードが引かれてるね?」

「細かいことは、気にしない気にしない。早く行こう!」

ギュッと手を掴み引っ張るハープノートにロックマンは仕方ないと苦笑した。

「ここが、秘境の温泉宿?」

電波空間から抜け出し、元の姿に戻ると、スバルは感心したように目の前の宿を見つめた。

「思ったよりも綺麗だな……秘境っていうから、てっきり、もっと、
廃れてると思った」

「これから、客が多く入るから、今のうちにね？」

「……？」

ミソラの言ってることがわからず、顔をしかめるスバルにミソラは構わず、手を引き、宿に入っていった。

「あら、響ミソラさん……この間はどうも？」

「こんにちは、女将さん！ 温泉入らせて？」

元気よく返事を返すミソラに、女将も満面の笑顔でスバルを見た。
「へえ……今日は、彼氏と一緒にですか。いいですよ。さあ……」

「わ……い！」

「なんだか……話がうまく進みすぎてる気が？」

「気にしない気にしない……」

「まあ、いいか？」

脱衣所に入ると、スバルは早速、服を脱ぎ、硫黄の漂う温泉を見た。

「でも、温泉には一度は、入ってみたかったんだよね？」

『おい、スバル……温泉ってのは、そんなにいいものなのか？』

「うん。日本人なら、温泉くらい入っておかないとね……日本は温泉大国だし？」

『よくわかんねーけど、俺はここで待ってるから、早く戻れよ。一人じゃ、退屈で、しょうがねー』

「うん。わかった……」

裸になり、タオルを堂々と肩にかけるスバルにウォーロックはますます不思議な顔をした。

『温泉と風呂って、どう違うんだ？』

ガラッとドアを開けると、スバルはむわっと広がる硫黄の香る湯気に朗らかな顔をした。

「うーん、この匂い。温泉に来たって、実感がわくな？」

実際、友達にムリやり越させられた温泉だが、誰もいないこの広い温泉を独り占めできる快感は、少しだけ、感謝してもいいかなって、スバルは思った。

「まず、温泉に入る前に、身体を洗わないとね……入浴者のマナーだもんね？」

「そうだね、スバル君？」

「え……？」

隣から聞こえる、可愛らしい声に、スバルはギョツとした。

「ミ、ミソラちゃん、なんで、ここに！？」

「この温泉、混浴だよ。知らなかった？」

「し、知らないよ……ぼぼ僕、先に上がってるね！？」

「まだ、お風呂に入っていないでしょう。それにほら、水着着てるから、恥ずかしくないよ？」

バンツと見せ付けるように少々、大胆な上下の分かれたビキニの水着を着ているミソラにスバルは恥ずかしそうに叫んだ。

「僕は着てないよ！」

「いいからいいから！」

ずばあーと桶に入れたお湯を頭からかぶせると、ミソラは構わず、スバルを温泉に叩き込んだ。

「ぶばあ……酷いよ、ミソラちゃん……？」

「ふふ……一度、スバル君とこうやって、温泉を一緒に入りたかったんだ？」

そういい、ミソラも、スバルに抱きつくように、温泉に入ると、気持ちよさそうに目を細めた。

「スバル君は、私と温泉に入るの嫌？」

「い、嫌じゃないけど……」

一応、草食系とはいえ、男の子だし……

「でも、誰かが見て、噂になったら……」

「それはそれで、いいんじゃないかな？」

「いって……やっぱり、僕、出たほうが？」

「いいから！」

グイッと出て行こうとするスバルを押さえつけ、温泉に留めると、ミソラは、そっと肩を寄せてきた。

「スバル君には感謝してるんだ。いろいろと……」

「ミソラちゃん？」

急にしおらしい態度を取るミソラに、スバルは不思議そうな顔をした。

「私、お母さんが愛してくれた歌が大好き。でも、あのマネージャのせいで、私、大好きなものが、汚されそうになった。それを救ってくれたのは……他でもない、スバル君だよ？」

「ミソラちゃん……」

顔を真っ赤にするスバルにミソラは真剣な目をして、いった。

「あのね、スバル君。私、今までいかなかったけど、スバル君のことが……」

「あう……」

ずばしゃ……

「スバル君！？ どうしたの！？」

慌てて湯船から這いずりだすと、ミソラは額に手を当て、アハハと苦笑いを浮かべた。

「湯当たりを起こしてる……」

とりあえず、電波空間を使って、スバルを家まで送り返すと、ミソラはバツの悪い顔で、頭を下げた。

「ごめんなさい。調子に乗りすぎました」

『まあ、今更のことだけどね？』

キッとハープを睨みつけるも、ハープは思い出したようにいった。『それよりも、早く、スタジオに戻りましょう。これから、次の仕事の打ち合わせでしょう？』

「え……でも、スバル君が？」

『ベッドに寝かせたんだから、大丈夫よ。仕事ためたら、それこそ、スバル君に会う機会が減るわよ』

「……わかったわよ」

不貞腐れた顔でハープとの通信を切ると、ミソラはため息をついた。

「はぁ………せっかく、いい雰囲気作るチャンスだったのに」

名残惜しそうに、電波変換すると、ミソラはしばらくジッとスバルを見た。

「また、すぐに逢おうね……スバル君」

チュツ……

スバルの頬にキスをし、顔を真っ赤にしながら、ミソラは電波空間へと消えていった。

その様子を見ていたウォーロックは、不思議そうに首をかしげた。

『恋愛感情って奴か……さっぱり、わからん』

「スバル……あんまり食べないわね。どうしたの？」

「うん。ちよっと、気分が良くななくて……」

夕食を食べながら、テレビをつけると、スバルの目が仰天した。

『ミソラちゃん、温泉気持ちいいですか？』

『はい。こういうところ、好きな人とこれるといいな……』

『お、ミソラちゃん、彼氏発言ですか。ファンが泣きますよ？』

『えへへ……』

顔を真っ赤にする、ミソラに、スバルはようやく納得のいった顔でうずくまった。

「温泉の特集で行った場所をもう一度、行きたいから僕をダシに使ったのか……」

踏んだり蹴ったりの思いをするスバルだが、テレビの温泉に入っているミソラは、鼻歌交じりに歌を歌い始めていた。

その歌は、スバルも知らない、美空が一番大切な人を想って作った曲……

『シューティングスター』であった。

思い出の中の遊園地

「……ふう」

机の上で一息入れると、スバルはイスから立ち上がり、ベッドに寝転がった。

「疲れた……」

やり終えた宿題に、やり遂げた爽快感を覚え、そっと目を瞑り、眠ろうとしたとき……

ピーピー！

《スバル。電話が鳴ってるぞ？》

「え……？」

一瞬、面倒臭そうな顔をし、ハンターVＧを取り出すと通話モードをオンにした。

「やつほー……スバルくん。宿題、終わった？」

「ミソラちゃん？」

意外そうな顔をし、頷いた。

「たった今、終わったところだよ。どうしたの……仕事の悩みなら聞くけど？」

ニッコリ微笑むスバルに、モニター映像として映っていたミソラの顔が赤くなり、コホンッと咳払いした。

「じ、実はね……ネズミーランドの無料入場券をスタッフの人から貰ったんだ。丁度、二人でいけるから、い、一緒に行かない？」

カゝゝと顔を赤らめるミソラにスバルはベッドに寝転がったまま、優しく頷いた。

「いいよ。じゃあ、いつ行こうか？」

「今すぐ行こうよ！？」

「え……でも、ネズミーランド、ここからじゃ、電車でも二時間かかる距離じゃ？」

「電波空間を使えばすぐだよ！　じゃあ、私、ネズミーランドの入

り口で待つから、絶対に来てね？」

「あ、ミソラちゃん……!?!」

ぷつんっと通信を切られ、スバルは仕方ないといった顔でベッドから起き上がった。

《相変わらず、ミソラのワガママに振り回されっぱなしだな?》

「まあ、ミソラちゃんにも都合があるし……いつも仕事で疲れてるんだから、僕だけにワガママを言ってくれるのも、ある意味、嬉しいし?」

《ゾッコンってやつか?》

「ウオ、ウォーロック、どこでそんな事、覚えるの!?!」

《さあな?》

ニヤリと笑うウォーロックに顔を真っ赤にし、スバルはハンターV Gを掲げた。

「トランスコード! シューティングスターロックマン!」

電波空間を伝い、ネズミーランドの入り口前までたどり着くとロックマンに変身したスバルは元の姿に戻り、ミソラの姿を探した。

「あれ……ミソラちゃんがないな?」

首をキョロキョロ回し、ミソラの姿を探すと背中をポンツと押された。

「わぁッ♪」

「うわぁ!?!」

いきなり背中を押され、驚き声を上げるスバルにミソラは満面の笑顔で笑った。

「スバルくん、待たせすぎ!」

「ミ、ミソラちゃん……!?!」

相当驚いたのか、呼吸を荒くするスバルにミソラはニヤニヤと近づいた。

「そんなに驚いた? スバルくんが丁度、前に現れたから、コッソ

り驚かそうと思ったんだ?」

「しゅ、趣味が良くないよ……」

ようやく、呼吸を落ち着けたのか、深呼吸し、ミソラを見た。

「今日はいつもと服装が違うんだね?」

「あ、気付いた? 以前の海のようなことが起きないようにしようかと思って?」

「以前の海……?」

不思議そうな顔をするスバルにミソラは鈍感だなっと、心の中で笑った。

詳しくは、響ミソラSS「ミソラとスバルの海岸デート」参照。

「でも……ちよっと、地味だったかな?」

自分の着ている服を見て、ミソラは少し不安そうに顔を伏せた。

ピンクのカラーシャツに空色のジャケット。ダメージジーンズには靴はスポーツシューズ。目には正体を隠すためか、ちよっと大きなメガネをかけ、髪型もばれないよう、帽子をかぶっている。

カジュアル重視の変装だが、いつもの雰囲気とは別のミソラにスバルは新鮮さを覚えた。

「十分似合ってるよ? 僕はあんまり、オシャレしたことないから、なんともいえないけど、すごく可愛いってことだけは言えるよ?」

「ス、スバルくん……?」

顔を真っ赤にして、モジモジするミソラにスバルは不思議そうに首をかしげ、ネズミーランドを指差した。

「それより早く、ネズミーランドに入ろう。ここは入場だけでも、時間がかかるし?」

「う、うん……」

そっと、スバルの手を握ろうと手を伸ばした。

「ほら、早く!」

「あ……!?!」

ギュッと手を握られミソラは爆発してしまいそうに顔を真っ赤にした。

入り口は思ったよりも込んでおり、入るのに三十分もかかってしまった。

「ひゃく……すっごい込みよう？」

押し寄せる人、人、人の波に、スバルは驚きを隠せず仰天した。

「以前、委員長におのぼりさんみたいだから、キヨロキヨロするなって言われたけど、これじゃあ、しないほうがどうかしてるよ……ねえ、ミソラちゃん？」

クルリと背中を振り返るとスバルの目が点となった。

「ミソラちゃん……？」

誰もいない空間にスバルの顔が真っ青になった。

「迷子になっちゃった？」

一人残されたミソラは、今、自分がどこにいるかもわからず、スバルの名前を呼んだ。

「スバルく……ん！」

シ……ンと周りの喧騒とは別の静けさがミソラに襲い、慌ててハンターV Gを取り出した。

「電波障害で通信が繋がらない？」

ショートカットに登録したスバルの通信番号を何度も押したが通信は繋がらず、諦めて近くのベンチに座った。

「……」

通り過ぎる家族連れのお客にミソラは膝の上にひじを置き、頬杖をついた。

「昔も一度だけ、お母さんと一緒に遊園地にいったな？」

『やだ……あれ、乗りたい！』

小さい頃駄々をこね、身長制限のせいで乗れなかった絶叫マシンにミソラの母は優しくいった。

『大きくなったら乗れるから、それまで我慢しようね？』

『ぶ……う……』

初めての遊園地で心が踊ったのか、ミソラは勝手に親元を離れて、絶叫マシンのあるところまで行こうとした。

だが、それが間違いだった。
数分もしないうちにミソラは遊園地の中を迷子になってしまい今のうちにベンチに座っていた。

あの時は、アイドルでなかったため、道行く人全員が、まるで自分を見てないように、素通りしていった。

それがどこか寂しくって、怖くって、気付いたら泣いていた。
もしかしたら、母親はこんな勝手でワガママな自分を迎えに来てくれないかもしれない。

もし、ずっと一人だったらどうしよう。

怖いよ。寂しいよ。誰か、迎えにきてよ……

しゃくりを上げ泣きつづける過去の自分を思い出し、ミソラは懐かしそうに微笑んだ。

「そうそう、あの後、お母さんが……」

「はい。ソフトクリーム」

「え……？」

顔を上げるとミソラは声を上げてしまった。

「お母さん!？」

「え……お母さん？」

持っていたソフトクリームミソラに見せ、スバルは不思議そうに苦笑した。

「お母さんに勘違いされたのは初めてだな？」

「あ……スバルくん？」

自分の勘違いに気付き、ミソラは恥ずかしそうに俯いた。

顔を真っ赤にするミソラに、スバルは手を包むようにソフトクリームを渡し、微笑んだ。

「み……つけた!」

『み……つけた!』

スバルの笑顔と死んだはずの自分の母親の顔が重なり、ミソラは

一瞬、驚きに目を潤ませた。

「ミソラちゃん？」

いきなり泣き出すミソラにスバルは驚いたように慌てだした。

「も、もしかして、手を握られて嫌だった？　ご、ごめんね？」

「う、うん……ちがうの」

スバルから貰ったソフトクリームをぺろりと舐め、テヘツと笑った。

「甘いね？」

「う、うん。それ食べたなら、アトラクションに乗ろうか？　まだ時間हतप्पुरीあるし？」

「うん！」

電波空間で帰る道をたがえると、ミソラはロックマンに変身したスバルに手を振った。

「またね？」

「うん！」

手を振って去っていくスバルを見て、ハープノートに変身したミソラは自分の胸に手を当て、目を瞑った。

「変だよ。スバルくんがお母さんに見えるなんて？」

優しくって、温かくって、誰よりも大好きだった人。

きつと、その想いが彼と母を重ねてしまったのだろう。

でも、彼からはお母さんのときには感じなかった深いどきどき感があつた。

それは自分でもとくに気付いている……

ブラザーである彼からも絶対に教えることの出来ない大切な想い……

電波空間を歩きながら、ミソラは鼻歌交じりに歌を歌い始めた。自分でも、まだ作りかけのラブソングを奏でながら。

大好きだよ

るるるん♪

今日はスバルくんと一緒にピクニックに行く約束してるんだ。

移動手段は、いつも通り、電波空間を伝うけど、場所は見晴らしのいい、山頂なんだ。

きっと、空気も気持ちよくって、最高の一日になると思うんだ。だから、今日は朝から早くお弁当を作って気合を入れてるんだ。

「どれどれ？」

ぱくり……もぐもぐ……

「びみょう……」

まずくはないけど、うまくもない……

なんとも微妙な味だ……

「で、でも、時間はまだたくさんあるし、作り直せば……？」

『ミソラ、もうそろそろ、約束の時間よ？』

「え、嘘、ハープ!?」

時計を見ると私はギャーッと叫びたくなった。

約束の時刻はまで、後五分と切ろうとしていた。

約束の時間は九時だから、早く電波空間に行かないと間に合わない。
い。

でも、このお弁当じゃ……

「ええい! 女は度胸よ!」

急いでハンターV Gを取り出し、掲げた。

「電波変換! 響ミソラ、オン・エア!」

急いで約束の場所まで来るとロックマンに変身しているスバルくんは心配そうに私を見た。

「どうしたの? 来るの遅かったから、もしかしてトラブルに巻き

込まれたんじゃないかと、心配してたんだよ？」

「う、うん……ちょっと、お弁当を作って遅れちゃったんだ？」

遅れてきた私を怒るところか、逆に心配してくれるなんて、スバルくんって、本当にお人好しだね。

でも、そこがまた格好いいんだけど……

「大丈夫ならいいんだ……そういえば、今日はミソラちゃんのお弁当を食べる約束だったね？　楽しみにしてたんだ？」

「うん！　任せて……微妙な味だけど」

「うん、最後の部分聞き取れなかったけど、なに？」

「う、ううん……は、早く行こう！？」

山頂までたどり着くと、私とスバルくんは変身を解き、山の新鮮な空気を肺いっぱい吸い込んだ。

「空気がおいしいね？」

「そうだね……あそこに町を一望できるベンチがあるよ。あそこでお昼食べよう？」

「うん！」

よく見ると時間もいい頃合いだし、早速、お弁当を渡してみよう。

「は、はい……スバルくんのお弁当！」

「ありがとう」

ニツコリ、お弁当を受け取ってもらうと、私は顔が真っ赤になるのがわかった。

そっと、お弁当のふたを開け、私が作った微妙な味のから揚げを食べるスバルくんに、硬いつばが喉を通った。

どんな反応が返ってくるだろう。

もしかして、まずいって言われるかな……

「うん。とってもおいしいね？　ミソラちゃんって、いいお嫁さんになれるよ？」

「お、お嫁さん……そ、そんな……！？」

なにを言っているかわからず、顔を隠す私にスバルくんは不思議そうに聞いた。

「それよりも、ミソラちゃんのお弁当は？」

「え……？」

自分のお弁当を作るのを忘れていたことに気づき、私はマヌケな顔をした。

「しょうがないな、ミソラちゃんは……はい、あーくん」

「え……ええ！？」

箸掴みでから揚げを差し出され、私は呆けてしまった。

「どうしたの？ ほら、あーくん？」

ニコニコ顔でから揚げを差し出すばかりのスバルくんには私は顔を真っ赤にしたまま口を開けた。

「……あ、あーくん」

パクリと食べた。

もぐもぐ……あれ。

「おいしい？」

「なに、変なこと言ってるの？ 自分で作ったくせに？」

おかしそうにクスクス笑うスバルくんには私は慌てて言い訳しようとし、やめた。

あれだけ微妙な味のお弁当がおいしい理由がわかったからだ。

「スバルくんがいるからか？」

スバルくんと一緒だから、微妙な味のお弁当もおいしくなる。

心の中がホッと温かくなるのを感じ、私はスバルくんが箸を奪い、今度は私が、あーくんをしてあげた。

「ちょ、ミソラちゃん！？」

今度はスバルが恥ずかしがり、私は悪戯心を覚え、何度も「あーくん」を繰り返した。

そして、ついにスバルくんも観念したのか、口を開けて、から揚げを食べた。

「あ、あーくん……ぱくり」

「おいしい？」

「う、うん……でも、結構、恥ずかしいね？」

「う、うん……なんだか、もうお腹いっぱいだよ？」

私たちはお互いに顔を見合わせる事が出来ず、眼下に広がる街並みを見て、胸をドキドキさせた。

「今度はどこに行こうか……スバルくん？」

「どこでもいいよ……」

私は一瞬、スバルくんの顔を見て、スバルくんも優しく微笑んだ。

「ミソラちゃんの行きたいところが僕の行きたい場所だから？」

「スバルくん……」

私は、スバルくんの言った言葉に嬉しくなり、気付いたら自分の唇をスバルくんの唇に近づけていた。

そつと、彼の首に自分の腕を回し、彼を逃がさないようにするとスバルくんも私の腰に手を回し、目を瞑ってきた。

私の初めての……

ビくくビくく……

『ミソラ、仕事だ！　すぐに帰ってきなさい！』

「……」

お邪魔マネージャーの怒声に私は一瞬、ハンターV.Gを破壊しそうになり、心を落ち着けるように、立ち上がった。

「ごめんね、もう帰らないと？」

「いいよ。今日は一緒にご飯が食べれて楽しかったし……そうそう、今度はどこだけど、ちょっとだけ、訂正」

「ん……？」

訂正？

「僕の行きたい場所もミソラちゃんの行きたい場所だと僕は嬉しいな？」

「ッ……！？」

顔を真っ赤にし、私は慌てて電波変換し、電波空間へと去っていった。

本当、スバルくん、三度も世界を救った勇者だけはあるよ。

恥ずかしいこと平気で言えるし、そして……

そんなスバルくんを私は大好きだってことを気づかれてないってことだよ。

本当、素でたらしだよね……

でも、そんな君が大好きだよ、スバルくん。

ミソラのラジオデビューは波乱？

「あ……もうそろそろ、時間か？」

『なにが時間なんだ、スバル？』

ハンターV Gから漏れるウォーロックの声にスバルはニコツと微笑んだ。

「今日、ミソラちゃんの初ラジオ番組なんだ。ミソラちゃんに絶対に聞いてねと、言われてるし……ええっと、チャンネルはFMのこの数字だな？」

『響ミソラのコスモラジオタイム！』

響きのエコーが流れ、スバルは楽しそうに頷いた。

「ラジオは初めてだって聞いたけど、なかなか、板についてるね？」

『まあ、腐ってもプロだからな？』

「怒るよ？」

『……』

黙りこむウォーロックを無視し、スバルはラジオで手紙を読むミソラの声に意識を集中させた。

『記念すべき、最初の投稿おはがきはペンネーム、「衛星おんな」さんからです』

「衛星おんな？　なんだか、委員長みたい？」

ケラケラ笑うスバルにミソラは手紙を読み進めた。

『最近、私のちよつと気になる友人がちよつと有名なアーティストの色香に惑わされてるみたいなんです。なんとかしてください！』

「へえ……結構泥沼だな？」

最初のはがきにしては少し重い気がしたが、ミソラは気にした風もなく元気良く返事を返した。

『衛星おんなさん。女は諦めが肝心ですよ？　ということで、その男の子のことは諦めてください。それでは次のおはがきを……え、メールで新しい手紙が？』

なんだか、ラジオの前で揉めているようだが、ミソラは仕方無しといった声で、メールを読み始めた。

『私の友人を惑わせてる人は、最終決戦では結局、かませ犬で怪我して最終ステージは欠場。それでいて、出始めはおいしいところを持っていく泥棒猫なんです』

しばらく、妙な間が生まれ、ミソラの声がわずかに震えた。

『へ、へえ……で、でも、なにも出来ないよりマシだし、考え方を変えれば、出始めでおいしいところを持っていけないって事は、周りはたいして期待してないんじゃない？……え、新しいメール？』
メールを読むとミソラの声がどんどん陰湿になっていく。

『戦うアーティストって、なんだか、ありきたりって言われたくありません！ え、新しいメール？ 望むところよ！？』

バツと紙が奪われる音が響き、スバルは少し不安そうに顔を青ざめさせた。

「なんだか、雲行きが怪しく……」

『弱小バトルカード……』

「あ……」

スバルは慌てて、逃げようとしたが遅かった。

『うるさ……い！？』

ボオンツとラジオがミソラの怒声に耐え切れず爆発し、粉々になるとスバルは慌てて、机の中にコレクションしているバトルカードを寄せ集め、デッキの中に加えた。

「だ、だって、もっと、強力なバトルカードたくさんあるんだもん……」

言い訳がましく、スバルは今、デッキに入れた『ハープ・ノート』のカードを見て泣いた。

「それに、バトルカード『ハープ・ノート』って、下手したら敵から攻撃外しちゃうから、あまり使いたくないんだよ」

ダ……と泣きながら、スバルは壊れたラジオをどうやって、親に言い訳するか悩んだ。

ミソラのいけないせい長？

「また、九時を過ぎてる……」

腕時計の差す時間を見て、ミソラはハアツとため息をはいた。ここ最近、タレント仕事が忙しすぎて、ろくに眠っていない。

別段、タレント活動も嫌というわけじゃない。

むしろ、自分の歌を聴いてもらえる環境として、大好きであった。なら、なぜ悩むかというと、それはマネージャーに会った。

ミソラのマネージャーは、絵に描いたような金の亡者で、ミソラを金の成る木程度しか見ておらず、まだ十代のミソラを平気で九時以上まで働かせる鬼マネージャーである。

何度か問題も起きたが、不思議と業界から追放されることはなかった。

人間的には落ちこぼれだが、業界には右に並ぶものがない有能なマネージャーゆえ、事務所としても、頭が上がらないのが、この男の性質の悪いところである。

「……マネージャー変えてもらおうかな？」

すでに何度か、社長に直談判したが、社長も社長でマネージャーの強引さと口八丁さにどうも、首を縦に振れず、毎日毎日、疲れる日々を過ごす。

「まったく……明日はスバル君と海でのデートなのにな？」

《ほらほら、愚痴らない愚痴らない》

本気で怒りを感じているミソラにハンターVGにのいるハープが優しくなだめる。

実際は、ミソラ以上にマネージャーに対して怒りを感じているが、我慢しているミソラの手前、ハープも我慢していた。

「ん？ 本が落ちてる？」

道の隅っこに落ちている古雑誌を手に取るとミソラの顔がボツと赤くなった。

『ロリッ子少女、危ない性授業』

アダルトだった。

《ミソラ、ダメよ。こんなの見ちゃ……》

「ふんふん……」

《聞いてない》

御視するようにミソラは腰をかがめ、アダルト本を読みふけた。

「うそ、こんなことするの!？」

顔を真っ赤にして、信じられない顔をミソラにハープは顔をしかめた。

「こ、これはエグイ……でも、気持ちよさそう」

《ミソラちゃ……ん?》

「はぁはぁ……こんなこと、スバル君にされたら、私……」

《ミソラ!》

「さて、帰ろう!」

すっきりした顔で、チャッカリ本を片手に本を持つミソラにハープはため息を吐いた。

《ミソラ……鼻血でてる》

次の日、ロックマンに変身したスバルは電波ロードで約束の場所に遅刻しているミソラに頭をかいていた。

「遅いなミソラちゃん……いつもなら、僕よりも早く来るのに?」

《先に行った可能性はないのか?》

「そうなのかな?」

若干、不安そうに一度、目的地に向かってみようと足を進めるスバルに可愛い少女の声が響いてきた。

「スバル君、ごめん……待った!？」

慌てて、スバルの前に走りよるハープ・ノートに電波変換したミソラにスバルは優しく笑顔を浮かべ、首を横にふった。

「大して待ってないよ。それよりも、大丈夫? なんだか、目の下

にクマが出来てるけど？」

「大丈夫、大丈夫！　ちよっと、夜の一人遊びが過ぎただけだから？」

「夜の一人遊び？　もしかし、それって、夜遊び！？」

「ち、違うよ！　してるのはベッドの上だし……って！」

慌てて口をふさぐミソラにチェリーボーイのスバルは訳がわからず首をかしげた。

「……？」

アハハと苦笑し、ミソラは、さっさと海に行こうと背中を押した。

「ちよ……慌てないで？　ゆつくり行こう？」

「え……ゆつくり？　イこう？」

カア〜と顔を赤くするミソラにスバルはますます訳のわからない顔をした。

海に着くと二人は電波変換を解き、水着姿へとなった。

別段、瞬間的に着替えたわけじゃない。

変身する前に水着を着ていたというだけのことであつた。

「この時間でも、海に人がたくさんいるな？」

「そうだね？　みんな、暇してるんだね？」

感心した顔で自分たちの座れる砂浜の空きスペースを探すミソラにスバルの声が響いた。

「あ、開いてるビーチが合ったよ？」

「え……開いてるビーチって……ス、スバル君は私をそんな目で！？」

顔を真っ赤にし怒鳴ろうとするミソラにスバルは気づかず、開いてる砂浜にシートを敷き、ミソラを呼んだ。

「早く来なよ……泳げなくなっちゃうよ？」

「……」

顔を真っ赤にし、自分の聞き違いにミソラは顔を伏せた。

「さて、海に入る前に、準備運動しようか？」

うんつと立ち上がり、アキレス腱を伸ばすスバルにミソラは、一瞬、スバルの海パンの下が見えた気がし、ギョツとなった。

「どうしたの？」

「う、うん……別に？」

気がただけで、実際は見えていなかった。

ちよつと残念だと、ミソラは心の中で舌打ちした。

「おいっちにいさんし、おいっちにいさんし！」

丹念に準備体操するスバルにミソラも自分の動揺を隠すように準備体操し、最後に身体を逸らす運動をした。

「ハッ……逆えび固め!？」

「なにそれ？ 調理方法？」

「あ、なんでもないよ!？ それよりも、準備体操はこれくらいにして、海に入ろう？」

「そうだね？ さっさと、海に入りたいな……!？」

「入りたい!？」

また、顔を真っ赤にするミソラにスバルは本当に大丈夫かと顔を覗いた。

「さっきから変だよ、ミソラちゃん？ 顔を真っ赤にしっぱなしだし、もしかして、熱があるんじゃない？」

ピトツとオデコをくつつけられ、ミソラの意識が飛び出しそうに混乱した。

「ミソラちゃん!？」

慌てて、倒れだすミソラの身体を支え、スバルはどうしたか、声を荒げた。

「やっぱり、熱があるんじゃない?？」

だが、すぐに腕をガシツとつかまれ、顔をしかめた。

「……?？」

力強く握られた手に目をパチパチ瞬かせた。

「スバル君……ちよつと来て?？」

「め、目が怖いよ……ミソラちゃん？」

「いいから！」

「え……うあああ」

片足でぴょんぴょん跳ねるように引つ張られ、海岸沿いの人気のない裏道に連れていかれるとスバルは困った顔で、バシツと岩壁に身体をぶつけられた。

「どうしたの、ミソラちゃん？　なんか、僕、悪いことした？」

「安心して……私がリードするから？」

バンツと横顔の岩壁に手を乗せ、スバルを逃げられなくさせるとミソラは荒い息遣いで顔を近づけていった。

「……ミ、ミソラちゃん？」

なにをされるのか、まだ小学生のスバルにはわからなかったが、それが社会道徳に反したいけないことだけはスバルにもわかり、なんとか、ミソラの暴走を止められないか焦った。

《おい、スバル……なんだか、変じゃないか？》

「誰がどう見ても、ミソラちゃんの変なのは一目同然だよ！？」

《いや、上……》

「え……？」

トンツ……

「あう……」

小石程度の岩がミソラの脳天に落ち、ミソラは目を回し、倒れてしまった。

「キュ~~~~~……」

ボタンツ……

「ミ、ミソラちゃん……ん！？」

目を覚ますとミソラは妙な晴れやかな気持ちに包まれていた。まるで、溜めすぎて一人で処理しきれなくなった夏休みの宿題を一人で全部片付けたかのような、そんな爽快感すら感じていた。

「あ、よかった。目を覚まして？」

ガラッとドアから入ってくるスバルにミソラはいまになってここが病院のベッドで頭に大きなコブが出来ていることに気づいた。

「私、どうしてここに居るの？ 確か、海に行ったはずだったけど？」

「あ、ああ……えっとね？」

言葉に詰まらせるスバルにミソラはわかったと笑った。

「そっか、きつと、また、電波ウィルスに襲われて、スバル君が助けてくれたんだね？」

「いや、今回は僕が襲われた立場なんだけど、まあ、覚えてないくらいいや？」

ホッとするスバルにミソラは頭の上のコブを押さえ、涙を浮かべた。

「いった………」

「まあ、今日一日、病院で検査して？ 軽い脳震盪らしいけど、念のためね？ 僕も今日はここにいられるだけいるから」

「うん！」

元気よく返事を返すミソラにスバルは満足そうにうなづき、カバンから教科書を取り出した。

「あれ……それって？」

ミソラの顔が真っ青になった。

「夏休みの宿題。ハーブに頼まれたんだ。どうせ、仕事を言い訳にサボる気だろうって？ 良くないよ、そんなこと？」

ギロツと睨まれ、ミソラはハーブに軽い怒りを覚えた。

「僕で教えられるところは全部教えるから、一緒に宿題片付けよう？ 病院にいる間は暇だし？」

「うん……」

ガックリ肩を落とすミソラにスバルはニッコリ笑った。

「よく食べ、よく寝て、よく遊び、よく学ぶ。先人たちの尊い教えだよ？」

「遊ぶだけ、教えてほしかったよ……」
泣き狂うミソラにスバルは呆れた顔をして、笑った。

ミソラのいけないせい長？ (後書き)

実は自サイト、「旅侍の電腦絵巻」ではこの話が一番、カウント数が高かった作品です。

この頃はまだ、ギリギリ健全路線を走ろうと頑張っていました。

ミソラとの最後の夏休みの思い出

「え……?」

パンツと立たされたテレビスタジオのプールの前でスバルは慌てて水着姿のミソラを見た。

「なんで、僕、ここにいるの?」

「私が呼んだから」

キッパリと言い切られ、スバルは慌てて、叫んだ。

「確か、プールで遊ぶんじゃないかったの? 夏休み最後の思い出して?」

「だから、今日、生放送で私達、夏休み最後のプール合戦がここで繰り広げられてるの」

「生放送って……」

スタジオの上でカメラを構えるカメラマンにスバルは顔を真っ青にしてミソラを見た。

「僕、素人だよ?」

「私がついてるから、大丈夫だよ?」

えっへんと上下分かれた大胆に分かれた水着の胸を張るミソラにスバルは諦めたようにガックリきた。

「なんか、最近、流されてばかりいる気がする」

「気にしない気にしない……それよりも、これからやるゲームのルールが説明されるから、よく聞いてね?」

「え……?」

観客席に向かってマイクを張り上げる男にスバルは目をギョツとさせた。

「バ、バナナボート……まさか!?!」

一瞬、嫌な予感を覚え、外れてくれますようにと願った。

「ルールは単純! 二人一組となり、他のバナナボートに乗ったチームを転落させれば勝利! バナナボートから降りる意外はなんで

もありの、バーリードウッドゥー（反則無し）！ さあ、ゲームの時間だ！」

「さあ、早く行きましょう？」

「え、ちょっと待って！？」

バシヤンツとミソラに引っ張られるまま、スタジオのプールに飛び込まされ、スバルは突然の環境の変化に身体を震わせた。

「酷いよミソラちゃん……」

「アハハ……これが、私達のボードみたいだよ？」

「あ、これね？」

ぷかぷか浮かぶ、バナナボードにゆっくり登るスバルにミソラも後を追うようにバナナボートの後ろに乗り、スバルの背中に抱きついた。

「ミソラちゃん、なにを！？」

「だって、抱きついてないと、落ちちゃうでしょう？」

「で、でも、水着だし……は、肌が……いや、その……」

言葉に詰まるスバルにミソラは心の中で舌を出し、喜んだ。

動揺してる動揺してる。この最後の夏休み企画で二人の仲をもっと進めてやろう。

そして、ゲームが始まった。

ゲームのルールは至ってシンプルなだけあり、最初はスバルは近くにいる者同士の接戦になると思った。

だが……

「うわ！？ みんな、こっちに攻めてきた！？」

まるでイノシシのように自分達の元に責めてくる黄色いバナナの戦艦にスバルは慌てて、ミソラに叫んだ。

「戦線離脱。今すぐ逃げるよ！？」

「ダメ、スバル君、囲まれてる！？」

「え……！？」

いつの間にか逃げられないよう後ろを包囲しているバナナの戦艦にスバルは自分以外のチームは全員、敵になったのだと、本能的に理解した。

「スバル君、こうなったら、戦うしかないよ？ 勝利とは戦ったものにのみ得られる称号なんだよ？」

「そんな、お金だけ無駄にかかってる家庭用ゲームのCMじゃあるまし……でも」

それ以外、生き残る道も無いことは確かだった。

スバルは、用意された浮き輪の棒を構え、ミソラに指示した。

「いくよ、ミソラちゃん!？」

「オーケー、スバル君!」

ギョツと背中に抱きつくミソラに、参加者の男連中の目がギラツと怖くなった。

「あいつだけは、殺す!」

「我らのミソラちゃんをたぶらかす腫瘍は取り除かなければ」

「殺す殺す殺す……」

余りにも凄まじい負のオーラに一瞬、気圧されそうになったが、スバルはめげずに、バナナボートを動かした。

「突撃!」

「はい!」

裸一貫で突貫していくスバル達に今度は逆に男達が戸惑った。

「おい、ミソラちゃんだけは狙うなよ?」

「無茶言うな……あいつだけ、どうやって狙うんだ?」

「じゃあ、ミソラちゃんがプールに突き飛ばされてもいいのか!？」

「そうは言っていないだろう!？」

「言ってるだろう!？」

言い争いを始める男連中にミソラはチャンスと叫び、スバルに攻撃命令を出した。

「今だよ、スバル君! 言い争ってる人たちを攻撃!」

「でも、それって、卑怯じゃ?」

「戦いに正々堂々なんってないの！」

「んな、身もふたも無い……」

たはあと苦笑し、スバルは言い争っている男連中を手を持った浮き輪の棒で叩き落した。

「ぷはあ……ほら、見ろ、お前のせいだぞ!？」

「お前のせいだろう!？」

脱落しても、未だにケンカを続ける男連中にかまわず、ミソラは裸体に近い水着の身体をスバルに密着させ、ビシッと普通に試合をしている女性群を指差した。

「今度は強敵だよ! あっちは普通にバトツてるし!？」

「ていうか、なんで、男連中がケンカしてるのか、僕は知りたいんだけど?」

「さあ?」

まったく、訳のわからないという顔をする二人だが、構わず女子達の戦っているプールの陣地へと向かった。

だが、そこにきて、二人とも後悔した。

「じ、地獄だ……」

「う、うん……」

外から見れば、可愛い女子達による色っぽい深夜番組のような光景が流れてる見せ場だが、実際は可愛さなど微塵も無い本物の戦場であった。

「うら!」

「キャッ!？」

ドボンッ!

「やった!」

ドスンッ!

「え……キャッ!？」

プールに突き落とした女子からプールに突き落とされ、顔を出すと女子達は観客に聞こえない声で卑怯だ、反則だと罵り合った。

「ミソラちゃん……僕、お腹痛くなってきた」

「ダ、ダメだよ、攻撃！」

「いや、したら、きつと、報復されるよ、落とした娘から？」

「え……じゃ、じゃあ、どうすれば？」

「騎馬戦の必勝法って知ってる？」

「……？」

「騎馬戦は空気になってるほうが勝つ確立が高いんだ」

「え……どういうこと？」

「まあ、見てて？」

女子の戦場エリアからギリギリはみ出した地点に戻るとスバルとミソラはお互いの肌のぬくもりを感じながら、女子達の戦争を眺めた。

まさに男子達とは一線を配する本物の戦場であった。

一人が落とせば、落とされた女子は腹いせに落とした女子を落とし、戦いに夢中になってる女子がいれば、その不意について、後ろから攻撃し、バナナボートから落とし、また、落とされた女子が落とした女子に報復する。

まさに醜い女の争いの縮図がここに体现されていた。

もつとも、観ている観客からすれば、いい見世物として笑えるタネであるが……

「だいぶ減ったね？」

ようやく、スバルの言う作戦がわかり、ミソラは呆れた顔を浮かべた。

「ねえ……これってさあ、卑怯者の取る手じゃないの？」

「さつき、ミソラちゃん、自分がなに言ったか覚えてる？」

「え……？」

「戦いに正々堂々はないよ！ 突撃！」

「はい！」

ギュッと背中に抱きつき、バナナボートを全力で戦場へと走らせるとスバルは戦いで一人つきりになった生き残りに向かい浮き輪の棒を高く振り上げた。

「一撃必殺!」

「え……きやあああああ!?!」

バシンツと浮き輪の棒に叩き落された女子に、ピ~~~~とホイッスルがなった。

『勝者、響ミソラチーム!』

「やった~~~~!?! スバル君、すごい!」

大はしやぎで手を上げるミソラにスバルも調子に乗った顔でミソラのほうを向いた。

「手を離すと落ちちゃうよ?」

「大丈夫、だいじょう……」

するっ……

「え……キャア!?!」

手を上げた反動で水着の紐が解けてしまったのか、プールに落ちた水着も拾うのを忘れ、ミソラは胸を隠すため、スバルに今まで以上に強く抱きつき顔を真っ赤にした。

「ミ、ミソラちゃん!?!」

今度は水着越しでなく、直で女の子の胸の感触を背中に感じたスバルは顔を真っ赤にして、この後、どうすればいいか、迷った。

その瞬間、バシャンツと下のほうからつい先ほど、自分達が突き落とした女子がスバル達のバナナボート突き落とし、スバル達を転落させた。

「べ~~~~だ!」

最後は子供らしく舌を出す少女だが、ミソラとスバルはここからどうやって出ればいいか、迷い、助けを求めるようディレクターを見た。

ディレクターも突然のことに、動揺したのか、動作が多少遅れたが、慌てて、CMに入れと怒声を上げ、事なきを得た。

ちなみに、その日の視聴率は夏の特番の中でミソラの色っぽいシーンが観れたということで、今年一番の視聴率を取れたのだが、二人はまだ、そのことを知らない。

家に帰るとミソラは疲れきった身体をベッドに倒し、ハンターV
Gのハーブに語りかけた。

「マネージャーとディレクターさんに散々怒られちゃった」

《調子に乗るからよ。水着の紐くらいちゃんと結んでおきなさい!》
「は……い……でも」

胸を隠すためとはいえ、裸になった身体でスバルに抱きついてしまった事実を思い出し、ミソラは真っ赤になり、枕に顔をうずめた。
「もう、明日から、どう、スバル君と接すればいいのよ、これ!?!」
《自分で考えなさいよ。自業自得でしょう?》

「うえ……ん……夏休み最後の思い出が最悪になっちゃったよ……
……」

同じ頃

「……」

背中を肌をゆっくり撫で、スバルは顔を真っ赤にした。

「こ、これって、男の思い出としていい思い出になったのかな……
でも」

ベッドの枕に顔をうずめ、スバルは悶えるように暴れだした。

「明日から、どうやってミソラちゃんと顔を合わせればいいんだよ
?」

未だに残るミソラの胸の直の感触にスバルはゴロンゴロンとベッドで転げ周り、眠れない夜をすごした。

だが、彼は本当の恐怖に気付いていなかった。

今日、彼が出た番組は委員長こと、白金ルナたちがシツカリ観ていたことを……

明日から、学校の始まりである。

ミソラとの最後の夏休みの思い出 (後書き)

実は私、深夜帯の番組を全然知りません。

十一時ごろにはグッスリ熟睡……下手したら九時に寝てます。

もっとも、深夜番組そのもののあまり興味がないんですけどね？
やっぱり、夕方あたりのゴールデンが一番でしょう？

ミソラが泊まりに来た？

「……」

家の窓を開けるとミソラはウンザリした顔で、ため息をついた。

「また、マスコミが家に押しかけてる……」

ギャーギャーとまるで、餓鬼のように群がるマスコミと言う名のゴキブリにミソラは、窓を閉め、カーテンを閉じた。

「他にやること無いのかな？」

《大変ね、アイドルも……》

「まったく……」

広げた女性誌を見て、ミソラはどうしたものかと頭をかいた。

「誰がこんな根も葉もない噂を？」

『超人気アイドル、響ミソラ、衝撃の恋人事実発覚！ 相手はあの人気タレントの……』

最後まで読む気になれず、ミソラは女性誌をゴミ箱に投げ捨て、勉強机のイスに座った。

「事務所のほうでなんとか、フォローしてくれるそうだけど、これじゃあ、当分、外に出れないよ？」

《でも、食料もうそろそろ、底をつきそうよ？ まさか、食べないでほとぼりが冷めるのを待つのか？》

「確かに……」

腕を組んで、これから、どうするか、考えた。

《ミソラ、静かにして！？》

「え……どうしたの、ハープ？」

《ミソラ、クローゼットの裏を調べてみて？》

「クローゼットの裏……？」

怪訝そうに顔をしかめ、ミソラは、クローゼットの裏側を確かめた。

そして、顔が真っ青になった。

「なに、これ？」

「盗聴器ね？」

テープで張られた小型の盗聴器を手に取り、ミソラは間髪入れず、警察に電話した。

「で……家にいれなくなったから、僕の家に来てきたわけ？」

「そういうことなの」

シュンと落ち込むミソラにスバルは頭の後ろをかいた。

「その女性誌なら、委員長に読ませてもらったよ？ 根も葉もない噂にみんな、怒ってたよ？ でも、こんな情報に踊らされるなんて、マスコミも相当、暇なんだね？」

「まったくよ……渦中の中にいる人間にはいい迷惑よ」

ふんつと鼻を鳴らすミソラにスバルはどうしたものかと考えた。

「でも、当分は家に帰れないんでしょう？ 警察がまだ、盗聴器やカメラが隠されてるかもしれないって、調べるために……」

「そうなの……だから、スバル君、当分、家に泊めてくれない？ もちろん、家の仕事もするからさ？」

「イッ!？」

スバルの顔が真っ赤になった。

「ちよつとまずいよ？ 仮にも女の子が男の家に上がりこむのは……体裁も良くないし？」

「あら、私はいいわよ？」

間に入るように、スバルの母が微笑んできた。

「ミソラちゃんみたいなの可愛い娘なら、いつまでも大歓迎よ？ スバル、あなたもいいでしょう？」

「ま、まあ……母さんがそれでいいなら？」

言い返す言葉が出ず、断る理由も見つからず、スバルは仕方なく、首を縦に振った。

「やった！ じゃあ、私の荷物、ここに置くね？」

「いつの間に、荷物を持ってきたの？」

「……えへ」

最初から、泊まる気全快で家に来ていたのか……

「じゃあ、ミソラちゃん、来て早々悪いけど、お夕飯の支度手伝ってくれないかしら？」

「はあ……いい！」

「……」

部屋に残されたスバルは、どうしたものかと、ため息をついた。

「女の子はよく、「転んでもただじゃ起きない」っていうけど、その通りだね？」

《なんだ？ 案外、一番嬉しがってるのはお前じゃないのか？》
ハンターV Gをベッドに叩きつけた。

台所でスバルの母に料理を教えてもらいながら、ミソラはスバルの母の顔を見た。

相変わらず、綺麗なお母さんだな……

母子家庭でスバルを養いながら生活をしてると聞くと、不思議とそんな苦労は感じさせない若さがあった。

自分の母親も生きていれば、この人のような人なのかなとミソラはそう思ってしまった。

「うん？ どうしたの……私の顔になにかついてる？」

「い、いえ……まったく!？」

切っていた包丁を水で洗い、まな板の上に置くと伸びをした。

「そうそう、お母さん、スバル君は家ではいつもどんな感じなんですか？」

「あら、お母さんだなんて、えらく親しみのある言葉ね？ もし

かして、もうそんな仲？」

「い、いえ、そんな事じゃ!？」

「ふふっ……冗談よ？」

「あうう……」

手のひらで弄ばれた気分がし、ミソラは恥ずかしさに沸騰しそうであった。

「今は大変でしょうけど、マスコミなんて、飽きやすい連中の集まりよ？　すぐに違うターゲットを見つけて、そこに群がるハエみたいだと思えばいいわ」

「……」

どこか悟った顔をするスバルの母にミソラはポケーとした顔をし、頷いた。

「さあ、夕飯の準備は出来たし、スバルを呼んでももらえないかしら？　部屋でノンビリしてると思うから？」

「あ、はい……」

慌ててエプロンを脱ぎ、スバルの部屋に戻るとミソラはあれと、首をかしげた。

「誰もいない……スバル君、どこにいったんだろう？」

「あ、ミソラちゃん、どうしたの？」

「あ？」

光と共に現れたロックマンに電波変換したスバルにミソラはなにをしてたのか、問うた。

「うん。ちょっと、ゴキブリ共にお灸を据えに行ってたの」

「ゴキブリ？」

「明日になれば、わかるよ？」

ニッコリ微笑むスバルにミソラは訳がわからず、首をかしげた。

「へえ……ミソラちゃん、料理の腕、上げたね？　すごく、おいしいよ？」

「ほ、本当？」

顔を真っ赤にして、自分が作った分の料理を食べると苦い顔をした。

相変わらず、微妙な味……

「ふふっ……スバルも口がうまくなったじゃない？ でも、確かにミソラちゃんのご飯は、おいしいわよ？ もっと、練習すれば、きっと、もっとおいしくなれるわよ？」

「あ、はい！」

少し恥ずかしそうに、頬を染めるとスバルの母は微笑ましいものを見るように微笑んだ。

「スバル君、お風呂上がったよ？」

タオルで髪を拭くミソラにスバルは真っ赤な顔で叫んだ。

「ミソラちゃん、パジャマ姿でウロウロしないで！？ 僕も男なんだから！？」

「私は気にしないよ？」

「僕がするの？」

「ぶう……」

面白く無さそうに頬を膨らませるミソラにスバルは慌ててお風呂に入ろうと部屋を出て行った。

風呂場に入るとスバルはさらにもう一つ、とんでもない事実を思い出した。

「さっきまで、ミソラちゃんが入っていたお風呂だ……」

まだ、浴槽にはたっぷり残ったお湯に、スバルは、どうしようか悩んだ。

別にミソラの入った風呂が嫌なわけじゃなかった。

ただ、ここに可愛い女の子が裸で入り、その裸の入ったお風呂に入る。

別に道徳を犯してるわけじゃないが、なんとなく、反道徳的に思えて恥ずかしかった。

「……シャワーだけ、浴びて帰ろう？」

シャワーの蛇口を開け、お湯が出るとスバルは悲鳴を上げた。

「あつううううう！？」

「ふう……酷い目にあった」

ガチャッと部屋のドアを開けるとスバルはあれと、首をかしげた。
「ミソラちゃん……寝てる」

自分のベッドの上でグッスリ眠っているミソラにスバルは仕方ないなと微笑み、はだけたタオルシーツをかけなおした。

「まったく……マイペースなんだから？」

クスクスと笑い、スバルは隣に予備の布団を敷き、眠るため、部屋の電気を消した。

「おやすみ、ミソラちゃん……」

「……」

電気が消え、スバルの寝息が部屋に広がると、ミソラは音を立てず、ベッドから起き上がった。

「スバル君、もう寝た？」

「すうすう……」

スツカリ寝入っているスバルにミソラはゆっくり、ベッドから出て、近づいた。

「意外にあっさり、眠れるんだね？」

ふにと頬を押すとスバルはくすぐったそうに身体をひねり、背中を見せた。

「ふふっ……スバル君、可愛い」

「……ミソラちゃん」

「え……？」

いきなり、声をかけられ、ミソラはドキッとしてしまった。

「ミソラちゃん……負けないでね……僕がついてるから……」

「ス、スバル君？」

夢の中でも、自分に元気を上げようとするスバルにミソラは少しだけ感動し、そっと、顔を近づけた。

「ありがとう、スバル君？」

チュツ……

「……」

頬にキスしてしまったことに気付き、ミソラは慌てて、ベッドに戻り、眠ることにした。

「羊が一匹、羊が二匹……」

高鳴る鼓動にミソラは爆発してしまいそうな気持ちを抑え、必死に眠るための羊を数えた。

もつとも、それで眠れるほど、人間は単純ではないが……

次の日……

『ニュースの時間です。〇〇出版を中心とした多数の出版社に大量の電波ウィルスが混雑し、向こう十年分の保持データが紛失してしまった模様です。大量の電波ウィルスがどこから、潜入したのか所在は不明ですが、現在、各出版社はデータの復旧に時間を割かなければならなく、新刊を出す予定のめどが立てないようです……』

朝食のパンをかじりながら、ミソラは横で邪悪にほくそ笑むスバルを見て、真っ青な顔をした。

「昨日、なにか知た？」

「さあ……ね？」

パチンツとウインクするスバルにミソラは少しだけ、恐ろしいものを感じ、背筋を凍らせた。

世の中、怒らせちゃならないものや、怒ると怖いものがあるというが、スバルがそれであるとミソラは改めて思い知らされた。

ミソラが泊まりに来た？ **(後書き)**

文筆家は自分が見て信じたものを書くのが当たり前。
メディアに吊られ、メディアを書くのは三流の文筆家のやること。
ということで私は三流の文筆家です。

秋の出会い

久しぶりの休日を迎えられ、ミソラ、前から約束していた、紅葉狩りをスバルと楽しんでいた。

「……落ち葉が綺麗だね？」

「うん。そうだね？」

ゆらゆらと舞い落ちる赤い葉にスバルはクスツと微笑んだ。

「こうやって、四季を感じられるのは日本ならではの楽しみだね？」

「うん……最初は紅葉を見て、飽きないかなと思ったけど、案外、惚れ惚れとするものだね？」

「そうだね？」

ニツコリ微笑むスバルにミソラは少しだけ、恥ずかしくなり頬を赤らめてしまった。

秋になると感傷的になるとよくいうが、ミソラは今日ほど、その言葉が本当だと思ったことはなかった。

あの時、FM星人が地球を侵略にやってきたあの日。

ミソラは金を生む木としか考えていなかったマネージャーに歌を汚されたくなく、その心をハープに取り付かれ、ハープ・ノートになった。

一時は自暴自棄になり、自分の殻に閉じこもったこともあったが、それを救ってくれたのが、ロックマンになった、スバルであった。

あの事件後、アイドルを引退したが、みんなの応援もあり、新しい歌を作りたく、アイドルに復帰した。

最新曲の「シューティング・スター」は堂々のオリコン上位に入り、名実ともにミソラは、実力派アイドルとして、人々の人気を集めることとなった。

でも、一番、人気を集めたいのは、たった一人の少年の存在だった。

「うん……どうかした、ミソラちゃん？」

「あ……いや、別に？」

いつの間にか、スバルをジッと見つめていたミソラは慌てて、スバルから視線を離し、また、紅葉を眺めることにした。

「にしても、風が気持ちいいね？ スッカリ、涼しくなって、これが秋って、感じだね？」

「うん……秋は色んなことができる時期だからね？ 勉強の秋にスポーツの秋、読書の秋に食欲の秋……」

「そうそう……子供はたくさん食わないとね？」

「え……？」

ビシッと横から棒に刺さったヤキイモを見せ付けられ、スバルとミソラはお互いに森林の上で焚き火をしている老人を見た。

「あ、あの……？」

「デートかい、お若いの？」

「あ、いえ……これは！？」

慌てて言い訳を探そうとする二人に老人は見せ付けていたヤキイモを綺麗に半分こし、二人に差し出した。

「ふっくらしてうまいぞ？」

「あ、ありがとうございます」

渡されたヤキイモの熱さに手のひらでキャッチボールをするスバルとミソラに、老人は、横に座りなさいと愛嬌のある笑みを浮かべ、二人に指示した。

「……」

二人は少し遠慮がちに焚き火の近くに座り、ホウと息を吐いた。

「秋の焚き火っていうのも、風情があるね？」

「秋葉は燃えやすいからね……」

焚き火を見ながら、ヤキイモを食べると二人は目を見開き、ニッコリ微笑んだ。

「おいしいね、このヤキイモ。ねえ、ミソラちゃん？」

「うん！ 掘れたての味って感じだね……おじさん、このヤキイモ、どこで手に入れたの？」

おいしそうに焼き芋を食べる二人に老人は嬉しそうに頷いた。

「親戚が送ってくれたもので……一人じゃ食いきれんから、ここを通る若者にわけて渡してるんじゃないよ……そういえば、さっきも、やたら大きな小学生がワシのヤキイモを三個もペロリと食べて去っていったの？」

「ゴン太だ……」

友人の奇行に顔を赤らめるスバルにミソラはどうかしたのと首をかしげた。

「なんでもないよ……でも、秋の空に紅葉、そして冷たい風にさらされヤキイモを食べるって、本当に幸せなことだね？」

「うん……」

お互い顔を見つめあい、ふふっと微笑みあう二人にパシヤツと光が落ちた。

「え……？」

「ふふ……いい写真が取れた。二人とも、メアドを教えてくださいんかの？」

「え……あ、はい」

慌てて、メアドを教えると老人は慣れた手つきで二人に写メールを送り、二人に見るよう指示した。

「あ……？」

「う……」

ミソラとスバルはお互い恥ずかしそうに項垂れ、送られた写真を見た。

幸せそうにヤキイモを食べて微笑むその写真は、幸福という言葉を、そのまま、目で体現したような綺麗な一枚であった。

「ワシの密かな趣味での、幸せそうな人たちを写真で撮るのが、ライフワークなのじゃ」

「お、お爺さん……いくらなんでも、冗談でもやりすぎだよ？」

「気に入らなかったかえ？」

「うっ……」

言葉を失い、顔を赤らめるスバルにミソラはコッソリ、さっきの写真を携帯電話の待ち受け画面に設定した。

しばらくして、老人と話す内容をなくすとスバルとミソラは名残惜しそうに老人と別れ、不思議がっていた。

「何者だったんだろう、あの人？」

「さあ……でも、いい人みたいだったし。ほら、お土産におイモ、貰ったし？」

「ミソラちゃん、ヤキイモ、大好きなんだね？」

「甘いものが嫌いな女の子はいないよ、スバル君？」

「ふふ……」

楽しそうに微笑むスバルにミソラも嬉しそうに微笑み、笑いあった。

次の日、ミソラは仕事に行く前に軽く新聞を広げ、目を見開いた。

『え……天才写真家、日本に帰国、若い可愛いカップルの話に花が咲く』

「……これって、昨日のお爺さんだ。写真家だったんだね？」

よく見ると、新聞の記事に、自分たちを写した写真が飾られており、ミソラは恥ずかしそうに顔を赤らめた。

秋の出会い (後書き)

軽いスランプ時期に読者の期待にこたえようと努力して空振った作品です。

後でWEB拍手のコメントで「この時代に携帯電話はすでになくなったはずじゃ」と言われ、ハッとしました。

秋祭りで意外な……

「……こんなものかな？」

綺麗に着付けされた浴衣姿の自分を見て、ミソラはうんうんと頷き、鏡の前でターンした。

「この日のために、ちゃんと着付け教室に通ったかいがあったな？」

《ミソラ、バッチリ、決まってるわよ。ひゅーひゅー！》

「えへへ……」

頬を真っ赤に染め、手を当てると、ミソラは部屋の時計を見た。

「もうそろそろかな？」

テーブルに置いてあった、ハンターV.G.を取り、電話をかけた。

「もしもし……スバル君、もうそろそろ、お祭りの時間だけど、準備できてる？」

『あ、ミソラちゃん……準備、出来てるよ？』

画面から映るスバルの顔にミソラは満面の笑みを浮かべ、首を縦に振った。

「じゃあ、約束の場所で待ってるね？」

『わかった！　じゃあ、僕もすぐに行くから？』

祭りのある神社の入り口前で、ミソラはスバルが来るのを待った。左腕につけた腕時計を見て、胸をドキドキさせた。

「あ、ミソラちゃん……待たせちゃった？」

「スバル君！」

走ってくるスバルを認め、ミソラは右腕を大きく振り、はしゃいだ声をあげた。

「こっちこっち！　大して待ってないよ？」

「よかった……」

息を切らし、ミソラの前まで来るとスバルは優しく彼女の手を握った。

「じゃあ、行こうか？」

「う、うん……」

少し大胆な行動を取るスバルにミソラは驚いた顔をし、真っ赤になった。

「まずは、射的だね……ミソラちゃん、なにか欲しいものある？」

「スバル君が取ってくれるの？」

「こう見えても、結構、得意なんだよ？」

「主人公だもんね？」

「……？」

言ってることがわからず不思議な顔をするが気を取り直し、屋台のお兄さんに声をかけた。

「お兄さん、一回やらせてよ？」

「はいよ……うん？」

目が合い、スバルの顔が真っ青になった。

「お、尾上十郎さん!？」

「星河スバル……!？」

グルルと獣のような鼻息を出す十郎にミソラは不思議そうに顔を覗かせた。

「知り合い、スバル君？」

「い、一応ね？」

ある意味ライバル。

「久しぶりだな……最近、妙に会う率が低くなったから、心配したぞ？」

といいながら、好戦的な目をする十郎にミソラは身を挺して守るようにスバルの前に立った。

「ス、スバル君……このお兄さんと、どういう関係なの？」

「え、えっと……たぶん、友達かな？」

「……？」

煮え切らない言葉にミソラは怪訝な顔をした。

十郎もミソラとスバルの顔を見回し、ニヤリと笑った。

「なんだよ、デートか？ それじゃあ、今日は地のたぎり我慢しないと名？ ほれ、一発、サービスしてやるよ？」

ミソラにもライフルのおもちゃを渡し、十郎はニヤニヤした。

「出刃亀好きなんだね、十郎さんって？」

心底呆れた顔をするスバルに十郎は笑顔を崩すことがなかった。

「まあ、いいや……じゃあ、ミソラちゃん、せっかく、二つあるし、勝負しよう？」

「うん……じゃあ、なにを狙おうかな？」

欲しい景品を探し、スバルの声が上がった。

「ミソラちゃん、あそこに新発売のニンテンドー3DSがある！？」

「本当だ！？ かなり遠くに狙いづらい場所にあるね？」

「いいのに目をつけたな？」

十郎の目が野獣のように光った。

「これは今回の目玉だ……特別高いから、ただ当てても、倒れねーぜ？」

「当てても倒れないんじゃ、どうやって、倒すの！？」

ぶーぶーと不平をもらすミソラに十郎は不適に微笑んだ。

「普通に考えれば、弱点はすぐに見つかるぞ？」

「弱点って……えい！」

パシンッ……ポトッ……ころころ……

「ほら……倒れない！？」

ビクともしないニンテンドー3DSの箱にミソラはモックだと迷惑に騒いだ。

「……」

子供のように涙目になるミソラにスバルは、なにか思いついた顔でライフルを構えた。

「普通に考えれば弱点はここだね？」

バシンッ……バタンッ！

「あ……倒れた？」

「だね……？」

信じられない顔をするミソラに十郎は倒れたニンテンドー3DSを袋に入れ、スバルに渡した。

「実は、ニンテンドー3DSの重心を少しだけ、上に設定しておいたんだ。だから、箱の当たる位置を出来るだけに当てれば、後はテコの原理で倒れるって寸法だ。小学生の簡単な物理の問題だな？」

「テ、テコ……？」

マヌケな顔をするミソラにスバルと十郎は苦笑した。

「次は金魚すくいだね？」

「うん！ スバル君。今度は私が、スバル君に金魚をプレゼントするね？」

片手にニンテンドー3DSを抱えたミソラは、気合を入れた顔で目を燃やした。

「なんだ……お前も祭りを楽しんだのか？」

「あ……千代吉くん。なんで、屋台に？」

悪戯っ子のように自分を見る男の子にスバルはニコッと微笑んだ。

「知り合いの婆ちゃんに頼まれんたんだ。お前がやるなら、一回サービスしてやる」

「ありがとう！」

「……」

どこか面白くない顔をするミソラに千代吉は網を渡した。

「……」

ぶすっとしたまま、網を受け取ると、ミソラの目がようやく本気に変わった。

ユラユラと泳ぐ金魚に全神経を集中させ、ミソラの目がキラッ

と光った。

「そこだ!？」

バシヤンッ……!

「あ……?」

勢いと水の重量に負け、見事に敗れた網を見て、ミソラは悔しそうに涙目になった。

「失敗した奴には、金魚を三匹やることになってるから、好きな奴、選べよ?」

「あ、ありがとう、ミソラちゃん?」

「……どういたしまして」

ぷうぷうと頬を膨らませ、不貞腐れるミソラにスバルは苦笑した。
「ちゃんと金魚もらえたんだから、いいじゃないか?」

「取った奴をスバル君にプレゼントしたかったの!」

「でも、ウチ、金魚飼えないから、結局貰わず、千代吉くんに怒られたね?」

じゃあ、なんでやったんだと怒鳴られ、二人はごもつともと項垂れた。

「でもでも……私、さっきから、全然、いい所ないよ!？」

「まったく……」

呆れた顔をし、スバルは近くの屋台の前で立ち止まった。

「スバル君?」

屋台でなにかを買うスバルの顔を覗き込もうとすると……
シャリッ……

「ッ!？」

口の中にシャリッと心地いい音が響き、ミソラは幸せそうに顔を緩ませた。

「季節外れだけど、カキ氷が売ってたから、食べなよ?」

「う、うん……!」

スバルからかき氷を貰い、シャリシャリと食べると、キーンと頭を押さえた。

「き、きた〜〜〜!？」

「アハハ……どんなに気をつけても、そうなっちゃうよね？ お小遣い、まだ残ってるから、好きなもの選んでいいよ。全部、奢ってあげるから？」

「あ、う、うん……スバル君、無理しなくっても……」

ひゅ〜〜〜〜〜〜ドパ〜〜〜ン!

「あ……花火？」

空に浮かぶ七色の火花にミソラとスバルは顔を上げ、驚いた。

「綺麗だね、ミソラちゃん？」

「う、うん……花火がやるなんて、知らなかった？」

ちよつとだけ、ウツトリした顔をするミソラにスバルも優しく微笑んだ。

「どうやら、観客をビックリさせるためのサプライズみたいだね？」

「う、うん……ねえ、スバル君？」

今日はこれでよかったと、スバルの顔を見ようとする……

「ミソラちゃん？」

「え……？」

チュツ……

「ス、スバル君……」

いきなり、唇にキスされ、ミソラの顔が真っ赤になった。

「……」

スバルも顔を真っ赤にし、空を見上げ、顔を隠した。

「あ、あはは……も、もう帰るね、宿題があるんだった!？」

逃げるように神社の茂みの草原に入ると、閃光が瞬き、空に光が伸びた。

「……」

電波空間を使って帰っていったスバルにミソラはなにも言えず、幸せそうに自分の下唇を指で撫でた。

秋祭りで意外な……（後書き）

ここまですがプロローグみたいなものです。

本格的にミソラ小説が始動したのも大体ここからで人気がちよつとずつ上に向かったのもここから。

で、ここからR-15指定に近いものにもなりました。実際は見せてもヤツてもいけません。

新曲

「あああ……出ない……!?」

部屋中をぐるぐる走り回り、ピョンピョン跳ね、逆立ちするとミソラは泣き叫び出した。

「新曲のアイディアが出ない……!?」

《なに、奇行に走ってるのミソラ?》

「だって……」

グッスンと涙ぐみ、逆立ちのまま、ハンターVGに映るハープを見た。

「明日までに新曲の歌詞作らないと、締め切りすぎちゃうんだよ? プロデューサーや、マネージャーに怒られる」

「散々、遊んでたもんね?」

「ああ……未来から青い猫が来ないかな?」

「来るわけじゃないでしょう? いい加減、逆立ちやめないと頭に血が上るわよ?」

「……」

よっこいしょと逆立ちから床に座りなおすとミソラはうろろんと頭を悩ませた。

「今回の新曲は作曲は別に作られてるから、作りやすいと思ったんだけどな?」

《他人のセンスに自分のセンスを合わせるからね? 案外難しいかもしれないわね?》

「と、こんな会話してるうちに、日付が変わってる!?!」

深夜を回った時計を見て、ミソラはどうしようどうしようと、また部屋の回り走り出した。

「あた!?!」

ズデンッ……

よっぽど慌ててたのか床をツルツと滑り転び、ミソラの頭の上に

コツンツと写真立てが落ちた。

「悪いことって、なんで、こんなに続くんだろう？」

《慌てるからよ……》

「第一から、この写真だって、慌ててる私を馬鹿にしてるよ……うに？」

《ミソラ？》

突然、言葉を詰まらせるミソラにハープは心配そうに声を上げた。

《お〜い、ミソラ？ 生きてる？》

「今から、スバル君に会いに行きましょう！」

《はい！？》

あまりにも突拍子もない言葉にマイペースなハープも目を白黒させ、驚いた。

「あのね、ミソラ……今、もう深夜よ？ よい子はもう寝てる時間よ？」

「私は悪い子だ！」

「あなたね？」

「いいからいいから」

バツとハンターV Gを手に取り、頭上に掲げた。

「電波変換！ 響ミソラ、オンエア！」

光に包まれ、ピンクの可愛い衣装に身を包んだミソラは頭上に見える電波空間に向かってジャンプした。

「おっこしょと！」

うまく電波空間に乗っかり、伸びをするとハープ・ノートは星河家まで向かって走りだした。

《ところで、なんで、いきなり、星河くんの家に行く気になったの？》

「うん！ さっき、頭に落ちた写真立て、スバル君の写真だったんだ。そしたら、ピキンツと来たのよ！」

《来たって？》

「私のインスピレーションは今、爆発しかけてるのよ？ その起爆

剤は」

《星河くんって、いいたいわけね?》

「そのとおり!」

ちょうど、スバルの家の真上までたどり着くとハープ・ノートは飛び降りるように、スバルの家へと入り込んだ。

スバルの家に入り込むとハープ・ノートは電波変換を解き、ベッドで寝ているスバルを見た。

「スバル君……」

前回の秋祭りのことを思い出し、胸を高鳴らせるとミソラはなんにも言わず、彼の唇にキスをした。

チュツ……

「じゃ……おやすみ、スバル君」

また静かにハープ・ノートに電波変換したミソラは自分の家へと帰ったいった。

家に帰るとミソラは思いのほか、上機嫌な顔で身体をゆらゆら揺らしていた。

「るんるん……」

《えらく、ご機嫌ね? 締め切りは確実に迫ってるのに?》

楽しそうに微笑むとミソラの手が自然とシャープペンシルを握り、真っ白のノートに文字を走らせた。

《ミソラ?》

さっきまでと違い、楽しそうにペンを走らせるミソラにハープは心底驚かされた。

本当に、星河くんの力でインスピレーションが爆発しちゃった……

「そして、これは最初からつけようとずっと考えてたい一文……」

『大空に浮かぶ愛しきスバル 誰よりも純粹で優しい君に私はいつ

も救われる』

「出来た！」

心底満足した顔でベッドに倒れこむと、ミソラは唇に残るキスの感触を思い出し、顔を赤らめた。

「なんだか、今日は、いい夢を見れそう……」

そっと、目を瞑り、すう／＼と静かに寝息を立てるとミソラは深い眠りに入ってしまった。

《おやすみ……ミソラ》

「うん？」

朝、目覚め、母に頼まれ、ポストの新聞を取りに来るとスバルは不思議そうに首をかしげた。

「なんだろう、僕に郵便物が届けられてる？」

郵便の差出人を見るとスバルはふと微笑んだ。

「ミソラちゃんからだ……新曲のCDかな？」

新しく届けられた新曲の内容に顔を赤らめることになったのは、そんなに時間はかからなかった。

新曲（後書き）

これを作る前はどうか、キスしたことを帳消しに出来ないか考え、逆に関き直りました。

要するにここが私にとってのターニングポイント。

ここから、私と私の中のミソラちゃんが暴走した瞬間でもあります。

コンサート・ラブ

「みんな、ありがとう~~~~~!」

バアンツとギターを鳴り止むと、溢れんばかりの拍手と歓声が降り会場全体に降り注いだ。

今日は響ミソラのファン感謝コンサートの日であった。

巨大ドームを一日貸切のオールミソラ一色のコンサートライブ。

自分の歌を聴きにきた観客だけでなく、歌を歌うミソラ自身も一世一代の晴れ舞台に身体を震わせ、喜びを感じていた。

その中で一番、嬉しかったのは自分の見える位置に自分の大好きな人が歌を聞いていてくれてることだった。

スバル君、楽しんでくれてるかな?

目の前で拍手を送る少年の姿にミソラは胸をドキドキさせ、呼吸を整えた。

「ふう……」

間隙を縫うようにミソラの前にマイクを持った進行人が現れ、笑顔に向けた。

「ミソラちゃん、最高の舞台だね? どう、緊張とかしてない?」

「あ……?」

マイクを向けられるとミソラは歌の高揚で赤くなった顔を、ほんの少し違う理由で赤らめ、満面の笑顔を向けた。

「最高です! 歌は私にとって、最高の表現ですし、なによりも最高の告白なんです!」

「告白?」

一瞬でザワめく会場に、ミソラはスバルにだけウィンクを投げ、声を上げた。

「みんな、今日は私のために……ううん、私だけのために来てくれて、ありがとう!」

また、ワ~~~~と会場が沸き、ミソラとスバルは一瞬、目線があっ

た。

最高だったよ、ミソラちゃん。チケット逃した僕のために、招待してくれてありがとう。

いいよ、スバル君。君がいてくれたほうが、私は頑張れるから？

ミソラちゃん……

スバル君……

目で見ただけでスバルの言ってることがわかり、ミソラはウフフと笑った。

「さあ、じゃあ、今から、ミソラちゃんと会話できる、特別イベント、「ミソラトークタイム」の時間です。皆様、会場入りしたときに貰った控えを見てください。一名だけ、当たりの番号があります。それを見つけてください！」

「……」

さすがに、こればかりはスバル君は引いてくれないよね？

若干、諦め気味に吐息を漏らすと進行人は手に持った当選番号を読み始めた。

「え………当選番号は「0000192067番」です」

「当たってる？」

「え……！？」

信じられない顔でスバルを見ると、スバルもミソラの顔を見た。

「お……と！？ 当選したラッキーな人は、ミソラちゃんと同い年のバイザーの似合う、美少年だ！」

すぐにスタッフがスバルを連行されるようにミソラの待つステージへと立たせた。

「……」

「……」

お互い顔を見合わせ、なにを話すか迷った。

一応、公では、二人の関係は初対面である。

なにせ、響ミソラは、世間が注目する人気アイドル。

方や星河スバルは、コダマ小学校に通う、一介の小学生。

普通に考えれば、接点など、どこにもない。

ただ、二人が少し、世間から進んだ関係であること以外は……

「おやおや、美少年？ トップアイドルを前にして緊張してるな？」
ウリウリと肘を小突く進行人にスバルはどう反応していいか困った。

自然と行動も挙動不審になり、顔も真っ青であった。

もっとも、これくらいの反応、進行人は想定済みなのか、一人勝手に話を進めていった。

「それでは、美少年、名前を覚えてくれるかな？」

「あ、はい！ 星河スバルです……コダマ小学校に通ってます」

「星河くんか！？ ミソラちゃん、まさかまさかの同い年の少年？ これは芽生えるものが、あるんじゃないの？」

「め……」

「芽生える！？」

ほぼ同じタイミングでスバルが動転し、会場からドツと爆笑した。はたから見たら、トップアイドルを前にして浮かれる小学生。

ただし、実際は、秋祭りですでにキスを済ませた、恋人未満の初々しいカップル。

もし、この場でそれがバレれば、スキャンダルは避けられない。スバルからしても、不用意なことはいえない。

「星河くんは今回、どのような理由で、ここに参加できたのかな？」

「と、友達が突然、イベントに参加できなくなって、僕が招待されなんです」

「じゃあ、時間も無駄に出来ないし、早速、トークをしてもらいましょう？ 星河くん、なにかミソラちゃんに聞きたいことある？」

「え……？」

どうしようかと、目で合図を送ると、ミソラも、適当に誤魔化してと目で返事した。

「……じゃあ、ヒット曲「シューティングスター」は、あれは、誰かへのメッセージソングですか？」

「……スバル君？」

ボツと顔を真っ赤にし、ミソラはニコツと笑った。

「あれは私の一番大切な人に向けたメッセージソングだったんです。その人がいたから、私はまた、ここに帰ってこれた。私は壊れずに済んだ。そう思ってます」

「……ミソラちゃん」

ホツとした顔で、微笑むとスバルはまた、質問した。

「今年で一番、嬉しかったイベントはありますか？」

「秋祭りです」

「一番、信用できる友達はいますか？」

「……いません」

「え……？」

顔を真っ青にするスバルにミソラはニコツと笑い、観客席に向かって、マイクに叫んだ。

「友達なんかじゃない！ 私の一番大切な人が一番信用できる人です！」

オ~~~~とまた、意味の無いテンションだけの歓声が響き渡り、ミソラはパチンツとスバルにだけウィンクした。

イベントが終わり、夜中になると、ミソラは汗まみれの顔をタオルで拭い、会場の外へ出た。

「お疲れ様、ミソラちゃん」

「あ……？」

会場を降りるための石階段の前まで来るとミソラは仰天した顔でスバルを見た。

「スバル君、まだ帰ってなかったの？」

「最高のイベントだったからね？ 最高の星空も見えるのに、このまま一人で帰っちゃうの、勿体無いでしょう？」

石階段に座りながら微笑むスバルにミソラも彼の隣に座り、そっ

と寄りかかった。

「綺麗な夜だね？」

「もうそろそろ、冬だからね……最高に空が綺麗に見える時期が来るんだ。僕たち二人の名前をあわせたようにね？」

「星河にミソラか……？」

見えるはずも無いのに、天の川が見える気がし、ミソラはスバルに身体を支えてもらったまま、聞いた。

「ねえ、最後の質問のとき、ビックリした？」

「ああ……あの信用の話？」

「うん……驚いたよ、あの質問には？」

「僕のほうがビックリだったよ……一瞬、目の前が真っ暗ッ!？」
自分の唇を彼女の唇に塞がれ、スバルは仰天した顔でミソラを見た。

「ぶはあ……」

糸を引き、唇を離すとミソラは照れたように笑った。

「さあ……早く帰らないと、お母さんに怒られるよ？」

急ぎ足で階段から降りるとミソラの身体が光に包まれ、星空の空へと消えていった。

「……」

一人残されたスバルは強く鼓動する胸を抑え、起きたことを理解しようと必死に頭を回し、顔を真っ赤にした。

その時、頭上に一閃の流れ星が落ちた。

それこそ、まさに流星のように……

コンサート・ラブ (後書き)

WEB拍手で「最終回かと思った」と書かれたとおり、最終回っぽく話を終わらせました。

当然、まだ続きます。

というか、まだ話は終わってません。(自サイトのほうでも)
人気が落ちない限り、続けますよ、私は？

テレビデート

「はい、オーケー……ミソラちゃん、本番入ります！」

三本指を曲げると、ゴーのサインが降りた。

「おはようございます！ 今日の「シューティングチャンネル」は特別ゲストとして、私、響ミソラが、ここ、コダマ町を紹介することになりました」

ニコツと微笑むミソラにディレクターの男がオーケーと指だけで合図を出し、続けろと指示した。

「ご存知の通り、ここ、コダマ町は異星人襲来で一番の被害を受け、かの英雄、ロックマンが現れた、伝説的な土地です」

ゆっくり、コダマ町の歩道を歩きながら、ミソラは笑顔を崩さなまま、司会を進めていった。

「さて、早速、近くの人にインタビューしてみようかと思えます。

それでは、あの近くの男の子に……お……い！」

「うん？」

飲んでいた缶ジュースを口から放すと少年は仰天したように目を見開いた。

「……スバル君？」

スバルの顔を確認し、ミソラも固まった。

すぐにディレクターがボード版で、「動きが止まってる」と合図し、ミソラは慌てて、マイクを当てた。

「は、初めまして……私、響ミソラといいますけど、私のこと知ってます？」

「え……ああ!？」

スバルもすぐに状況を理解し、相槌を打った。

「星河スバルです……コダマ小学校に通ってます！」

どこか目が泳いだ状態で返事をし、スバルはどうしたらいいか、迷った。

ミソラも、とりあえず、決められたことだけはしようとレポートを続けた。

「わ、私、この町の特集を組むことになったんですけど、ロックマンのこと知ってますか？」

「え……ロ、ロックマン!？」

スバルの顔が苦いものになり、すぐに笑顔を作った。

「えっと……FM星人から地球を救ってくれたって聞いてますけど?」

「うん……すごく、格好いいよね?」

「……」

顔を赤くするスバルにミソラも照れくさそうに顔を赤らめ、さっさと話を切り上げようとマイクを口元にやった。

その瞬間。

「カット!」

「うん?」

いきなり、予定外のカットが入り、ミソラは慌てた様子で叫んだ。

「あれ、もしかして、NGですか!？」

「いやいや、違う違う!」

ディレクターの男はスバルに近づき、愛想のいい笑顔を浮かべた。

「君、ミソラちゃんと同年だね?」

「は、はい、一応?」

「コダマ小学校に通ってるって言ったよね?」

「ええ……まあ?」

言いたいことがわからず、スバルは顔をしかめた。

「これから、ミソラちゃんと一緒に町の特集に付き合ってくれないかな? もちろん、テレビに出れるよ?」

「え……?」

青半分、赤半分の微妙な顔色をするスバルにミソラの顔がパアツと輝き、声を上げた。

「そうしなよ、スバル君!？」

私もすっかり、サポートするからさ

!？」

「そ、そんなこと言っても……ミソラちゃん、僕、自信が無いよ？」

「そんな事無いよ？ スバル君、本番で強いタイプだし、私と一緒にだから、絶対に大丈夫！」

「こ、根拠の無い自信だね？」

「スバル君がいる……それだけで根拠は十分だよ？」

「アハハ……」

無条件で信頼されてるのは嬉しいが、少し信頼されるベクトルが違うような気がし、スバルは頬を人差し指でかいた。

「……二人とも、なんだか、偉く馴れ馴れしいけど、もしかして、知り合い？」

「イッ!？」

「アッ!？」

言葉を詰まらせる二人にディレクターの男はそんなわけ無いかと大笑いし、聞いた。

「で、どう……テレビ出てみる気、無い？ 大人気アイドルと一緒にいられるよ？」

いつも一緒にいるんだけどな？

スバルは心の中でため息を吐き、少しだけ、安心した顔をした。

「わかりました……素人ですけど、頑張ります」

「オーケー。じゃあ、早速、いこうか？」

指で輪っかを作り、ニコツと笑うディレクターを見て、ミソラも安心顔でスバルの手元を見た。

「あ、スバル君、そのジュース頂戴？」

「え、あ……ミソラちゃん？」

缶ジュースを奪われ、ゴクゴクと喉を鳴らしジュースを飲むミソラにスバルは恥ずかしそうに呟いた。

「間接キスなんだけど？」

「ぶッ!？」

スバルの言葉に自分の取った行動を理解してしまったのか、むせ

てしまい、ゲホゲホと咳き込んでしまった。

「は、はい、スバル君、ありがとう……ちゃんと、残しておいたから？」

「間接キス……」

真っ赤な顔のまま、僅かに缶の飲み口に残った淡い桃色の跡にスバルは恥ずかしそうにいった。

「口紅つけてるんだ？」

そっと自然な雰囲気で飲み残された缶ジュースの中身を飲み、ミソラも嬉しそうに微笑んだ。

「ここが、僕が通うコダマ小学校。個性的な人がたくさんいるけど、みんな楽しくって、いい学校だよ？」

「へえ……ここがコダマ小学校か？」

ホケエ……と顔を上げ、ミソラはそっと自然な感じでスバルの手を握り走り出した。

「じゃあ、中に入ってみよう！？」

「え、ちょ……ミソラちゃん！？」

ミソラに引っ張られるまま学校に入るとスバルは自分の教室まで彼女を案内し、説明した。

「ここが僕の教室、今日はお休みだから……担任の育田道德先生はいないけど、いつもは、先生の授業を聞きながら、楽しく過ごしてるんだよ？」

「へえ……いいなあ？」

ボソリと漏れた言葉が、担任に恵まれたスバルが羨ましいのでなく、スバルがいる、この教室が羨ましいのだとミソラは自分自身の本音にすぐに気づき、テレたように笑った。

スバルの机を見つけ、すぐに近づくミソラは輝くものを見るように顔を綻ばせた。

「ここが、スバル君の机か……」

どこか、嬉しそうにミソラは顔を輝かせ、イスに座りだした。

「ミソラちゃん？」

さすがにその行動には不可解さを覚え、スバルは不思議そうにミソラを見た。

ミソラも、ニコツと笑い、スバルに語りかけた。

「意外と普通なんだね？」

「それは普通の学校だからね？」

ふふっと笑いあう二人に、ディレクター達は不思議そうに首をかしげた。

「なんだろう、この温かい雰囲気は？」

なんだかんだで、撮影は順調に進んだ。

学校を出た後、ミソラとスバルはコダマ町の名物を行き来し、昼食と一緒に食べ、ゲームセンターでクレールゲームをし、ミソラに人形をプレゼントし、最終的にスバルの家へと招待された。

「はい、どうぞ、ミソラちゃん？」

トンツと優しく置かれたお茶にミソラはありがとうございますと挨拶し、コップを取った。

「はぁ〜……今日は本当に楽しかった。ありがとうね、スバル君？」

「ううん……こっちこそ楽しかったよ、ミソラちゃん、ありがとう？」

ニコツと微笑む二人にディレクター達は不可解そうに顎に手を置いた。

「なんだか、熟年夫婦並みに息の合った二人だな？」

ディレクター達の疑問を吹き飛ばすようにキッチンからスバルの母が現れ、声をかけた。

「ミソラちゃん、今日は食べていきなさい？　美味しいもの作ってあげるから？」

「え……あ、は、はい、ありがとうございます！」

慌てて立ち上がり、ミソラもトテトテと台所に向かった。

それに続き、カメラもスバルを無視し、ミソラの後についていった。

「お手伝いします！」

「あら、ありがとう……カメラさんは邪魔ですから、出て行ってくれますか？」

「え……？」

無理やり、カメラマンを外に出すとミソラはホッとした顔でスバルの母を見た。

「大変ね、仕事とはいええ、生まれたての雛のようにカメラに追いかけられていると？」

「いえ……これも選んだ仕事ですから？」

「そう？」

ニッコリ微笑み、スバルの母は料理を始めようと食材を並べ始めた。

ニンジン、ジャガイモ、玉ねぎ……

どうやら作るのはカレーライスらしい……

包丁を切りながら、スバルの母はニヤニヤとミソラに聞いた。

「どう、最近、スバルとはうまくいってる？」

「イッ……！？」

ガコンツと切っていたニンジンに力が入り、真っ二つに裂けるとミソラは真っ赤な顔で叫んだ。

「な、なに言ってるんですか、いきなり！？」

「いきなりじゃないわよ？ 最近の子は進んでるから……キスはしたの？」

「キ、キスッ……」

ここ最近の出来事を思い出し、真っ赤になるミソラにスバルの母は悪戯っ子のように笑った。

「これは聞くのが野暮だったわね？」

「あうう……」

全て見透かされてると気付かされ、ミソラは恥ずかしそうに真つ二つになったニンジンを一口サイズに切りなおした。

なんだかんだで、料理好きだから、応用は利くらしい……

夜になり、撮影を終えると、スバルはディレクターの男と握手し、頭を下げた。

「今日はありがとうございました。おかげで楽しかったです」

「いや、こつちもありがとう……おかげで、いい作品が出来た。テレビ、絶対に観てくれよ？」

「はい！」

ゆっくり、ミソラを見て、ニコツと微笑んだ。

ミソラもニコツと微笑み、ウィンクした。

「また、一緒にテレビに出ようね？」

満面に広がる眩い笑顔にスバルは数日後に流れるテレビが待ち通しと心をヤキモキさせた。

テレビデート (後書き)

この時は斬新なデート方法はないか四苦八苦し、成功か失敗か分からない作品になりました。

ソングボディーレッスン

「いま〜〜〜〜……私の……」

「ううん？」

弾いていたピアノを止め、育田道徳は複雑そうな顔をした。

「星河は声はいいんだが、どうも音程が合っていないな？」

「あ、あはは……」

若干、所在無さ気に目を泳がせるとスバルは確認するように聞いた。

「や、やっぱり、追試ですか？」

「まあ、酷な話だがな？」

ピアノの上に置いた音楽の本をめくり、道徳は細い目をより細めた。

「星河は得意な歌や、聴いてる曲はあるか？」

「え……あ、一応、ありますけど？」

頭の中でノンキにギターを持ってブイサインを出す少女を思い出して、スバルは顔を真っ赤にした。

「なら、その歌を練習して来い。明日、追試をするからな？」

「そんなあ……」

泣き出しそうに顔を渋めるスバルに道徳は豪快に笑った。

「若いときの苦勞は買ってでもしろっていうだろう？」

「……相変わらず、いい曲だな？」

IPodに記録してある音楽を聴きながら、スバルはホトホト困った顔でため息を吐いた。

「僕って、ミソラちゃんの曲しか聴いてないんだよね？」

というよりも、正確には響ミソラのCDしか、持っていないのだ。もともと、音楽に興味があるわけじゃなく、このCDもミソラが

新曲を出すたびに、プレゼントしてくれてるものであり、音楽を聴く趣味は特には無かった。

もったも、今はそれを思いっきり後悔している。

「もうちょつと、音楽に興味もっておけばよかった？」

《愚痴漏らしても、しょうがねーだろう？　とりあえず、俺が聴いてやるから、練習しろ？》

「はぁ……い……」

ウォーロックに急かされ、スバルは頭の中のミソラの曲を選別し、アカペラで歌い始めた。

「……」

歌い終わるとウォーロックは苦々しい顔をした。

《下手だな？》

「自覚してるよ……」

顔を真っ赤にするスバルのポケットから電話のなる音が響いた。
ぴるるるる……

「あ、電話だ？」

ピツとハンターV Gの電話機能をオンにし、モニターを開くと……

『やつほー、スバル君？　最近、めっきり寒くなったね？』

「ミ、ミソラちゃん？」

「ど、どうしたの、いきなり？」

『質問を質問で返すようだけど、スバル君こそどうしたの、顔が真っ赤だよ？』

「実は明日、音楽のテストの追試なんだよ……悪いけど、練習したいから、今日は遊べないんだ？」

『歌の練習！？　それなら、私に任せて！』

「え……任せるって？」

シュバンツと部屋全体が真っ白な閃光に包まれ、スバルは余りの眩しさに目を瞑った。

「ミ、ミソラちゃん？」

「へろ……？」

ギターを鳴らし、満面の笑顔を浮かべるハープ・ノートにスバルはため息を吐いた。

「僕、明日、追試があるって、言ったよね？」

「音楽のでしょう？　なら、練習の適任者がいるじゃない？」

「……」

数秒、ハープ・ノートを見つめ、スバルの顔がパアツと明るくなった。

「もしかして、付き合ってくれるの？」

「もちろん！　実はこれから、人気の無い隠れた名所といわれる南国の地、イワーハに行こうと思ってたんだ？　そこなら、誰にも見つからず、歌の練習が出来るよ？　ねえ、一緒に行こうよ！？」

目をキラッと輝かせ、顔を近づけるミソラにスバルは若干、気おされながら頷いた。

「う、うん……」

イワーハは南国の地というよりも、無人島に近い秘境の地であった。

面積も国というよりも少し広い公園程度の大きさで、人の気配どころか、動物の気配すらない海だけが綺麗な孤島であった。

その島で水着姿に着替えさせられたスバルは不思議そうに同じように上下分かれた水着を着るミソラを見た。

「なんで、水着に着替えさせられてるの？」

「もちろん、歌の練習のため！」

にべも無く、ミソラは満面の笑みを浮かべた。

「歌と水着となんの関係があるの？」

「それは、こうするため！」

「え……！？」

いきなり、背中に抱きつかれ、お腹のちよつと下辺りをミソラの暖かい手に触れられ、スバルは顔を真っ赤をした。

「い、いきなりなにを!？」

「はい、落ち着いて……息を吸って？」

「え……？」

「息を吸って？」

優しくも、有無を言わさない迫力にスバルは気おされながら、息を吸った。

「胸で吸っちゃダメ……お腹に空気を入れる感覚で息を吸って、その時、口は大きく開ける」

「こ、こう？」

すうっと息を吸い、吐くとミソラはニコツと微笑んだ。

「そうそう!　まずは呼吸を整える練習からしよう?　歌のうまい人は呼吸の仕方がうまい人が多いんだ?」

「呼吸？」

首だけ、ミソラのほうを向くとミソラも満面の笑顔でスバルの身体に自分の身体をより、密着させた。

「こうだよ？」

「え……」

背中越しにミソラのお腹が空気で大きくなるのを感じ、スバルは彼女のぬくもりと大胆な行動に真っ赤になった。

「……じゃあ、シューティングスターを歌ってみようか？」

「う、うん……」

「私に合わせて、歌ってみて？」

「わ、わかった……」

また、お腹に空気を入れ、ゆっくりしたペースで歌い始めるミソラにスバルも彼女の身体のぬくもりを感じながら、ゆっくり歌い始めた。

不思議だった。

あれだけ、音程の狂っていた歌がミソラの言うとおりに歌うと、不思議とテンポ良く、うまく歌えた。

「……よし!」

ゆつくり、スバルの背中から離れるとミソラは少し、顔を赤らめ、ニコツと微笑んだ。

「これだけ歌えれば、十分だよ……格段とうまくなった！ 元々、スバル君、声がいいし？」

「あ、ありがとう？」

「じゃあ、今度は私が聴いてあげるから、一人で歌って……シューティングスターね？」

「え……？」

顔を真っ赤にするスバルにミソラはケラケラと笑った。

「大丈夫……笑わないから？」

「う、うん？」

本当かな？

「……」

今度は一人で歌を歌い始めるとスバルの身体に妙な感覚が思い出された。

それは先程までの、ミソラの身体のぬくもりと上下するミソラのお腹の柔らかさ……

そんなことを思い出しながら、歌を歌い続けると不思議と今まで自分でも耳を閉じたくなった音程が自然な歌声へと変わっていた。歌を歌い終わるとスバルは驚いた顔でミソラを見た。

「すごいよ、ミソラちゃん！？ ほんのちよっと練習しただけなのに、ちゃんと歌えてるよ！？」

「まあ、プロと比べれば、まだまだだけどね？」

「て、手厳しい……」

ミソラのキツイ冗談に苦笑し、スバルは優しい声でいった。

「お礼をしないといけないね……今度、なにか奢るよ？」

「そんなものいらないよ？」

「え……でも、お礼は」

「……わかってるくせに？」

どこか大人びた笑顔を浮かべるミソラにスバルもカァ〜と顔を

赤らめ、彼女の頬に手を当てた。

「ミソラちゃん……ありがとう？」

「うん」

チュツ……

「……」

歌の追試を終え、拍手喝采が降りるとスバルはテレた顔で頭を下げた。

「ありがとうございます」

「スゲーな、スバルの奴？ 委員長の次くらい、うまくなってるぜ？」

ゴン太の感嘆とした言葉にキザマロもメガネをズリ上げ、頷いた。

「あれは相当、効率的な練習をしたんでしょうね？」

「スバル君の評価はいいから、次はアナタ達の番よ？」

ルナ（スバル達の追試に付き合ってるだけ）の一言にゴン太とキザマロは慌てて道德のいるピアノの前に立ち、直立不動した。

スバルもルナの隣に戻ると、恥ずかしそうに聞いた。

「どうだった、僕の歌？」

「まあまあね？」

ニコツと口で言うほど厳しい顔をせず、優しい顔をするルナにスバルも満足そうに頷いた。

「よかった……練習した甲斐があったよ？」

「ところで、たった一日でどうやって、あれだけうまくなったの？」

「ウツ……」

昨日の密着感を思い出し、スバルは顔を真っ赤にした。

ソングボディーレッスン (後書き)

この時は「歌」と「練習」と「水着」と「密着」と……
最後の密着の部分だけ強く強調したく出来たのがこれでした。
何気に気に入っている作品です。

キスミーキスミー

「ふう〜ん……ここがベイサイドシティーか？」

自分が住んでいる町よりも遥かに都会なビル郡にスバルは頭の後ろをかき、ため息を吐いた。

「なんの気なしに都会遠征まで来たけど、見事にやることないな？」

《なら帰るか……どうせ、電波空間で来たんだしな？》

「それもそうだけど……せっかく来たから、なにか都会のものを買って帰りたいなって思ってた？」

《完璧におのぼりさ……》

プツンツ……

「ウォーロック？」

音を立てて声の消えたウォーロックの声にハンターVGを手にとると、スバルはアチャ〜と片目を隠した。

「電池切れしちゃってる……また、ウォーロックに怒られるだろうな？」

ハンターVGも立派な電子端末機である。

その機動力の原点は当然、電気である。

電機が元で動けば、当然、電池は減る。

電池が減れば、充電が必要となる。

もし、それを忘れれば、当然、電池はなくなり、ハンターVGは使い物にならなくなる。

いつの時代も、電子機器が逆らえない敵は電気である。

改めて、スバルはその事を痛感し、ため息を吐いた。

「困ったな……どうやって帰ろうかな。これじゃあ、ロックマンに変身できない？」

ポタポタ……

「うん？」

額に当たる水滴にスバルは顔を上げた。

「ゲッ……雨が降ってきた!？」

一瞬で土砂降りになった雨に身体を打たれ、スバルは泣きだしそうにうなった。

「……今日は厄日だ」

全身ずぶ濡れの状態で、とりあえず、駅まで戻ることにした。

それから、どうやって帰るかは、雨宿りした後を考えればいい。遠出したもののさだめというかなんというか……

と思ったら……

「小銭がない……」

というよりも、お金自身持っていない。
財布を忘れたのだ。

「とことんバカだ……僕は？」

「あれ、スバル君……なんでここに？」

「え……」

ずぶ濡れの顔を上げると、そこにはコンビニ袋を片手に傘を差した少女がいた。

「ミソラちゃん？」

傘を持って、不思議そうに自分を見るミソラにスバルは思い出したように手を打った。

「そうか……ここはミソラちゃんの住んでいるところだった？」

「よし……こんなもんな？」

ずぶ濡れのスバルの服を洗濯機の中に入れるとミソラは急いで二階に昇り、スバルのいる、自分の部屋へと戻った。

「スバル君の服、洗濯機にかけたから、少し待ってってね？」

「あ……ミ、ミソラちゃん、こっち見ないでよ!？」

慌てて、バスタオルで身体を隠し、スバルは乙女のように恥ずかしそうに小さくなった。

そんなスバルの姿を見て、ミソラもドキッと胸を高鳴らせ、顔を

真っ赤にした。

「で、でも、スバル君も友達がいがないよね？ ベイサイドシティに来てたなら、連絡くらい、くれればいいのに？」

「う、うん……そ、それもそうだったね？」

実際、ここに住んでいたことを忘れていたなど、口が裂けてもいえなかった。

「そうだよ！ だから、ハンターV Gも電池切れになるし、雨だつて急に降るんだよ？」

「言い返す言葉がありません……」

かなり一方的な言い方な気もしたが、実際、ミソラのことを忘れていたのも事実、言い返す言葉があれば、ぜひ教えてほしかった。

それに言い訳して、家を追い出された、この雨の中、歩いて家に帰ることになる。

それだけは避けたかった。

「とりあえず、ハンターV Gの充電が終わるまでここでノンビリすればいいよ？」

「ありがとう、ミソラちゃん？」

「うん！ 貸し一だからね？」

「わかったわかった……」

ふふつと微笑むスバルにミソラもテレたように笑い、部屋のベッドをイス代わりに座った。

「ところで、服の洗濯が終わって、乾燥機にかけるまで二時間くらい……その間、暇だし、なにかして遊ぼう？」

ゆっくり雨の激しい窓の外を見た。

「こういう雨の中でしか遊べないときってあるでしょう？」

「そ、そうだね……？」

スバルもちよつと恥ずかしそうにミソラの部屋を眺めだした。

綺麗な部屋だな……？

これぞ、女の子の部屋だと言わんばかりの桃色の雰囲気がよく似合う部屋だった。

全体を品良く色とりどりにカラーリングし、床にも床シートを敷き、実用性にも組んでいた。

以前、クラス委員長もやっている白金ルナの家にもやってきたことがあった。

だが、あの部屋は色で現せば、桃色じゃなく、純白といった感じであつた。

白と桃色……

どちらも、女の子の部屋として栄えるものがあるが、今自分がいるのは桃色の部屋だつた。

男のいろんな心をくすぐるには少し刺激的な色であつた。

「もう……スバル君たら？」

スバルの視線を察したのか、ミソラも恥ずかしそうに顔を赤らめ、立ち上がった。

「雨の中の部屋でやることといえば、やっぱり、トランプだよな？」
机の中に入れてあつたトランプを取ると、ジャ〜ンと見せ付けた。

「アイドルトランプだよ？」

「アイドルトランプ……？」

スバルは記憶の本棚を整理するように言葉を発した。

「確か、それって、人気アイドルを二次元化して、トランプにしたカードだよな？」

「そう！ このトランプ、なんとジョーカーとスペードのエースが私の絵柄なんだよ？」

「なんか、どっかで聞いたことがある響きだな？」

ジョーカーとエースに過敏に反応するスバルにミソラは不思議そうに顔をしかめた。

「まあ、いいや……じゃあ、なにをしようか？」

「う〜ん……そうだな？」

腕を組んで、頭をひねらせるとミソラは元気よく叫んだ。

「じゃあさ、ブラックジャックやろう？ ブラックジャック！」

「ブラックジャックね？」

一瞬、頭を回転させ、他に楽しいゲームが思いつかなかったので首を縦に振った。

「じゃあ、ブラックジャックをやるうか……ルールは大丈夫？」

「うん！ ルールは単純……引いたカード選択し、二十一に最も近い数字を出したプレイヤーが勝利。ただし、二十一を超えた場合、その時点で敗北。一回に引けるカードは二十一を超えない限り、何枚でもオーケー。ルールは大丈夫？」

「うん！ じゃあ、始めようか？」

「ちよっと待って！」

ビシッと、制止され、スバルは不思議そうにミソラを見た。

「ただ勝負するのもつまらないよ？」

「つまらない？」

「そう。だから、賭けをしない？」

「賭け？」

目をパチクリさせるスバルにミソラはえへへと笑った。

「勝ったほうは負けたほうに好きな命令ができるってのはどう！？」

「ありきたりだね？」

「なら……新機軸！」

どこから取り出したのか、俳句用の短冊と筆を取り出し、スラスラと書き出した。

「あらかじめ用意した命令文を五・七・五で命令するってのはどう？」

「新機軸かどうかわからないけど、若干、風情はあるね？」

まあ、和洋折衷だけど……

クッククツと笑い、スバルも短冊に命令文を書き出した。

「じゃあ、それを隠して、勝ったほうが命令をオープンできるってことで？」

お互い、短冊を裏返しにし、ジャンケンをした。

「最初はグー……」

「ジャンケン……」

「ポンッ！」

スバル（グー）、ミソラ（チョキ）……

スバルの先攻。

「それじゃあ、まず、一枚引かせてもらおうよ？」

最初に引き、床においた。

「スペードの五だね……もう一度引くよ？」

もう一枚引き、今度はジャックが出た。

「絵札は全て十とカウントするから、五十で十五……引くか引かないか考え物だな？」

「六以下なら、スバル君の有利、六より多ければ、スバル君の負け。どうする？」

どや顔をするミソラにスバルもふうとため息をはいた。

「ここは勝負に出ず、手堅くいくよ？」

「じゃあ、私のターンね？」

一気に三枚カードを引き、バンツと叩きつけた。

「やっぱり、カードは勢いでしょう？」

キングと七と二……合計十九。

「やった！ 私の勝ち！？」

大喜びでハシャぐミソラにスバルも腕を組んで、うなった。

「次にキングがでたってことは、僕の選択は間違ってたけど、勝負運はミソラちゃんが上ったってことだね？」

「そうだね？」

背中であ、引いたカードをベッドの下に隠すと、ミソラはえへへと笑った。

「じゃあ、約束の命令ね？」

「ちよつとタンマ！」

「はい？」

いきなりタイムをかけられ、ミソラは目を不思議そうにしばたかせた。

「僕たちまだ小学生だから、その節度を守っての命令にしてね？」

「任せて！ 節度バッチリ、いつもの私たちだから？」

「いつもの？」

引っくり返された短冊を見て、スバルは呆れた顔をした。

『接吻を してくれるよね 唇に』

「……品がない」

「なにか言った？」

「いえ、まったく!？」

ぶんぶん首を振り、スバルは誰もいないはずの部屋で人の姿を確かめ、深く息を吸った。

「じゃあ、僕からいく……ッ!？」

押し倒すようにキスをされ、スバルは目をギョツとさせ、真っ赤になった。

「う……うう」

仰向けにされ、奪うキスをするミソラにスバルは苦しそうに顔をしかめた。

だが、すぐに冷静さを取り戻し、今度は自分がミソラの身体を抱きしめ、唇を吸った。

「ふう……」

いったん、唇を離し、ミソラは今度はスバルの首にキスをした。

「ああ……ミソラちゃん？」

ミソラが首から唇を話すと、今度は仕返しといわんばかりに、スバルがミソラの鎖骨に唇を当て、強く吸った。

「ス、スバル君……そこダメ……」

顔を紅潮させ、色っぽい声を出すミソラにスバルはどこか興奮した顔で唇を離した。

「はあ……はあ……」

「ス……スバル君」

また、目をトロンとさせるミソラに二人はまるでお互い戦ってるように覆いかぶさり、キスを繰り返した。

「……」

「……」

二人とも真っ青な顔で、背中を向き合っていた。

その首筋にはいくつものキスマークや涎の後があり、二人がどれだけのすごいキスをしたか、目に見えて明らかだった。

さすがにやりすぎた。

してる最中はお互い幸せだったが、いざ冷静になるとどれだけ、浅ましいことをしていたかで、お互い自己嫌悪していた。

「あ、あのさ……ミソラちゃん？」

「う、うん……今、話しかけないで……自分がいたたまれない」

「うん……僕もいたたまれない」

お互いガックリ膝に顔を埋めるとスバルは思い出したようにハンターV Gを手を取った。

「あ、そうだ！？ もうそろそろ、充電が……されてない」

「あ……そ、そうだったね？ 意外に電池が弱ってるのかも……こ、今度、変えたら？」 「う、うん……」

また、会話が持たなくなり、スバルは逃げるように窓の外を見た。

「雨が強くなってる……」

ドガシャ~~~~ン！

「ひああ!？」

いきなり降ってきた雷にミソラはビックリし、思わずスバルに抱きついてしまった。

「ミ、ミソラちゃん……」

「あ……ご、ごめん」

抱きついたまま、また動けなくなってしまった二人はお互い見つめあったまま、顔を赤くしてしまった。

「……後、一回だけなら？」

そっと顔を近づけるミソラに……

「う、うん……一回だけなら」
スバルも顔を近づけ、目を瞑った。

次の日……

「キヤアアアア……ムグッ!？」

思わず叫んでしまった口を押さえ、ミソラは自分のベッドの横に眠っているスバルを見た。

「えっと……なんで、私のベッドにスバル君が寝てるの？」

昨日のことをよく思い出してみた。

「えっと……確か、あの後、ちょっとだけ、キスを二時間くらい繰り返し……疲れたから、お風呂でシャワーを順番に浴びて、その後、雨がもっと酷くなつて帰れなくなつたから、スバル君のお母さんに嘘の泊まりの報告をし……その後」

また、キスをして、お互い気を失うまでせめぎあったのだ。

「あ……ああ!？」

今度こそ再起不能になりそうなほど顔を真っ赤にしミソラは慌ててベッドから飛び出し、お風呂に向かった。

そして、パジャマを脱ぎ、大切などころをチェックし、大丈夫なのを確認し、今度は、身体中にキスの跡がある事に気付き、慌てて厚着を着て、ごまかし、部屋に戻った。

「まだ、スバル君は寝てるよね？」

昨日は相当、体力を使ったから、起きるのは当分先になると思う。だけど、念のため、自分のハンターVGを取り出した。

「調子に乗りすぎた」

よく見るとコンセントの挿さってない充電器をコンセントの穴に挿し、自分のハンターVGの電池を取り出し、スバルのハンターVGの電池と取り替えた。

「本当はもうちょっと、ロマンチックな夜にするはずだったのに？」
まさに大人も裸足で逃げるような熱いキスを繰り返す夜となって

しまった。

今でも、自分たちがなにをしたか思い出し、身体中が熱くなるのを感じた。

そして、同時にあの夜のキスをもう一度、やりたいという欲求が支配し始めた。

「……スバル君？」

そつと、スバルの顔を覗き込み、ミソラは荒い息遣いで赤くなつた。

「あれ……ミソラちゃ……ッ!？」

起きざまに唇を奪われ、スバルは顔を真っ赤にし、目をトロンとさせた。

「朝ごはんの時間まで……ちょっとだけ？」

そういうミソラの目もトロンとし、奪うようにまた、キスをした。今日もキスを繰り返す一日になりそうだった。

キスミーキスミー (後書き)

ミソラちゃんの家はどうすれば合法的に泊まれるか考え、出来たのがこれでした。そして、付加要素でキスを濃密にと考えたのがこれです。

うまくいったのかね、これって？

情熱的に

「うう……はあ……」

唇から糸を引き、荒い息を吐くと女性は色っぽく紅潮した顔を綻ばせた。

「もう……あなたって、本当、自分の唾液を私に飲ませるのが好きよね？」

プツンッ……

「あ……？」

ビデオを消され、ミソラはぷくうくうとなって、ハンターVGを見た。

「ちょっと、ハープ……今、いいところだったのに!？」

《良い子が観ていい番組とは思えないけど?》

「後学のためよ……」

《なんの後学よ?》

呆れたため息を吐くハープにミソラは胸に抱いたクマさんの人形を抱きしめ、恍惚とため息を吐いた。

「唾液交換か……?」

《ただ、欲望に忠実なだけじゃない?》

ハープの捨て台詞も聞かず、またさっきのビデオの同じ場面だけ繰り返し観て、羨ましそうにいった。

「こんなキスもいいのかも?」

《ファンが聞いたら、泣くわね?》

「え……ガムのCM?」

事務所につくなり、プロデューサーに聞かされた仕事の依頼にミソラはハテと目をしばたかせた。

「えっと……ガムって、あの歯に優しいスツキリミントで有名な?」

「そう……まあね？」

仕事を持ってきたはずなのにCMプロデューサーの態度はどこかよそよそしかった。

その態度にミソラは一瞬、怪訝そうな顔をし、用意された脚本を見た。

そして、顔を真っ赤にした。

「キスシーンがあるの？」

「キ、キスしたくなるほど口が爽やかになるっていうCMなんだ？」
どこかしどろもどろするプロデューサーにミソラはジト……とした目で見た。

「この仕事、誰が持ってきたの？」

「……マネージャーだよ」

「……」

アッサリ白状したプロデューサーにミソラは額に青筋を立て頭痛を感じた。

あのオッサン、どこまで、人の意思を無視する気……

いい加減、出るところ出ようかと頭を回転させるが……

「あ……!!？」

天命を得たように頭の上にピコンツと電球が光った。

「この仕事、喜んでお引き受けします！」

「え……？」

急に態度を変えるミソラにプロデューサーは不思議そうな顔に聞いた。

「いいの？　今回はさすがにマネージャーのやりすぎが目立つし、

僕が……」

「大丈夫！　私、仕事はえり好みしない主義ですから？」

「……なんか、引っかかるな？」

子供に似つかわしい怪しげな笑顔をにプロデューサーは首をかしげた。

「ということなの？」

「は、はぁ……」

いきなり、電波空間を伝って家にやってきたミソラにスバルは困った顔でうなづいた。

「そ、それで、僕になにを？」

若干、真っ青な顔で、スバルは身じろいだ。

「も・ち・ろ・ん！」

ガバツと獣のようにスバルの上に覆いかぶさり、ミソラは色っぽい顔で舌なめずりした。

「キスの練習！」

「ま、まねごとでしょ……ウムツ！？」

奪われるようなキスをされ、スバルは一瞬、苦しそうに息を詰まらせた。

あ……やわらかい。

時分の唇にダイレクトに伝わるミソラの柔らかい唇の感触にスバルは背中がゾクゾクするのを感じた。

柔らかく暖かく、どこか艶っぽく、気付いたら……

「ウツ……！？」

口の中に舌を入れ、自分の舌を絡ませるミソラにスバルは仰天したように目を白黒させた。

一瞬、ミソラの舌から逃げようと舌を引っ込めるとそれを追いかけるようにミソラの舌が彼の舌を追いかけ、ムリヤリ、舌を絡ませると、今度はスバルが彼女の舌を舐めるように舌を絡ませ、お互いの舌から舌へ、涎が入っていくのがわかった。

「ぷはぁ……」

ミソラが唇を離すと今度はスバルが起き上がり……

「ミソラちゃん！」

「キャツ……！？」

ガバツと仕返しするようにミソラの上に覆いかぶさり、今度はス

バルが彼女の唇を奪った。

「うう……ス、スバル君」

首に腕を回し、より密着度を上げると今度はスバルがミソラの口の中に自分の舌を入れ、ミソラの舌を嚙るように上へ下へと舐め叩き、唾液が注がれ、ミソラはトロロンと恍惚とした目をし、彼の唾液を飲んだ。

変な味……

味がするのかしいのか、実際は、よくわからなかったが、妙に粘っこく、熱く、ちよつとだけ、臭った気がした。

でも、なんだか、飲んでいくうちに身体中がポカポカし、今度は、ミソラが上に立ち、唾液を交換した。

そんなキスを繰り返し一時間も続けた。

キスが終わるころには二人とも、まるで持久走を走りきった顔で肩で息をし、口の周りが涎でいっぱいだった。

「ミソラちゃん……ミソラちゃんの唾液の味って、変な味だね？」

「スバル君のだって……変な味だったよ？」

お互いテレたように微笑みあい、ゴロンツと床の上に寝転がった。

「これって本当にキスの練習なの？」

「もちろん！ 私がスバル君に嘘をついたことがある？」

「嘘はないけど、隠し事が多かった気がするけど？」

「ハハ……一本取られたね？」

ケラケラ笑い、上半身だけ、立ち上がった。

「次はどんなキスをしようか？」

「……ソフトなキスがしたいな？」

「考えておくよ……」

絶対、考えないとスバルは得心した。

後日……

『ムリヤリ、キスしたくなるほどの爽やかさ！ クールミント……』

「……」

テレビを見て、スバルは目を点にした。
リモコンを使い、ビデオを巻き戻しにすると、さっきのCMをも
う一度、観た。

『ムリヤリ、キスしたくなるほど……』

ビデオを止め、スバルはボソリとつぶやいた。

「……これ、キスしてないよね？」

カメラを背にミソラの顔を隠す俳優の背中にスバルは目を何度も
瞬かせた。

《よくある手さ……騙されたな？》

『ムリヤリ、キスしたくなるほどの爽やかさ……』

「爽やかじゃなく、マグマのような暑さだよ……！？」

スバルの泣き出しそうな怒声にお茶を持ってきていた母は不思議
そうに首をかしげた。

情熱的に（後書き）

エロ本読んでたら、唾液を交換する話を見つけ、今回の話に発展しました。

実際、唾液交換は汚いのでやらないほうがいいと思いますよ？（やったことのない人間が言うのもなんだけど？）

ムーンライト・スター

「ムーンライト・スター……」

ギューインツとギターを鳴らし指を止めた。

テーブルに置いた作詞と作曲を見つめ、ミソラは腕を組んだ。

「なんか違う……」

録音した自分の歌声にミソラは苛立ったように組んだ腕に指をトントンした。

「なんかイメージと違う……」

今、ミソラは新曲のボーカルの練習で思い悩んでいた。

《用意された曲に納得してない顔ね……？》

「この歌……なんだか、私に合わない気がするのよ？」

《お……お………大物歌手の言い方ね？ 偉くなったものね？》

「違うわよ……なんか、違うの！？」

ゴロンツと横たわり、ぐるんぐると床の上を転がった。

「違うのよ……この曲は私とは相違なるものだと思ってるの。そう、

「ムーンライト・スター」というタイトルのように、この曲には荘

厳で優しさを讃えてない？」

《荘厳で優しさね？ 奔放でワガママな誰かさんとは対極ね？》

「うるさい！」

バツとハンターV Gを取り上げ、頭上に掲げた。

「響ミソラ、オン・エア！」

《ちょ……ミソラ！？》

部屋が光に包まれ、ミソラの姿が消えた。

「で……遊びに来たと？」

「そう！」

バシンツとトランプを床に叩き出すとミソラはニシシと笑った。

「ストレートフラッシュ……私の勝ちだね？」

「キングのフルハウス……」

「え……？」

顔を真っ青にするミソラにスバルは鼻を鳴らした。

「はい、僕の勝ち……もう掛け点が無いよ？」

「う、うそ……」

掛け点の変わりに用意したシュガーレット・シガーを見つめた。
すでにシュガーレット・シガーはスバルの元に全てあった。
文句なしのボロ負けであった。

「はい……じゃあ、大人しく帰ろうね？　仕事から逃げちゃダメだよ？」

グイグイと背中を押すスバルにミソラは憤慨したように怒鳴った。

「ちよっと、今日のスバル君、冷たいよ？」

「冷たくないよ……いつも通りだよ？」

「ウソ！　だって、いつもなら、もっと遊んでくれるもん！」

「遊んで、その延長でとんでもないことになるんだよ、いつも？」

「あ……もしかして、スバル君、期待してる？」

「イッ!？」

猫のようにミソラは人差し指をペロリと舐めた。

赤く染まった頬に潤んだ瞳はまるで餌を上手にねだる猫のような色っぽさと可愛さがあった。

「そそそそんな訳が無いじゃないか!？」

「もう、スバル君のす・き・も・の!？」

襲い掛かろうとするミソラにスバルは真っ白になった。

また、このパターンか……

ピルルルル……

「あ……電話だ!？」

風のようにハンターV Gを手に取り、ミソラの攻撃を避けた。
だが、次は違う意味で真っ青になった。

「い、委員長……」

『スバル君、今から、カラオケに行かない？ 無料券貰ったから、無駄にするのも勿体無いでしょう？』

「あ……うん？」

ソロ……とミソラを見た。

ミソラは不満そうな顔をして、ハンターV Gを奪い取った。

「私も一緒だけいい？」

『え……なんで、アンタがスバル君ちにいるのよ！？』

「想像の仲だと思うけど？」

『な・ん・で・すって……！！？』

「ひい……！！……」

心底、ビビった顔でスバルは縮みこんだ。

その姿は同姓にしろ、異性にしろ、なんとも情けない姿であった。

『いいわよ、来なさいよ！？ 無料券は三枚あるし？』

「やったー！？」

顔で笑顔を作るミソラだが、その目は笑っていないかった。

ハンターV Gで話しているミソラと委員長の姿にスバルは見えない
しない幻影を見えた気がした。

ハブとマングース。

竜と虎。

矛と盾。

まさに天敵同士の対峙であった

スバルは生きた心地がしなかった。

「~~~~~」

ミソラが歌い終わると、ルナの拍手が降りた。

「うまいじゃない……さすがにプロはやってないわね？」

「まあね？」

ニコツと笑うミソラにルナもニコツと笑った。

この時、スバルの目に矛と盾が見えた。

「じゃあ、次は私ね？」

ミソラからマイクを貰うと今度はルナが選曲した。
その時、スバルの目に竜と虎のイメージが見えた。

「~~~~」

ルナが歌い終わると今度はミソラが拍手を送った。

「上手上手！ さすがお嬢様！」

「ありがとう」

今度はハブとマンダースが見え、スバルはコッソリと二人の点数を見た。

見事な百点の連続だった。

そして、自分はカラオケ屋に来てから、一度も歌っていなかった。

「あの~~~~いい加減、僕も？」

「アンタ（君）は黙ってなさい！」

「ヒィィ!？」

ビクッと縮まるスバルにミソラが選曲しだした。

「よし、これね？」

「ちよ、それ女性同士のデュエット……？」

「え……？」

気付いたときには曲が流れ、二人は慌てたように二つのマイクを取った。

「え、えっと……」

「ちよ、歌いなさいよ……」

慌てて歌い損ねたミソラにルナは代わりに歌を歌いだした。

「あ、ちよっと……」

慌てて後を追うようにミソラも歌い始め、二人の声が綺麗にハマった。

「……」

スバルの顔がホケ~~~~と緩んだ。

ミソラとルナのデュエットは見事に素晴らしかった。

もともと、声のいいもの同士なので、二人の歌は想像以上に栄え

ていた。

しかも、気付いたら、二人はノリを合わせるように踊りを始め、スバルに目線を合わせた。

そして、歌が歌い終わると、二人とも心を落ち着けるようにため息を吐いた。

「ふう………」

ゆっくりお互い目線を合わせた。

ふんつと顔を背けた。

「ワガママアイドル」

「ワガママ委員長」

ジィィと睨み合い、また、ふんつと鼻を鳴らした。

「まあ、歌は認めてあげるわよ」

ルナの言葉にミソラも顔を真っ赤にしていった。

「委員長も、歌が上手だね……うん？」

歌が上手？

不意にミソラは頭の中に浮かんだ曲を思い出し、慌ててカバンの中から一枚のCDを取り出した。

「ちよつと、この歌、歌ってみて？」

「うん？」

耳につけられたイヤホンから音楽が流れ、ルナは怪訝そうに歌を聴いた。

「聴いたことない曲ね？　これをどうしろと？」

「ちよつと私とデュエットしてよ？　リードはそっちがしていいから？」

「……？」

ギターを構えだすミソラにルナも慌ててマイクを手を取った。

ポロンツと音が鳴り、ミソラとルナは合わせるように歌を歌いだした。

「~~~~~」

基本はルナが先頭に立った曲にミソラが合わせて歌を歌っていた。

不思議だった。

曲調はいつものミソラの明るい歌だったが、不思議とイメージが違っていた。

そう、いつものミソラの歌が広い宇宙なら、今のルナがリードしている歌は、人々を魅了する、荘厳な月だった。

歌が終わると、ミソラは今までの険を取るような大きな拍手を送った。

「すごい、委員長！　これだよ、これが私のしたことだったんだよ！？」

「え……？」

いきなり手を握られ、ルナは目をパチパチさせた。

「今すぐきて！」

「え……？」

バビュンツと風を切るようにミソラがルナを連れ去り、カラオケ屋から出て行った。

一人残されたスバルは少し寂しそうに下唇をなでた。

「今回……僕の見せ場なし？」

泣き出しそうな顔をし、マイクを手を取った。

「歌ってやるもん！　まだ、時間あるもん！」

数日後……

「スバル君……これ、プレゼント？」

「え……？」

顔を真っ赤にしたルナにCDジャケットを渡され、スバルは目をパチパチさせた。

「か、勘違いしないでよね！　これは私の初めてのデビュー曲みたいなものだから、みんなに配ってるのよ！？」

「デビュー曲？」

「この前のカラオケのときに、響ミソラに誘われたのよ？　一曲だ

けでいいから、デュエット曲を歌ってくれって？」

「ムーンライト・スター？」

「タイトルよ？」

「へえ……この前のあの曲のこと？」

「結構、練習したから、この前のよりも遥かによくなってるはずよ？　まあ、私が歌うんだから、当たり前よね？」

といいながらも、若干、不安そうに目を細めるルナにスバルはニコツと笑った。

「ありがとう……委員長？」

「ふ、ふん……」

顔を真っ赤にするルナにスバルはニコツと笑った。

「早速、ハンターVＧに取り込んで聴いてみるよ？」

「ぜ、絶対に聴かないとただじゃおかないからね？」

「はいはい……」

耳まで真っ赤にするルナにスバルは微笑ましいものを見る目で笑った。

おまけ

家に帰るとスバルに待っていたのは地獄であった。

「ミ、ミソラちゃん……こ、これには訳が？」

じかに届けに来た新曲にスバルを見下ろしていたミソラは顔を真っ青にして、逝った目で身体を震わせていた。

「へえ……委員長から、いいもの貰ったね？」

「ちょ、怖い怖い！？　本気で怖い！？」

グイッと胸倉をつかまれ、顔を近づけさせると……

「ムグッ！？」

無理やりキスをし、舌を吸い出すようにスバルの舌を自分の口の中に潜り込ませた。

「むぐぐっ……!？」

舌を元に戻そうと必死に舌をコントロールしようとしたが、ミソラの舌のほう一枚、上手だった。

どんなに抵抗しても、いっこうに舌を離さないミソラについてスバルは諦めた。

だらんと腕を下げた。

「ぶはぁ……浮気は許さないよ？」

「僕たち……付き合ってた……ムグッ!？」

またキスという名を借りた逆レイプをされ、スバルは本気で泣き出しそうになった。

ムーンライト・スター (後書き)

委員長も活躍させたいと思い、参加させましたが、後にミソラだけをクローズアップさせてほしかったと、委員長たちの絡みももつとほしいと両方の意見を貰い、いまだにどっちを取れば読者は喜んでくれるのか悩んでいます。

キスする関係【前編】

「みんな～～～～……今日は私のクリスマスコンサートに来てくれてありがとう!?!」

わ～～～～と歓声が沸き起こり、ミソラは高揚した顔でさらに叫んだ。

「今日一日、夜になるまで私の歌でクリスマスを楽しんでね～～～～!?!」

「おお～～～～～～!?!」

また、歓声が鳴り響き、その渦中にいたスバルはついていけない顔で耳を押さえた。

「相変わらずうるさい……」

「ミソラちゃん～～～～ん!?!」

「……」

他の観客にも負けない歓声を上げるゴン太とキザマロにスバルは呆れた顔をした。

「よくみんな、この空気に馴染めるな……僕は何度来ても、慣れないよ?」

「へえ～～～～……何度も来たことがあるんだ?」

「ギクッ!?!」

顔を真っ青にして、スバルは左隣のルナの顔を見た。

ルナの顔はシラ～～としていた。

「そもそも、今回のコンサートチケット、スバル君からのんだけど、どこから手に入れたの?」

「あ……えっと?」

誤魔化すように頬を掻き、スバルはえへへと笑った。

「ごまかすな!」

「ほへんなはい……」

両口を思いつきり引っ張られ、スバルは泣きながら謝った。

その時……

「みんな……私を見てる……!? 特に女の子とイチヤ
ついているバイザー君!？」

「あ……?」

「え……?」

一瞬で注目を集めるスバルとルナにミソラは黒いオーラを発し、
微笑んだ。

「じゃあ、そのバカップルに負けない取って置きを歌います!
最初は「ハート・ウェーブ!」

ワ~~~~と歓声が響き、二人は恥ずかしそうにうずくまった。

コンサートも昼休みに入り、昼食を取るため、会場の廊下に出る
とルナはぶんぶん怒りながら、頬を膨らませていた。

「スバル君のせいで、私まで恥じかいたわ!」

「ご、ごめん……委員長?」

「ごめんじゃないわよ!」

ギロツと睨まれ、スバルは怯えたように震えた。

生まれたての小鹿のように震えるスバルにルナもこれ以上言うの
を諦めたのか、深くため息を吐き、後ろのゴン太たちに叫んだ。

「じゃあ、お昼のコンサートまで時間があるし、さっさと昼食とっ
て休憩にしましょう?」

「おう、委員長?」

ブルルルル……

「うん?」

スバルはポケットに入れてあったハンターVGのマナーモードが
揺れ、コッソリ見た。

「あ……?」

顔を真っ青にして、スバルは叫んだ。

「ぼ、僕、ちょっと用事があるから、みんな先にレストランかどこ

かに行ってて?」

「ちよつと……団体行動を乱さない!?!」

「ご、ごめん……本当に大変な用事だから?」

そういい、スバルはおもむろに股間の辺りをモモでさすりだした。
ルナの顔もボツと赤くなり怒鳴った。

「そ、それなら仕方ないわね……早く行きなさいよ!?!」

「は、は……い……」

ルナ達が見えなくなるまで手を振ると、スバルはガクツと疲れたように肩を落とした。

「疲れる……」

「なあ……にが疲れるの?」

「え……うわあ!?!」

いきなり、首根っこを掴まれ、引きずられるように人の見えない、関係者階段に連れ込まれると、スバルの唇が塞がれた。

「ぷはあ……」

顔を真っ赤にして、唇を離すとミソラは怖い顔でスバルを見上げた。

「私のライブで委員長とラブラブしてるなんて、いい度胸だね、スバル君?」

「べ、別にイチャイチャしてないよ?」

「誰もイチャイチャなんって言ってないもん! やっぱ、ラブラブしてたんだけ!?!」

「そ、そんな勘ねないですよ? 委員長とはなにも無いよ?」

「信用できない! スバル君って、天然ジゴロだし?」

「ジゴロ?」

意味がわからず顔をしかめるスバルにミソラは悔しそうに涙目になった。

「もう知らない! キスだって、もうしてあげないんだから!」

「いつも、ミソラちゃんのほうからしてくせに……」

「……」

また、悔しそうに唇をかむと……

「あ……？」

ニヤリと唇の端を吊り上げ、笑った。

「わかった！ スバル君は私と健全な関係でいたいんだよね？」

「え……あ、うん……まあね？」

乱れた仲なのは確かだし……

「よし！ じゃあ、今日からキスをする関係はなし！ お互い、健全に行こうね？」

パチンツと可愛くウィンクするミソラにスバルはポツと赤くなっ
てしまった。

「じゃあ、今日のライブ、楽しんで行ってね……そうそう、これ連絡の品ね？」

ミソラはカバンの中からお弁当箱を取り出し、スバルに手渡した。

「はい、私のお弁当？ 味は自信ないけど、一生懸命作ったから、出来れば食べてね？」 「う、うん……わかった」

ニッコリ微笑み弁当箱を受け取ると、今度はミソラが真っ赤になり、微笑んだ。

「ス、スバル君……と」

慌てて唇を手で押さえ、ミソラは笑顔で関係者階段を抜け、スバルに手を上げた。

「じゃあ、お昼、会場で会おうね？」

「う、うん……」

スバルもコッソリ、関係者階段を抜け、ミソラを見送ると目の前のお弁当を見た。

「委員長たちの前じゃ食べれないし、帰って夕飯にしよう？」

ゆっくり、自分の持ってきたカバンの中にミソラのお弁当を入れると不意にスバルは、顔を上げた。

「ワガママなミソラちゃんが意外なほどアツサリ、今回は引いたな？」

なにかあるんじゃないかとスバルは身の毛をよだした。

そして、その後、元旦までスバルにとって、ある種の地獄が訪れるのであった。

キスする関係【前編】

（後書き）

初めての続き小説です。

これは個人的には成功した類だと信じています。
テーマは「スバルから迫ったら」です。

キスする関係【後編】

「はい……上がり！」

ペシッとストレートの揃ったランプを見せ、ミソラは微笑んだ。

「私の勝ちだね……？」

えへへと笑い……

「じゃあ、罰ゲームは？」

「ッ!？」

バツと構えるスバルにミソラはピンツと百円玉を弾いた。

「ワツと……!？」

慌てて投げ渡された百円玉を見て、スバルは首をかしげた。

「ジンジャーエール買ってきて？ 差額はスバル君持ちね？」

「え……？」

不思議そうにミソラを見た。

ミソラも笑顔で首を傾げる。

「どうしたの？ 罰ゲームだよ、スバル君？」

「あ、ああ……うん」

百円玉を財布の中に入れ、コートを着ると、スバルは自販機の置いてある外へ出て行った。

ミソラがキスをしないといい始め、すでに四日経っていた。

あのキスをしないという宣言通り、ミソラは健全な友達付き合い合いをしていた。

キスにもつれ込まれそうな状況が一転してキスがなくなった日常が降りかかった。

最初は安心した気持ちもあったが、ここ最近、なぜか、心にポツカリ穴が開いたような虚無感が襲い掛かっていた。

自販機でジンジャーエールを買おうとスバルは家へと帰っていった。

ちなみに、差額二十円、出た。

「ごくごく……ぷはぁ？」

おいしそうに喉を鳴らし、缶ジュースを唇から放すとミソラは満足そうにうなった。

「おいしいね、ジンジャーエールって？」

「あ……うん？」

どこか上の空のスバルにミソラはニヤニヤ顔でいった。

「どうしたの？　もしかして、欲求不満？」

「ち、ちがうよ！？」

「そうなんだ？」

飲みかけのジュースを見て、ミソラはスバルを見た。

「飲む？」

「え？」

顔を真っ赤にするスバルにミソラは意地悪そうにジュースを飲み干した。

「ダ……メ！　間接だって、キスはキスだもん？」

「……………」

一瞬、悔しそうな顔をするスバルにミソラは思い出したように手を叩いた。

「あ、そうだ、これ、スバル君に渡すんだった？」

「うん？」

ポケットからライブのチケットを手渡された、スバルは首をかしげた。

「正月ライブ？」

「元日のライブ……特別S席一人分用意したから、絶対に来てね？　普通なら、倍率が半端無いから、今じゃ、絶対に手に入らないから？」

「あ、ありがとう……」

チケットを貰い、気付いたら、ミソラの唇に視線を集中させている自分に気付き、スバルは慌てて首を振った。

「じゃ、じゃあ、元日一番に行くよ?」

「うん!」

そうそうと、手を叩いた。

「明日から、私、仕事で遊びにこれないから、今度、会うのは来年になるね?」

「え……そ、そうなの?」

少し、残念そうな顔をするスバルにミソラは満面の笑顔でいった。
「じゃあ、私、明日の仕事があるから帰るね?」

「あ、ミソラちゃ……」

一瞬で、光に包まれ消えていったミソラを見て、スバルは深いため息を吐いた。

《生殺し状態か?》

「うるさいよ、ウォーロック!」

軽く怒鳴られ、ウォーロックはヘイヘイと呆れながら頷いた。

それから、スバルのモヤモヤした日々が続いた。

ミソラと遊ぶ時間はなくなったが、基本、連絡を取り合う時間はいくらでもあった。

だが、会えない分だけ、なぜか、心のモヤモヤは増えていく一方で、気付いたら……

「おう、スバル……実は宿題忘れ……」

「ッ!」

ギロツと睨まれ、ゴン太は怯えたように言葉を詰まらせた。

「あ……その……」

スバルの尋常じゃない目付きにゴン太は回れ右した。

「す、素直に怒られます」

「ふん……」

という具合に、スバルの心がやさぐれていた。
そして、正月ライブの当日……

「……」

まるでニコチン中毒者のような異様な殺気を持つスバルに会場入場者は怯えたように、彼から道を開けていた。

《おい、スバル……みんな、怯えてるぞ?》

「うるさい!」

《……》

ウォーロックもなにも言うまいと黙り込む。

「別に僕はイライラなんかしてないよ?」

「へえ……そうなんだ?」

「うん……うわぁ!」

振り返りざま、首根っこを掴まれ、強引に関係者部屋に連れ込まれるとスバルの唇に温かい感触が包まれた。

「ッ……!」

目に映るミソラの顔にスバルは顔を真っ赤にし、固まってしまった。

彼女の唇を感じると、不思議と心が楽になるのを感じた。

それは今まで心に刺さっていた針がスポッと取れたような安心感が訪れていた。

気付いたら、スバルは彼女の身体を強く抱きしめていた。

「ぷはぁ……」

唇から糸を引き、顔を離すとミソラはニコツと笑った。

「あけましておめでどう……スバル君?」

「お、おめでどう……ミソラちゃん?」

さっきまでやさぐれていた気持ちがウソのように穏やかな顔をスバルにミソラは、いたずらっ子のように聞いた。

「やっぱり、私とキスできなくて、寂しかった?」

「……」

否定したかったが、否定できない気持ちにスバルは苦い顔をした。

「ほら、スバル君？」

「イツ！？」

いきなり、右手を掴み、自分の左胸を押し付けるミソラにスバルは顔を真っ赤にした。

「感じる……私の心臓の鼓動？」

「う、うん……」

それ以上に成長しかけた胸の柔らかさを感じるが……

「私だって、スバル君とキスできなくて、欲求不満だったんだよ？」

もっと強く、自分の胸を押し付けるミソラにスバルは顔をますます赤くした。

「ほら……もっと、私の胸のドキドキを感じて？」

胸に手を押し付けたまま、また近づき、唇を近づけると……

「大好きだよ？」

また、キスをした。

「みんな……お昼のライブ、楽しんでいてね……？」

「おお……！！？」

歓声の上がる客席でスバルはミソラとほんの少しだけ、目線をあわせ微笑んだ。

「今年も大変な一年になりそうだな？」

そういい、スバルは唇の下を優しく人差し指で撫でた。

キスする関係【後編】 (後書き)

なにげペツティングはこれが初めて。
自分でも読み返したとき、エロいなと自画自賛しました。

そうなん♪

「でね……今度、スキーしに旅行に行きたいんだよ?」

ハンターVGに映るスバルにミソラはニッコリ微笑んだ。

「今、冬休みに入ったでしよう? もちろん、旅費は私が持つよ……
……こう見えても、セレブなんだよ?」

『お金はちゃんと自分で払うよ、でも……旅行って事は泊まるんだ
よね?』

「日帰りじゃなく、一泊二日ってところかな? 電波空間を使えば、
楽して日帰りも出来るけど、やっぱり、趣って大切じゃない?」

『でも、最近、僕、出歩きが過ぎるからな……母さんになんて、言
い訳しよう?』

「あ、それなら大丈夫。ちょっと、お母さんと代わって?」

『え、いいけど?』

ぷつんと保留音が鳴り、数秒後、また、電話がつながった。

『あら、久しぶり、ミソラちゃん? どうしたの、いきなり?』

優しい笑顔でニッコリ笑うスバルの母、あかねにミソラもニッコ
リ笑いいった。

「実は今度、スバル君とスキー旅行に行きたいんです!」

『スキー旅行? あらあら……最近の娘は進んでるのね? で、見
返りは?』

ニヤニヤと笑うあかねにミソラもバッチリと親指を立てた。

「お望みの結果をお届けします!」

『よろしい!』

あかねの視線がミソラから離れ、

『スバル……男になってきなさい!』

『はい!?』

真っ青になっているスバルの顔を想像し、ミソラはふふつと微笑
んだ。

そして、数日後……

新幹線に揺られながら、外の風景を見てみると、スバルは隣でUNOかトランプ、どっちで遊ぶか悩むミソラを見た。

「これから行くスキー場って、どういうところなの？」

「風光明媚な山地で、最近、自然を活かしたホテル事業が盛んな、いい所だよ？」

「へえ……風光明媚か？」

漢字からして、すでに綺麗な言葉を並べるミソラにスバルは肝心なことを聞いた。

「でも、それだと、相当高いんじゃない？」

「抜かりなく！」

ブイサインが出された。

「実は、私、ロケで一度、そこを特集したことがあって、その事で特別価格にしてくれたんだよ？」

「そうなんだ？」

ミソラの無邪気な笑顔にスバルもクスツと笑った。

「どうかしたの？」

「ううん……別に？」

きつと、こんな無邪気さもあるから、ホテルの値段も特別価格になってるんだろうな？

スバルは一瞬だけ、自分から、ミソラの唇にキスしたくなる衝動を感じ、慌てて抑え阿多。

ダメダメ！ 人がいるんだから……

「どうしたの、スバル君？ 今度は顔を真っ赤にして……」

一瞬、不思議そうな顔をしたが、すぐに気付いた顔でニヤリと笑った。

「エッチなこと考えた？」

「ち、違うよ！？」

鋭い……

数時間経ち、白銀の世界の広がる山奥のホテル「マーキュリー」につくと、スバルは、怖い顔でミソラに詰め寄っていた。

「あのさ……旅行の日取りやホテルの部屋貸しまで、全部任せたのは、僕のほうだよ？」 「うん！ いい部屋借りれたでしょう……ほら？」

窓から見える一面の銀世界の風景にミソラは感嘆とした笑顔を浮かべた。

十階もある部屋から見る外の景色はまさに絶景である。

「ベッドだって、大きいのが一つ！」

「なんで、二人一部屋の部屋を借りたの!？」

テヘツと笑うミソラにスバルはさらに詰め寄った。

「ミソラちゃん、僕達の年齢を言ってみて？」

「十一歳でしょう？」

「十一歳の男女が、同じ部屋を使うのはどうかと思うけど？」

「なんで？」

「わかってるでしょう!？」

「えへへ……」

可愛く笑うミソラにスバルはこれ以上ムダだと諦めた。

「……僕は床で寝るよ」

「大丈夫だよ……ほら、スイートルームも兼ねた部屋だから？」

「やっぱり、確信犯だったのかよ!？」

「えへへ……？」

「えへへじゃないよ……道徳を守ろうよ？」

「道徳を気にしたら、負けだよ？」

「なにに負けるか知らないけど、もういいよ……」

深くため息を吐き、スバルは壁に立てているスキー板を取り、肩に乗せた。

「じゃあ、行こうか……こう見えても、スキーは得意なんだよ?」

「そうだね……滑りで勝負しようよ?」

「負けないからね?」

「うん!」

「ひゃっほ~~~~~!」

バシユンツと雪のコブを利用し、高くジャンプするとミソラは身体能力を活かした華麗な着地をし、雪上に止まった。

「ほらほら、スバル君、こっちこっち!」

「わかってるよ~~~~~!」?

ミソラに続くようにスバルも雪のコブからジャンプし、格好良く着地した。

「ふう~~~~~」

スキー用のゴーグルとマスクを外すとスバルは汗をかいた顔を拭いた。

「ミソラちゃんって、意外とスキーで飛ばすタイプなんだね?」

「こう見えても、戦うアーティストだから?」

ブイサインを出すミソラにスバルもクスクスと笑った。

「じゃあ、ゴールまで競争だよ?」

「うん! じゃあ、先に行ってるね?」

「あ、ミソラちゃん、フライング……あ!」?

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「じ、地震!」?

「え……キャアアア!」?

突如、強く揺れだした雪地に足を取られたのかミソラは足につけていたスキー板がはずれ、大きく空に放り出されてしまった。

「ミソラちゃん!」?

空に放り出され、コースから外れた林道に入ったミソラにスバルは慌てて、スキー板を外し、後を追いかけた。

「う……うう……」

目を覚ますと、ミソラはハッとガバッと固い床から起き上がった。

「ここは？」

羽織られていた毛布を掴み、ミソラは自分の身体を見た。

「キャッ!？」

下着以外、なにも身に着けていない自分にミソラは顔を真っ赤にして肌を隠した。

そして、背中を向け、火に薪をくべるスバルを見つけ、つぶやいた。

「ス、スバル君……なんで、私、下着姿で？」

「えっと……」

スバルも背中越しで真っ赤なまま、コテージと思われる部屋の隅っこ指差した。

そこには、ミソラが着ていたピンク色のびしょ濡れのスキーウェアがあった。

「林道を転がってるうちに濡れたらしく、ぬ、脱がせたんだ」

「そ、そうなんだ？」

ミソラも毛布で包まりながら、コテージの窓を見た。

「吹雪だ？」

「さっき、連絡したら、この吹雪のせいで助けにこれないみたい。

幸い、落ちた場所に、遭難者用の緊急避難所があって、そこで今日は泊まることになったんだ。明日には、助けがくるみたい」

「そう……なんだ？」

ハクシュとくしゃみをした。

「大丈夫、ミソラちゃん？」

「あ……?」

若干、恥ずかしそうに裸体を隠し、ミソラはえへへと笑った。

「だ、大丈夫だよ……ス、スバル君こそ、大丈夫だった？」

「うん。僕は大丈夫……ミソラちゃんも、冷えてたら言ってね。コテージの焚き火足すから?」

「うん……?」

ミソラは首をかしげた。

「スバル君……もしかして」

ゆっくり、毛布から出て、スバルに近づいた。

「ミ、ミソラちゃん……下着のまま!?」

「いいから?」

ミソラは恥ずかしさを忘れたように下着のまま、スバルの額に自分のおでこを乗せた。

「ミ、ミソラちゃん?」

下着だけのミソラに顔を真っ赤にするスバルだが、彼女はすぐに額を離れた。

「やっぱり……ちよつと熱っぽい。もしかして、私をここに運ぶまで、時間がかかったんじゃない?」

「……ちよつとだけね?」

熱で真っ赤になった顔を綻ばせるスバルにミソラは少し悲しそうに目を細めた。

「私のせいでごめんね……」

ゆっくり、毛布を手に取り、自分とスバルの上に敷いた。

「ほら……こうすれば、暖かいでしょう?」

「ミソラちゃん……」

ミソラの裸の肩に身体を乗せるようにスバルは少し熱っぽい息を吐いた。

「助けるつもりが、助けられる立場になっちゃったね?」

「そんな事ないよ?」

ミソラもスバルに身体を寄せるように毛布を二人で分け合うとふつと微笑んだ。

「もしかしたら、初めてかもしれないね?」

「なにが?」

「私がスバル君を助けるのって？」

「そうかな……僕のほうが、ミソラちゃんに助けられてる気がするけど？」

「どんなところが？」

「……」

スバルは少し、考えるように目を瞑り、ミソラの肌のぬくもりを感じた。

「ミソラちゃんの明るい笑顔や、温かい心……なによりも、一番最初のブラザーだもん。ミソラちゃんにはいつも、勇気を貰ってるよ」

「だから、いつも戦えるって事？」

「格好つけすぎかな？」

「いいと思うよ……スバル君はいつも格好いいんだもん」

スバルを巻き込むように寝転がり、ミソラはゆっくり、彼の服を脱がしていった。

「ミ、ミソラちゃん……」

熱のせいでうまく思考が働かないのか、抵抗しないスバルにミソラは優しく微笑んだ。

「大丈夫だよ……ただ、衣服越しよりも、肌同士をくっつけたほうが温かくなるだけだから？」

完全にスバルを下着だけにすると、ミソラも下着だけの姿で彼に抱きついた。

「温かいね……スバル君の身体？」

「うん……温かい、ミソラちゃん」

ミソラのぬくもりを感じながら、スバルはゆっくり、眠りの中へと入っていった。

「おやすみ、スバル君？」

安らかな眠りに入るスバルにミソラはコッソリ、キスをした。

朝が来ると、ミソラは窓から飛び込む暖かな太陽の日差しを感じ

目を開けた。

「あ……？」

下着姿で抱き合って寝ていたことを思い出し、ミソラは恥ずかしそうに微笑んだ。

「おはよう、スバル君？」

スバルを起こさないよう、ゆっくり、毛布から出て、ミソラは乾いているスキーウェアを羽織った。

「さあ……救助隊が来るまで、スバル君とコテージデートを楽しもうかな？」

スツカリ熱の冷めた顔をするスバルにミソラはコテージに用意された缶詰を選別した。

「けっこう、いいものが揃ってるな？」

それから、ミソラ達が救助隊に助けられるのに一時間とかかった。その間、ミソラはスバルの寝顔を見つめ続けられ、幸せだったという……

そうなん♪ (後書き)

雪山遭難ネタで裸で暖を取るを思い出し、書きました。
加速度的に変態ネタが増えています。

風邪の特効薬

ピルルル……

「やっぱり、電話に出てこない」

ハンターV Gの電話機能をオフにし、ベッドに投げ捨てるミソラは憂鬱そうに床の上で体育座りした。

「もう二日もスバル君、電話に出てくれない……もしかして、私のこと避けてるのかな？」

《気のせいよ……スバル君だって、いろいろ忙しくて、気付いてないだけよ?》

「気付かれない程度の関係だったのかな？」

ツツと自分の下唇を指でなで、ため息を吐いた。

「付き合ってると思ってるのは私だけなのかな？」

《さあ……あの子に関してはタラしそうだし?》

「タラしじゃない! ただ、ちょっと、優しいから誤解する女の子が多いだけだよ!」

《世間ではそれを「タラし」というのよ?》

ついでにその理屈から問うと、自分も誤解している少女の一人になるのだかと、ハープは黙っておくことにした。

「スバル君……会いたいな？」

《会えばいいじゃない?》

「え……?」

ベッドの上のハンターV Gを見て、ミソラは目を輝かせた。

「うん!」

「頭が……」

「はいはい……」

ベッドの上で堰をするスバルにルナはため息を吐いた。

「黙って寝てる。世話が焼けるんだから？」

パッパッと濡れタオルを絞るとルナはニコツと笑った。

「新年を向かえて気が緩んだわね？ 見事に風邪をひくだなんって？」

「ぼうじわけありません……」

「ガラガラ声で返事しなくっていいわよ？」

机の上のハンターVGを見て、スバルに聞いた。

「着信があるわよ？ 最後に電話とったのいつ？」

「覚えてない……というよりも、気付かなかった？」

「まあ……この娘なら、大丈夫でしょうけど？」

「だくぐれが大丈夫だって？」

「え……？」

シュバンツと部屋全体が光に包まれ、ギターの音が鳴り響くと、ミソラはジト目でルナを睨んだ。

「お久しぶり……委員長？」

「ミソラちゃん……」

一瞬で、バチバチと火花の散る二人の視線にスバルの唸り声が響いた。

「静かにして……うるさくって、頭が割れる……」

「ウッ……」

「ムッ……」

慌てて口を塞ぎ、二人とも黙ったまま睨みあった。

だが、すぐにルナの態度が変わった。

「私は昨日から世話してたから、今回は譲ってあげるわよ？」

「……え？」

ニコツと優しく微笑み、ルナはスバルの部屋を出て行った。

二人きりになるとミソラはスバルの顔を見て、ゆっくり、おでこをくつつけた。

「熱い……」

《熱を出してたから、連絡が取れなかったのね？ よかったじゃな

い、嫌われてたわけじゃなくって?」

「うん……でも」

少し、申し訳なさそうにミソラは顔を伏せた。

「スバル君が苦しんでるときに、私、気付くこともなく、寂しがったりして、ちよつとだけ情けない」

《仕方ないわよ……それよりも、濡れタオル、まだ、額に乗せられてないし、乗せてあげたら?》

「う、うん」

ルナが絞った濡れタオルをスバルの額に置くと、ミソラは心配そうにスバルに聞いた。

「スバル君……なにかして欲しいことある?」

「うう……」

力無い状態だったが、スバルはミソラの手を握った。

「一緒にいてくれるだけで元気が……で」

「スバル君!？」

慌ててタオルを取り、耳を近づけるとミソラはホッとした。

「寝ただけだ……ヒヤッとした」

「……ミソラちゃん」

「……」

スバルの寝言にミソラは手に持ったタオルを水の入った洗面器に放り込んだ。

「スバル君……風邪が治るおまじない」

そつと、スバルの唇に自分の唇をくっつけ、二人はキスをした。

チュッ……

「いつもより、熱い……」

触れた唇があまりに熱く蕩けたのか、ミソラは目をポロロとさせ、ゆっくり、立ち上がった。

着ていた上着を脱ぎ、下着だけになると、ミソラはそつと、スバルの寝ているベッドの中に入り込んだ。

「スバル君……早く、風邪治してね?」

スバルの汗をかいた身体に抱きつき、目を瞑るとミソラはゆっくり眠りに入っていた。

「おやすみ、スバル君？」

「スバル……委員長、帰っちゃったけど、なにか怒らせ……」

ドアを開け、部屋の中を見るとあかねは一瞬、顔を真っ赤にし、部屋を出て行った。

「あの子も隅に置けないわね？」

なんとなく、新婚当時の自分の姿を思い出し、あかねは頬を赤く染めた。

翌日、スバルの風邪は全快したが、逆にミソラが風邪を引いてしまった。

風邪の特効薬（後書き）

風引きネタは私の持つ小説ネタの奥義の一つです。
ちなみに奥義だけど、結構、乱発したり初手で使ったり、ありがたみはゼロです。

流星の夫婦

泣いていた。

とにかく泣いていた。

悲しくって、泣いてたわけじゃないかった。

ましてや嬉しいわけでもなかった。

ただ、泣くしか出来なかった。

泣くことでしか、なにかを表現する方法が無かった。

そんな僕を父さんと母さんは優しく微笑んでくれていた。

なんで、そんなに優しく笑ってるの……

僕は……

「あ……？」

子供の泣き声の聞こえる一階の騒ぎにスバルはベッドから、目を覚ました。

「……？」

一階から聞こえる子供の泣き声に、スバルは一瞬、首をかしげ、ハンターV Gを手を取った。

「ウォーロック、一階から子供の泣き声が聞こえるんだけど……？」

無反応のウォーロックにスバルはムスツとした。

「ウォーロックめ、泣き声がうるさいから、自分からハンターV Gをシャットアウトしたな？」

ハンターV Gを無造作にベッドに投げ捨てると、スバルはあくびをかみ殺し、一階へと行くため、部屋を出た。

一階に降りると、スバルは寝癖の頭を掻き、怒鳴った。

「母さん、朝からテレビの音、うるさ……」

言葉を失った。

「あら、スバル、おはよう？」

よしよしと腕に抱えた赤ん坊をあやすように揺らし、あかねはニコツと笑った。

だが、スバルのほうは素直に笑うことが出来ず、顔を真っ青に怒鳴った。

「なに、その赤ちゃん！？」

「サトル君よ」

ニコツと微笑むあかねにスバルはそうじゃなくと、言葉を詰まらせた。

ようやく落ち着いたのか、泣き止んだサトルを赤ん坊用のベッドに寝かせ、スバルを見た。

「実は近所の奥様から、一日、子供を預かることになったの」

「そ、そうだったの？」

最悪の出来事を想像し、心臓を悪くしたのか、未だに真っ青のスバルにあかねはさらに追い討ちをかけた。

「スバル、私、これから仕事があるから、夕方までサトル君の面倒を見てくれないかしら？」

「え……？」

スバルの顔が真っ青になった。

母からサトルを預かり、一時間した。

そして、恐れていた現実が訪れていた。

「おぎゃー……おぎゃー……！？」

「うわわわ……サトル君、泣き止んで！？」

大声で泣き始めるサトルにスバルは大慌てで、部屋の中を駆けずり回った。

「えっと、この場合、オムツ？ それとも、ミルク？ それともそれとも！？」

ピルルルルル……

「あ、電話だ!？」

サトルを抱えたまま、家の電話を取ると、元気のいい少女の音が響いた。

『やつほー、スバル君? ハンターV Gが繋がらないから、直接、家に電話したけど……なんだか、外がうるさいね?』

「じ、実は……」

半べそ状態でスバルは現状を説明した。

「よし……こんなものかな?」

綺麗にオムツを替えるとミソラはパンパンと手を叩いた。

「もう、スバル君、ちょっと子供が泣いたくらいで大慌てしちゃって?」

クスクスと笑うミソラにスバルは恥ずかしそうにうなだれた。

「申し訳ありません……でも?」

顔を上げ、

「ミソラちゃん、手馴れてるね? 弟とかいるの?」

「ううん……以前、子供と触れ合おうという企画があつて、赤ちゃんのお世話をしたことがあるんだ。まさか、こんな所で役に立つんって?」

「結構、人生経験、豊富だね?」

「えへへ……」

テレ奥そうに笑うミソラにスバルもクスツと笑い、サトルを受け取った。

「ようやく笑ってくれて、安心した……こうやって笑うと、サトル君って、本当に可愛いね?」

父性に目覚めたように優しく微笑むスバルにミソラもからかうように笑った。

「こうしていると夫婦みたいだね、私たち?」

「え……?」

顔を真っ赤するスバルにミソラも自分の言った言葉に顔を真っ赤にした。

「ちょ、ちょっと冗談なんだから、笑って飛ばしてよ？」

「あ、ああ……そ、そうだね？」

背中をバンバン叩かれ、笑うスバルにミソラもバツが悪そうにアハハと笑った。

「キャツキャツ……」

状況が読めてないのか、無邪気に笑うサトルにスバルとミソラは顔を呆けさせ笑った。

「か、可愛い……」

さっきと違う顔で真っ赤になり、二人はだらしない顔をした。

だが……

「あ……あぎゃ……」

「ま、また!？」

顔を真っ青にするスバルにミソラは大丈夫と微笑んだ。

「大丈夫、この泣き方だとミルクだから？」

「え……ミ、ミルク？」

「ん……?」

視線が集中する自分の胸にミソラは顔を真っ赤にして、スバルの頭にチョップした。

「なに变な想像してるの!？ スバル君のエッチ!？」

「ゴ、ゴメン!？ すぐに粉ミルクを用意するから？」

慌ててキッチンに逃げるスバルにミソラは泣きはらすサトルをあやししながら、ボソリとつぶやいた。

「スバル君なら、いいかな……吸われても？」

顔から炎が吹き出しそうに真っ赤になり、ミソラは首をぶんぶん振った、

「ミソラちゃん、ミルク、人肌に温めるまで待っててね？」

「あ、うん!？」

スバルに見られていないことを確認するとミソラはそっと自分の

胸を摩った。

「えへへ……いつか、出るようになるのかな？」

「まあ……」

「え……きゃ、きゃああ!？」

「どうしたの、ミソラちゃん!？」

慌ててミルク哺乳瓶を手に持って、今に戻るとスバルは顔を真っ赤にした。

「えっと……お邪魔だったかな？」

上着から胸を吸われているミソラにスバルは逃げるように回れく右した。

「ちよちよちょっと、スバル君、逃げてないで、その哺乳瓶早く、こっちに渡して……あん!？」

また強く座れたのか、色っぽい声を出すミソラにスバルも慌てて戻り、哺乳瓶を渡した。

「はい、これ!？」

「……」

一回、スバルの持つ哺乳瓶を見て、サトルは悩むようにミソラの胸と哺乳瓶を見比べた。

「まあ……」

「あ……?」

まあまと言われ、満更でない顔をするミソラにサトルは今度はスバルを見た。

「ぱあぱ?」

ミソラの胸を諦め、無理やり、スバルのもとにハイハイすると、甘えるように足に抱きついた。

「ぱあぱ、ぱあぱ!」

すっかり、泣くのを忘れたのか、笑いながら甘えるサトルにスバルはゆっくり抱きかかえ、哺乳瓶を咥えさせた。

「パ、パパだって?」

「私、ママだって言われた?」

お互いジッと見つめ、浮かれたように微笑みあった。

「なんだか、いいね、こういうの？」

「うん！」

元気良く頷くミソラにスバルの腕のサトルが哺乳瓶を放し、両腕をぶんぶん振った。

「ばあば、まあま……！」

ビシッとガラガラを指差すサトルに二人はお互い微笑み合いながら、おもちゃ箱をひっくり返した。

「じゃあ、これから、スバルパパとミソラママと遊ぼうね、サトル君？」

「ばあば好き、まあま好き！」

夕方になり、母が近所の奥さんを連れて、家に帰るとお土産のプリンを持ち上げ叫んだ。

「ごめんね、スバル……サトル君の面倒見てもらっちゃって？ サ

トル君のお母さんが来たから、サトル君、連れてきて？」

しゅん……

「あれ、いないのかしら？」

二人はお互い見つめあい、スバルの部屋に繋がる階段を上った。

「スバル、いないの？」

部屋を見て、二人は声を押し殺し、笑った。

「もう少し預かってもらっていいかしら？」

「ええ、こちらからお願い」

おもちゃで散らかった部屋の真ん中で、ミソラとスバルはサトルを優しく抱くように寝ていた。

「なんだか、ちっちゃい夫婦みたいね？」

「スバルばあば……ミソラまあま……大好き……」

流星の夫婦（後書き）

そういえば、昔、「ママは五年生」というアニメがありましたね？
今はアニメもスレてしまい、平気で子供も殺す世の中になりました
が、もうちょっと夢と希望のあるアニメを作ってほしいですね？

ミソラの心

「遅刻、遅刻!？」

電波空間を渡りながら、ハープ・ノートは大慌てで待ち合わせ場所へと走っていた。

最近、ミソラの周りは大忙しだった。

年始ということもあり、さまざまなイベントのオンパレード。

CM撮影に新曲発表、ドラマ撮影にバラエティー、外国にだっていった。

若干、十一歳にしては過密すぎるほどの過密スケジュール。

世が世なら、労働基準法違反でミソラの事務所は活動停止にだってなるほど、ミソラは年始めから仕事を続けていた。

その並として犠牲になったものも多い。

スバルとの交流である。

かれこれ、半月近く一緒に遊んでいない。

仕事のストレスや、スバルと会えない苛立ちからついにミソラの中のフラストレーションが大爆発した。

過密なスケジュールによる文句や休みが無くって疲れた。

などは建前で、本当はスバルとラブラブしたいという本音を隠し、ミソラはとにかく、事務所にワガママ放題をいった。

休みをくれないなら、事務所をやめるや、契約している仕事をサボるや、新曲はもう書かないや、低学年のワガママを連発し、ついに事務所も折れた。

ようやく一日だけの休みをもらえ、ミソラはスバルと一緒に遊ぶ約束を取り付けたのである。

今は寒いから南国の地で水着に着替えて一緒に泳ごうとミソラはスバルと約束をした。

そして、その移動手段が電波空間であった。

もはや、電波空間は彼らの立派な交通手段だった。

「せっかくのデートに寝坊なんって、最悪だよ!？」

「メット!？」

いきなり、横からメットルが横から襲い掛かり、ミソラの目がキツと吊り上った。

「うるさい!」

ギターから音符の衝撃波がメットルを吹き飛ばし、ミソラは怒鳴った。

「急いでるの!？ 邪魔しないで!？」

また、急いで走り出そうとするミソラだが……

ツルンッ……

「え……?」

なぜか、滑るはずの無い電波空間でミソラは足を滑らせ、見事に回転を加え頭からゴチンツと素っ転んだ。

「あうう……」

目の前にお星様が回り、ミソラは目を回しながら気絶してしまった。

目を覚ますと、ミソラは見知らぬ部屋の中にいた。

「ここは……」

ベッドから身体だけ起こすとミソラは首を左右に振った。

「男の子の部屋?」

初めて見る部屋。

だけど、どこか懐かしく、すごく胸がドキドキした。

知らない世界のはずなのに、すごく胸が高揚した。

ドキドキが収まらず、息が荒くなると、ミソラは思わず、上にかけられていた毛布の匂いをかいだ。

「……ちよっとだけ、男臭い」

えへへと幸せそうに笑ってしまった。

「なんだろう、この懐かしくって幸せになれる匂い……初めてかい
だ気がしないな？」

また匂いをかこうと毛布を鼻に近づけると……

「あ、ミソラちゃん、起きたんだ!？」

「えッ!？」

ドキッと胸を高鳴らせた。

部屋の中に入ってきた少年は心配そうに自分に近づき、自分を優しく寝かせつけた。

「起き上がっちゃダメだよ？」

優しく微笑む少年の笑みに、ミソラは不思議そうに目をしばたかせた。

誰だろう……この人？

知らない人のはずなのに、全然怖くない。

むしろ……

優しい気持ちになれる。

「大丈夫……頭打って、気を失ってたんだよ？」

無理やり、ミソラをベッドの中に寝かせると少年はニコツと笑った。

「事務所には僕から連絡といたから、当分、お休みをもらえるそうだよ？」

優しく微笑む少年の顔にミソラは動揺した。

一目惚れなのかな……なんだか、すぐくふわふわする。

心がドキドキして、なんだか、すっごく幸せな気持ちになる。

でも、この気持ちは一目惚れとは違う気がする。

もっと深いなにかを胸に感じる。

「……ミソラちゃん？」

いきなり自分の唇を指でなでるミソラに少年は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

だけど、すぐにニコツと笑い……

「いつものお返しだよ？」

「え……?」

少年の顔がゆっくり近づき、ミソラは大いに慌てた。
ダ、ダメだよ、初めて会った男の子とキスだなんて?

私、初めてだし、でも……逆らえない。

ゆっくり目を閉じ、ミソラは自分がキスできる体勢で少年を待っていたことに気付いた。

やっぱり、私、この人が大好きなんだ……

優しくキスをされ、ミソラは目を見開いた。

……この人は?

「うん?」

気がつくともミソラは自分にキスをするスバルに顔を真っ赤にした。

「ちょ、ちよつとスバル君!」

顔を離し、ミソラはスバルを押し跳ねた。

「わ、私、なんで、スバル君のベッドで寝てるの?」

「記憶が混乱してるんだね?」

キスをしたミソラの唇を優しく人差し指で撫で、スバルは微笑んだ。

「電波空間でメットルを踏んづけて転んだんだよ? 幸い、どこも

異常は無かったみたいだし、事務所に言ったら、働かせすぎたって、反省してたよ?」

ミソラの眠るベッドの横に座り、ミソラを見た。

「当分、仕事はお休みくれるらしいから、次の仕事までずっと一緒にいようね?」

「あ……うん」

なんだろう……?

とっても幸せな夢を見てた気がするけど、覚えてないや……

「ミソラちゃん?」

「あ……スバル君？」

不思議そうに自分を見るスバルにミソラはボツと顔を赤くし、唇を前に出した。

「スバル君……」

「ミソラちゃん……」

優しくキスをし、二人はベッドに倒れこんだ。

数秒数分とキスを続け、ようやく、唇を離すと、二人は幸せそうに微笑んだ。

「いつの間にか、私たち、キスが挨拶になっちゃったね？」

「だね？」

ふふっと笑い、ミソラは確かめるように聞いた。

「ねえ、スバル君？」

「うん？」

「も、もし……私が私じゃないなになって、それでも、スバル君が好きだっていう気持ちだけは変わらなかったら、どうする？」

「……？」

言ってる意味がわからず、スバルは不思議そうに首をかしげた。

でも、ミソラはそんなこと気にせず、舌を巻いてしゃべった。

「わ、私は私以外の何者になっても、きっと、スバル君が好きだって気持ちだけは、忘れないと思うんだ!？」

どこか、必死になる自分にミソラはなぜか、すごくスバルに甘えたい気持ちになった。

それに気付いたのか、スバルも優しく微笑み、ミソラの頭をそつと撫でた。

「ミソラちゃんがミソラちゃん以外のものになんてならないよ? だって、どの形になっても、ミソラちゃんはミソラちゃんでしょう?」

「スバル君……?」

一瞬、ホケくすとマヌケな顔をし、ミソラは迷いが吹っ切れたように元氣良く頷いた。

「うん、スバル君、大好きだよ！」

ミソラの心 (後書き)

記憶を失っても、無くしたくない思いはある。
この詩を作った人はロマンティストですか？

時空を超えた戦士

暗闇の中で、男は自分の部下に対して、大人げもなく激昂し、灰皿を投げ捨てていた。

「また、負けたのか!?!」

「も、申し訳ありません……」

見るものも同情させるくらい、萎縮している部下に男はふんつと鼻を鳴らし、柔らかそうなソファ―に背中を預け、腕を偉そうに組んだ。

「もはや、奴の進行は留まるところを知らない。明日にでも、我々はお縄かもしれない」

「奴の強さは異常です……」

絶望的に首を振る部下に男もチツと舌打ちをし、苦虫を噛み砕くような発言をした。

「だが、まだ手は残ってる」

「は?」

「何も奴を倒す必要はない。奴以外の奴を倒せば、奴を倒したことになる?」

「ハッ……もしや、総帥!?!」

「ああ、過去へ飛ぶぞ!?!」

コダマタウンを一望できるマンションの屋上で一人の少女が双眼鏡を目に、遠くでアイスを持って、イチャイチャしているスバルとミソラを見ていた。

「……」

双眼鏡を一度、目から離すと、少女はホッと安心したため息を吐き、胸をなでおろした。

その姿はどこかミソラのシルエットに似ているところがあった。

「まだ、敵は動きを見せてないようね？」

再び双眼鏡に目を戻し、二人の馴れ合いを見ていると少女は恥ずかしそうに頬を染めた。

「でも、昔からバカップルだったのね？」

双眼鏡から見えるスバルとミソラの様子を見て、少女は口から砂が出る思いを味わった。

「ねえ、スバル君のソーダアイスって、おいしい？」

「うん？」

カプリと食べていたラムネ入りのソーダアイスを口から離すとスバルはニコツと微笑み、差し出した。

「食べてみる？」

「うん！」

元気良く頷き、ミソラはスバルのソーダアイスを一度見て、ニヤツと唇の端を吊り上げた。

「味わうだけなら、こっちで……」

「え……？」

いきなり、唇に塞がれ、舐められるように舌を舌で舐められ、スバルは目を見開いて驚いた。

「ぷはぁ……」

唇を離すと、ツツと唾の糸が引き、ミソラの服にちよつとだけかかると、えへへと笑った。

「スバル君の舌って甘いね？」

「そ、そんなのアイス食べてたんだから、当然だよ……」

恥ずかしそうにそっぽを向くスバルにミソラは調子を良くしたのか、えいっと腕に抱きつき、猫のように頬擦りした。

「ミ、ミソラちゃん!？」

余りに大胆なミソラの行動に戸惑いを隠せないスバルはいったん、歩んでいた足を止め、顔を真っ赤にした。

「人が来たら離れるから……ね？」

しかし、ミソラはどこも悪びれることなく、可愛くウィンクし、

スバルの反論の余地を無くさせた。

その姿をマンションの屋上でいた少女は口から砂を吐き、愚痴をこぼしていた。

「この頃と比べれば、私たちの時代はまだ、マシだったのね……ん！？」

双眼鏡を見直して、少女はやってきたと確信し、目を見開いた。

「ついに動いた！？」

ポケットから青を基調したI p o d 状のアイテムを取り出し、上空に構えた。

「ロックマンチェンジ……デイメイション！」

《ロックマンデイメイション》

少女の身体が光に包まれ、マンションの屋上から消えた。

しばらく、腕を組みながら、人のいない歩道を歩いていると、二人の前に顔までフードで覆われた黒尽くめの男が通りかかり、二人は慌てて腕組を解き、離れた。

「今度はもつと、くつついていられるといいね？」

ボソツとまるで、スバルが赤くなるのを楽しむように悪戯っぽく囁くミソラに、スバルは顔を真っ赤にして、うつむいた。

二人がふふっと笑いあい、男の隣を通り過ぎようとしたとき、男は待っていたように足を止め、二人の名前を呼んだ。

「星河スバルと響ミソラだな？」

「うん？」

スバルとミソラはお互い顔を見合わせ、怪しげに突っ立つ男を見上げ、警戒した。

「そ、そうですけど……」

ジリッとミソラを守るように前に立つスバルにミソラはほんの少し、頼もしいなと心をときめかせた。

「なら……」

させるスバルにウォーロックも苦虫を噛み砕く感じに口を開いた。

《野郎、どうやら、俺たちとは違うみたいだな?》

ロックマンもコクリと頷き、腰からバトルカードを取り出し、回転を加えるように空中に投げ飛ばした。

「バトルカード、ソード!」

バトルカードが光とともにロックマンの左手に吸収され、ビームソードになると、ロックマンは中腰になり、スピードを上げるようにダークカットマンに向かってビームソードを切りかかった。

ガキンツ!

「クッ……!?!?」

弾き返され、道路のレンガの壁に身体を叩きつけられ、ロックマンは一瞬、苦しそうに息を吐き、身体が光に包まれた。

元の人間態のスバルへと戻るとハープ・ノートの顔が真っ青に染まり、慌てて、倒れているスバルに駆け寄った。

「大丈夫!?!」

「う、うん……」

ちっとも平気そうじゃないのに、必死に見栄を切ろうとするスバルにハープ・ノートはダークカットマンを睨み、ギターを構えた。

「よくも私のスバル君!?!」

「お前も、すぐに倒してやる!?!」

バツと頭に取り付けられたブーメランを取り外し、振りかぶるとハープ・ノートは震える身体で目を瞑った。

「消えろ!」

ぶんとブーメランの刃が振り下ろされると同時に背後から暗闇から抜け出たような重苦しい少女の声が響いた。

「そっちがな?」

バンツとダークカットマンの身体が上空に殴り飛ばされ、地面に落下すると、青いコンバットスーツを着た少女は冷たくも情熱的な瞳を燃え上がらせ叫んだ。

「ロックマンデイメイション……!」

デイメイシヨンと名乗った少女は、倒れて動けないダークカットマンに絶望を与えるように指差した。

「いいニュースを教えるよ、未来の世界で君たちの組織は私のお兄ちゃんが壊滅させた。後は君だけだね？」

信じられない顔をするダークカットマンにロックマンデイメイシヨン腰のフォルダーから一枚のカードを取り出し、腕のスキャナーに通した。

「ロックマンチェンジ！」

《ロックマン》

少女の姿がシンプルなコンバットスーツに変わるとビシッと左腕のロックバスターを構えた。

「終わりだ……」

「バ、バカな……こんな事が！？」

ぶるぶる振るえ、状況を理解しきれていないダークカットマンにロックマンデイメイシヨンは無情に止めを刺した。

「フルパワーロックバスター！」

「う、うわああああッ……！！？」

爆風とともにダークカットマンの姿が消滅し、一部始終を見ていたミソラは一瞬、なにが起こったかわからず、少女を見つめた。

「君は……いったい？」

「……」

ロックマンデイメイシヨンの姿が、元の人間の姿に戻ると、少女はニコッと微笑み、背を向けた。

「また逢おうね……お婆ちゃん？」

「お、お婆ちゃん？」

いきなり、同年代の女の子にお婆さんといわれ、心外な顔をシミソラは憤慨しそうになった。

もつとも、怒る前に少女の姿がいつの間にか消え、ミソラは気を取り直し、後ろで倒れているスバルを心配そうに見つめた。

「スバル君、大丈夫！？」

傷を手当てするように、ポケットからハンカチを取り出し、血を拭くとミソラはホッとした顔で吐息を漏らした。

「よかった、見たところ、擦り傷だけみたいで……」

「うん……今回は運がよかったかな。でも、ごめんね？」

「え？」

一瞬、申し訳なさそうな顔をし、スバルは微笑んだ。

「女の子を守るのは男の役目なのに、逆にミソラちゃんに守られちゃったね？」

「……もう」

ミソラは拗ねたように頬を膨らませ、スバルの頬に手を当てた。

「スバル君、格好つけすぎ……！」

そういう、ミソラはスバルの唇にキスをし、舌を入れた。

スバルの口の中の舌に自分の舌を絡ませ、強く吸い、唾液を交換すると、ミソラは満足したように唇を離し、高揚した顔を隠そうともせず、微笑んだ。

「私だって、格好つきたいときがあるんだから、たまには格好悪いところを見せてよ？　ねえ、スバル君？」

「……格好悪くなるのは嫌だな？」

「格好いいところも悪いところも全部好きになりたいんだよ？」

ゆっくり、スバルを立たせ、ギュッと抱きつくとミソラは呟くようにいった。

「だって、そうじゃないと私、いつまでもスバル君に近づけないもん」

「ミソラちゃん？」

最後の呟きがうまく聞こえなかったのか、スバルは不思議そうな顔をした。

時は流れ、五十余年後……

「お兄ちゃん、お爺ちゃんとお婆ちゃんを助けに終わったよ？」

「ご苦労様？ どうだった、過去の爺ちゃんと婆ちゃんは？」

「思い出すだけで砂、吐きそう」

「未だに新婚気分を忘れられないバカ夫婦だからな？」

「でも、昔を見ると今は多少、丸くなったんだと……思うよ」

「まあ、また逢うときがあるかな？」

「今度はお兄ちゃんが行って？」

「そんなに恥ずかしかったのか？」

時空を超えた戦士 (後書き)

実は今回出た、デイメイションになった女の子とその兄が主人公の
オリジナルロックマンの話も作ってあるのですがいつ出すか検討中
……

唇の魅力

「ミソラ……いい加減、観念したら、どうだ？」

ジリジリと悪趣味な化粧品を持ち、近づくマネージャーにミソラは大声で怒鳴った。

「絶対に嫌だ！」

「なんでだ!？」

ビシッとドドメ色に光った怪しげな超次元の口紅を突き刺すマネージャーにミソラは大声で怒鳴った。

「どこの世界にそんな悪趣味な化粧をしたがる女の子がいるのよ!？」

「これを見ろ!？」

ビシッと女の子の顔の載った写真を見せ、マネージャーは得意げに鼻を鳴らした。

だが、逆にミソラは呆れた。

「ヤマンバじゃん!？」

「さあ、これで視聴者にインパクトを……」

「与えすぎだ!？」

「え……?」

バキッと鈍い音が響き、マネージャーは目を回して倒れた。

「あうう……」

ボタンッ……

「まったく……」

背中であ腕を振るロックマンにミソラの顔がパアと輝いた。

「やあ、ミソラちゃん？」

元の人間態に戻るとスバルはニコツと微笑んだ。

「ハープからミソラちゃんがピンチだから、助けに来てくれって、言われたんだ」

「ハープ!？」

慌ててハンターV Gを見て、画面のハープは得意げに笑みを浮かべていた。

《最近、出番、少ないからね?》

「にしても……」

マネージャーが用意した用途不明の魔具をゴミ箱に捨てると、スバルはため息を吐いた。

「相変わらず、ろくなマネージャーじゃないんだね?」

「本当……今回は本気でタレント生命を絶たれるかと思った」

顔を真っ青にするミソラにスバルはポケットから一本のリップクリームを取り出した。

「はい、ミソラちゃん……」

「え……?」

動かないでと優しくささやかれ、スバルは不慣れな手つきで、彼女の唇にリップクリームを塗った。

「はい!」

優しく笑うスバルにミソラは自分の唇に塗られたリップクリームを指で撫で、そっと、楽屋の鏡を見た。

「春色……?」

ほんの少し、桃色に染まった唇にミソラは顔を赤らめた。

スバルもテレたように笑い、そっと楽屋のイスに座った。

「ハープから事情は聞いたよ? やったじゃない……」哲子の部屋に招待されたなんて?」

ミソラも戸惑うように笑った。

「「哲子の部屋」はタレント活動しているタレントの憧れの番組だからね? 私にオフアールが回ったとき、理解するのに時間がかかちやっただからね?」

「ミソラちゃん、努力が実ったんだよ?」

「ううん……全部、スバル君のおかげだよ?」

「僕のか?」

そっと、スバルの唇にリップクリームを塗った自分の唇を重ねる

と、ミソラは満足した顔でいった。

「スバル君と一緒にいてくれなかったら、私は壊れたままだから……本当にFM星人に心を壊されていたから」

《本人の前で言うかしらね?》

ハープのツツコミも無視し、ミソラはスバルの手からリップクリームを受け取った。

「貰っていいよね?」

大事そうにリップクリームを持つと、スバルも嬉しそうに微笑んだ。

「僕のお祝いの品だから、貰ってくれると嬉しいよ?」

「うん!」

元気良く頷き、二人はまたキスをした。

「哲子の部屋」が始まった。

「ミソラちゃんって、聞いていた噂よりも、大人っぽい雰囲気のある女の子ね?」

「え……そうですか?」

満更でない顔で微笑むミソラに哲子は朗らかにつぶやいた。

「もしかして、恋人でもいるの?」

「……ッ」

一瞬、言葉を迷い、ミソラはニコツと笑った。

ポケットから一本のリップクリームを取り出し、柄の部分を回した。

「女の子を大人っぽくするのは、やっぱり、唇だと思っんです」

「唇……?」

意外そうな顔をする哲子にミソラは得意げにリップクリームのカメラに向けた。

「だって……唇は大切な人へのメッセージだから」

「ほお……」

今度は哲子が年甲斐もなく真っ赤になり、ミソラはテヘへと笑った。

ぷっん……

テレビを切るとスバルは鼻血が出そうに顔を上げた。

「ミソラちゃん……不用意な発言は控えよう？」

今にも沸騰しそうな心を鎮め、スバルは心が上気するのがわかった。

テレビの後、全国からリップクリームが化粧品店から消えるという社会現象が起こった。

それがミソラのせいかな否か……

リップクリームのブームが終わるまで、スバルはその話題に触れなかった。

唇の魅力 (後書き)

唇がカサカサになってるところを思い出して書いたのがこれでした。

海の上の散歩

『え〜〜……世間では散歩ブームです』

テレビの前でニコやかに笑顔を浮かべるレポーターのお姉さんにミソラの笑顔が引きつった。

『いや〜〜……仕事に忙しいから、妻と一緒に散歩がこんなに楽しいとは知りませんでした?』

ミソラの額に青筋が立った。

『わたしたち、さんぽでーとしてるの……!』

えへへと舌足らずに笑う幼稚園児の笑顔にミソラの血管の切れる音が響いた。

「うらやましい〜〜〜!?!」

テーブルを星一徹並に引っくり返すと、ミソラは子供のように手足をバタバタさせ、暴れだした。

「スローライフ、羨ましい!? 私なんか、仕事のせいで、最近、マトモに寝てないのに、なんで、みんな、散歩デートを楽しんでるの!? 私もスバル君と散歩デートして、ノンビリ、スローライフを楽しみたい!?!」

《ワガママ言わないの……仕事は自分で選んだ道。それで愚痴っても怒られるだけよ?》

「だって!?!」

あぐらをかきながら起き上がると、ミソラはお手製スバル君人形を胸に抱き、涙目になった。

「最近、スバル君と逢ってないもん……」

《仕事に忙しいものね?》

「デートしたい」

《誘えばいいじゃない?》

「最近、思うようになったの」

《なにを?》

「女のほうから、デートに誘うって、これって情けないことじゃ……って」

《今更、なに言ってるの……うん?》

ピルルルルルル……

「あ、電話だ……」

ハンターV Gの画面から、ハープが消え、『スバル君』^{ハート}と着信が出る。ミソラは慌ててプッシュした。

『あ、ミソラちゃん?』

「スバル君、どうしたの、いきなり電話をかけて?」

と、素っ気無い風に言うものの、顔は十分、笑顔になり、ご機嫌満々と背中からオーラが発していた。

「あ、もしかして、遊びの誘い?」

『う、うん……』

テレたように笑った。

『ミソラちゃん、テレビ見てた?』

「うん。ちょうど、散歩ブームの話」

『実は、僕も急に触発されて、ミソラちゃんと散歩したくなったんだ?』

「え……散歩デート?」

頭の中で思い描いたスローライフが現実になり、ミソラは鼻息を荒くし、頷いた。

「行く行く! 絶対に行く! じゃあ、どこで待ち合わせしようか……近所の公園?」

『その事なんだけど、僕たちは人と違う道を散歩しない?』

「違う道?」

『うん……海の上?』

「海の上……?」

キョトンとした。

「うわぁ……こう見ると違うね？」

電波ロードの下に広がる満面の海を見下げ、ハープ・ノートに電波変換したミソラは感嘆した顔でロックマンに電波変換したスバルを見た。

「まさか、電波空間を散歩とは思わなかったな？」

「日頃、移動の手段にしても、散歩の手段には考えなかったからね？」

「確かに……」

便利すぎるから、逆に思いつかなかった、穴場とも言える散歩コースである。

「それにしても、海って、こう見ると広いよね？」

スバルの手を取りながら、また歩き出すと、ミソラは水平線の彼方を見上げた。

「いつまでも続いているようで、なんだか、怖いな……」

「……」

手に力を入れるミソラにスバルも安心させるように優しく微笑んだ。

「知ってる、ミソラちゃん？」

「うん？」

言いよどむように顔を赤らめた。

「実は人間って、海の中のこと、余り知らないんだよ？」

「海の中？」

「要するに深海」

「深海？」

頭の中でマンガ風にデフォルトされた提灯アンコウを思い描き、途端に鍋になった。

「おいしそう……」

ごくんと喉を鳴らすミソラにスバルは呆れたように笑い、続けた。

「もちろん、海の中を研究してる人は多いよ？ でも、人はもっと大きいものに興味を示しやすいんだ？ 海と宇宙じゃ、広大さが違うでしょう？」

「確かに？」

宇宙の黒と海の青を想像し、その巨大さを比較したら、自然と宇宙の黒一面に脳が侵食された。

「でも、実を言うとな未知という話の中じゃ、海の中も宇宙の空も、まだ、わかってないことは多いんだよ？」

「へえ……こんな簡単に見れる世界を余り知らないんだ？」
ひざを折り、足元の海を見下げるとミソラは子供のようにスバルにいった。

「て、いうことは、海って、もう一つの宇宙なんだね？」

「うん、そうだよ。海の中を宇宙という人も本当にいるからね？」

「海の中の宇宙か……なんだか、ロマンチック」
ウツトリするミソラにスバルは慌てて彼女の手を取り、立ち上がらせた。

「ミソラちゃん、見て？」

「え……？」

スバルの指差す方向を見て、ミソラも声を上げた。

「夕暮れだ……？」

「綺麗だね？」

ゆっくり、黄色に染まり徐々に海に飲み込まれていく太陽を見て、二人は自然と言葉を忘れていった。

そして、数分と待たず、夕暮れの太陽が海に沈むと電波空間にも夜が訪れた。

「消えたね……」

「うん」

コクリと頷き、ニパアと笑った。

「私たちだけの最高の思い出だね？」

気恥ずかしそうに微笑みあうと、スバルはミソラの手を掴みなが

ら、そつと、元来た道を歩き出した。

「帰ろうか……もう遅いし？」

「うん……そうだね？」

一瞬、考え込むように足を止め、ミソラは決心したように顔を真っ赤にした。

「また、ここにこようね……海の上の散歩？」

「うん、もちろん。いつでも……」

そういうとスバルはロックマンのヘルメットを脱ぎ、ミソラもハーブ・ノートのヘルメットを脱いだ。

暗い電波空間の中、二人の唇が重なると、空の星がキラキラと海の闇に照らし出され幻想的な光を出し、一閃の流れ星が落ちた。

流星のように……

海の上の散歩 (後書き)

このメットを取るというアイデア、想像以上に好評で何度か、ヘルメットを脱ぐ描写をもう一度とリクエストを貰いました。

ほっぺたまじっく

「ムニムニ……」

「……」

「むにむに……」

「……」

「むにムニ……」

「あの、スバル君？」

「え？」

ムニムニしていたほっぺたを離すと、スバルはニコツと笑った。

「どうしたの、ミソラちゃん？」

「なんで……人の頬をムニムニするの？」

「……」

「……」

「……」

「……」

しばらく、ピンクがかった沈黙が生まれ、

「えへへ？」

子供のように笑うスバルであった。

「ミソラちゃんのほっぺって、可愛いよね？」

「え……？」

ドキッと胸を高鳴らせるとスバルはまた彼女の頬をムニムニ、揉み始めた。

「柔らかいし、すべすべだし、頬の赤みがなんともキュートだね？」

「な、なんだか、親父入ってない？」

「そんな事ないよ？」

無邪気に笑うスバルにミソラは心の中でため息を吐いた。

はぁ………触るなら、もっと別のところ、触れればいいのに……

た、例えば、胸とか、キャッ!?

「ああ〜…ずっと触っていたくらい可愛いほっぺただよね?」

「ほ、本当?」

ほっぺたを褒められて満更でないか顔をするミソラにスバルもうんと頷いた。

「ミソラちゃんのほっぺたはすごく可愛いよ。いつまで経っても、飽きないくらいだし?」

ちよつと、歪みを感じるが、スバルの褒め文句に気を良くしたのか、ミソラも自然と笑顔になり、少しだけ、触りやすく頬を前に出した。

「後、十分くらい、触らせて?」

「べ、別にいいけど?」

顔を真っ赤にすると、スバルも嬉しそうに彼女の頬を優しく撫で始めた。

最初は優しくつまんだり、次にはぷにぷにを楽しむように頬を押したり、むにゅむにゅを堪能するように弄んだり、旗から見たら、危ないプレイにも見える。

もつとも、ミソラ自身も嫌な気分はしなかった。

スバルの手も、決して触り心地の悪いものではなく、むしろ、男の子の手にしては柔らかく、温かみのある手で、まるで彼の人柄を表すように優しいぬくもりを感じている。

そんな異様な光景が続き、気が付いたら、約束の時間を軽く六倍も越えていた。

ようするに一時間も飽きずに頬を触っていたのである。

「ふう〜…満足した!」

「うん!」

ゴロンツと恍惚な顔でスバルは床に寝転がった。

ミソラもスバルに触られたほっぺたがツヤツヤになって、満面の笑みで見下ろした。

「でも、どうしたの、いきなり、ほっぺたを触らせてなんって?」

「うん、実はね？」

あぐらをかくようにゆっくり起き上がると、スバルも肌をツヤツヤにして、いった。

「もうそろそろ冬休み、終わるでしょう……わかってても、心が納得してくれなくて、ちよつと憂鬱だっただけ」

「あ、そ、そうなの？」

「冬休み」と聞いて、急に顔を青ざめさせるミソラにスバルはどうかしたのかと首をかしげた。

「そういえば、ミソラちゃん、冬休みの宿題、終わらせた？」
「ギクッ!？」

強く動揺するミソラにスバルはさらに追撃した。

「僕は委員長と一緒にゴン太とキザマロと冬休み最初のうちに片付けたけど、ミソラちゃんは大丈夫？」

「え、えつと……わ、私は忙しくって」

「そっか、それじゃあ、仕方ないね？」

納得してくれたらしく、ミソラはホッと安堵の息を吐いた。

「じゃあ、今からミソラちゃん家に行って、宿題を片付けようか？」

「ええ……!？」

心の底から驚くミソラにスバルは呆れたようにいった。

「宿題を残すと後でミソラちゃんが泣くんだから、文句いわないの？」

「だって……」

すでに泣き出しそうな顔でグッスンするミソラにスバルはクスツと笑った。

「宿題が終わったら、どこか遊びに行こうか？　そうだ、電波空間を使って海外に行こうよ？　日帰りだけどね？」

そういい、チュツとミソラの頬にキスをするスバルは照れたように笑った。

「さあ、早く終わらせて、もっといいことしようか？」

「う……」

キスされた右頬を撫で、ミソラはドキドキする胸の鼓動を感じながら、強く頷いた。

「うん！」

それから、二人は夜が明けるまで会話を楽しみながら、宿題を片付け、次の日が来ると徹夜の分を取り返すように一緒にベッドに眠ったのであった。

もちろん、間違いは起こらなかった。（ちゃんちゃん）

ほっぺたまじっく (後書き)

この頬のぷにぷには中の人ネタで、
「ときめきメモリアル4」のあ
るイベントから取っています。

想う時間るとき

「タイムマシン？」

声を揃えて驚くスバルとミソラに相変わらず顔色の悪い顔を綻ばせるというなんとも器用な笑顔を浮かべる宇田海はコクリと頷いた。

「正確には？タイムワープ？です」

机に置いてあったバトルカードを手に取り、宇田海は上司の天地に頼み、立体モニターをオンにしてもらった。

「知ってのとおり、時間移動とは理論上は可能なのです……話すと難しくなるので理屈は言いませんが？」

はあ〜と呆けた顔をする二人に気を止めず、宇田海は続けた。

「このカードはまだ試作品ですが、このカードを使えば、誰でも簡単に時間移動ができるのです」

「時間……移動？」

キョトンとするミソラにモニターを変え、天地が割って入った。

「時間移動が可能になれば、今まで不明とされていた過去の出来事も明らかにするんだ。もちろん、歴史改変される可能性もあるから、その点も考慮に入れて、「百年計画」でプロジェクトを実行中さ？」

「え……出来上がったんじゃないんですか？」

宇田海と天地は困った顔で微笑んだ。

「そうそう簡単にタイムワープが成功すれば、宇田海ほどの天才は必要ないよ？」

「この計画は各国のトップ科学者が研究を進めています。僕もその一員になれるだけでも、正直、幸せなことなのです」

実際、本当に誇らしいのか、顔を赤らめ、子供のように頬を人差し指で搔く宇田海は、どこか幸せそうだった。

「この事は二人だけには教えようかと思ったんだ。二人とも、こういうのは嫌いじゃないだろう？」

「あ、はい！ ありがとうございます！」

心底嬉しそうに頭を下げるスバルにミソラもそつと頭を下げた。

「あ、ありがとうございます」

「ミソラちゃん？」

どこか様子のおかしいミソラにスバルはそつと顔を覗いた。

「大丈夫？　なんだか、心ここにあらずだよ？」

「う、うん……」

首を横に振り、微笑んだ。

「大丈夫だよ？」

しばらく、天地と宇田海による、タイムワープによる可能性と危険性について講義を受け終わると、スバルとミソラは充実した疲れを顔に出し、で研究所の入り口の前で伸びをしていた。

「今日はいいいものが見れて良かったね、ミソラちゃん？」

「うん！　すぐくタメになった……」

ニコツと微笑むミソラにホツとした顔で微笑んだ。

良かった、元気を取り戻したみたいで……タイムワープを聞いてから、なんだか、元気がなかったし。

明日、どこか連れて行こうかなと画策すると、横からミソラの元気な声が響いてきた。

「ねえ、スバル君？」

「うん？」

チュッ……

「え……？」

いきなり、ソフトなキスをされ、顔を赤らめるスバルにミソラは今にも泣き出しそうな顔で謝った。

「ごめんね……ワガママな娘で……でも」

そつと背を向け、

「大好きだったよ？」

「ミソラちゃん？」

ミソラの姿がハープ・ノートへと電波変換し、手を振った。

「先に帰ってるね？」

「あ……!？」

呼び止める暇もなく電波空間に消えたミソラにハンターV Gのウオーロックの静かな声が響いた。

《なんだか、雲行きが怪しいな……スバル?》

「……」

なにかに気付いたようにスバルの顔にも影が差した。

その日の夜、研究室の天井から一閃の光が瞬き、消えた。

「……誰もいない？」

ハープ・ノートになって、研究室に潜り込んだミソラは誰もいないか改めて確認し、歩き出そうとした。

「こんな時間になにをしてるの、ミソラちゃん？」

「ッ!？」

パチンツと部屋の明かりがつき、ミソラはバツと振り返った。

「……スバル君？」

部屋の明かりのスイッチのところ背をつけて立つスバルにミソラは真っ青になって聞いた。

「なんで、ここに？」

「それはこっちのセリフだよ……君こそ、なんでここに？」

いつにない、責めるような顔をするスバルにミソラは若干、気圧され気味に俯いた。

「私は……」

「もしかして、目的はこれ？」

「あ!？」

スバルの手にある「タイムワープ」のバトルカードにミソラは声を上げた。

「夕べの態度が怪しくって、考えたんだ……もし、僕の考えが正し

いなら、絶対に止めないって?」

「……」

「ミソラちゃんの目的は過去にあって、お母さんに会うことじゃない?」

「……」

正解だった。

もっとも、逢った後、どうするかまでは考えてなかった。

ただ、逢いたい。

それだけの気持ちで泥棒まがいのことをしたのだ。

正直、後悔の気持ちもあった。

でも、もう止められない。

「ミソラちゃんの気持ちはわかるけど、このカードは危険だ……いい娘だから、大人しく僕と帰ろう?」

ゆっくり腕を掴み、スバルはニコツと微笑んだ。だが……

「え……?」

バンツと弾き飛ばされ、スバルの身体が研究室の壁に叩きつけられた。

「があっ……」

背中を強打し、絶息した。

その拍子にバトルカードが宙に舞った。

「ミソラちゃん!」

「バトルカード……」

バトルカードを手に取り、ギターに読み込ませた。

「クッ……電波変換!」

スバルの身体がロックマンへと電波変換した。

「タイムワープ!」

「バトルカード・バリア!」

ミソラとスバルの周りが強い光に包まれた。

「うう……」

目を覚ますとスバルは右腕に激痛を感じた。

「うがぁ……」

《大丈夫か、スバル？》

ハンターVGから漏れるウォーロックの声にスバルはぷらんぷらんになった右腕を見て苦笑した。

「折れてるみたいだね？」

《ノンキなこと言ってる場合じゃないぞ？ どうやら、俺たちは本当に過去に來たみたいだ？》

「え……？」

倒れていた草原から起き上がり、顔を出すとスバルは驚いた。

「腕にトランサーをつけてる！？」

すでに時代の支流はハンターVGに代わっているのに、みんなまるでステータスのように腕につけられたトランサーにスバルはここが過去だと認識した。

《あの光の中、巻き込まれたんだろうな？ どうする……？》

「……ミソラちゃんを探さない？」

ゆっくり立ち上がり、スバルはハンターVGを振り上げた。

「電波変換・星河スバル、オン・エア！」

スバルの姿が消え、真上の電波ロードへと立った。

「よかった。電波変換は出来るみたいだね？」

《電波ロード自身の概念は今も昔も変わらないからな？ それよりも、あのバカ女の居場所わかるのか？》

「彼女はお母さんに逢いに行ったってことは、行く場所は二つしかないよ？」

《……？》

どこだと顔をするウォーロックにスバルは走り出した。

「ミソラちゃんのお母さんは病気で亡くなった……なら、療養所か実家のどちらかだよ。そして、僕の勘が正しければ、ミソラちゃんは自分の家に向かつてるはず」

《もっとも母親に逢える可能性の高い場所か……あの女の考えそんなことだ?》

「止めないと!?! 今、ここでミソラちゃんがお母さんと逢ったら、なんだかの歴史修正が行われて、時間が変わっちゃう……そうなたら」

顔を青ざめさせ、スバルは首を横に振った。

「絶対に嫌だ!?!」

電波ロードをくだり、ミソラの住むベイサイドシティーまで、ついた。

「見つけたよ、ミソラちゃん!?!」

「あ……?」

スバルほどでないが、身体に怪我を負ったミソラにスバルは出来るだけ、声を荒げず、優しい声でいった。

「探したよ、ミソラちゃん……」

「……」

だが、ミソラはまるで敵に追われたかのように武器のギターを構えた。

「近づかないで……」

「……」

ピタッと足を止め、スバルは意思の揺れない目でミソラを見た。

ミソラも若干、怯え気味に目を泳がせ、声を震わせた。

「わ、私はお母さんに逢いたい……ただ、それだけなの」

「逢って、どうするつもり?」

「……」

また、スバルは歩き出した。

「ミソラちゃん……ミソラちゃんのお母さんは死んだんだよ」

「ち、違うもん……生きてるもん」

後ずさりながら、泣き出しそうな声を出すミソラにスバルは語調を変えずいった。

「生きてるのはこの時代のミソラちゃんのお母さんだ……それとも、

ミソラちゃんはこの時間のミソラちゃんと入れ代わる気？」

「そ、そんなこと……」

「目を覚ますんだ、ミソラちゃん！？　今を否定して、過去にすぎなんって、間違ってる！？」

「スバル君になにがわかるの！？　結局、死んだと思ってたお父さんが生きていて、普通に暮らしているスバル君に私の悔しさや妬みがわかるの！？」

「悔しさ……妬み？」

ショックを受けたように目を見開くスバルにミソラは怒鳴った。

「スバル君はいいよね！？　欲しい物を全部持つてる……優しいお母さんも、亡くなったと思ってたお父さんも生きてる！？　でも、私はどうなの！？　私は全部、持つてない！？　スバル君だけが持つてて、私が持つてないなんって不公平だよ！？　今度は私が持つ側に立ちたい」

「それが……君の本音だったんだね？」

ジワリジワリ近づくスバルにミソラは狂ったようにギターを鳴らした。

「近寄らないで！？」

ギターの弦がスバルの腹部を貫いた。

「ぐふぁ……」

口から大量の血を吐き出し、よろめくとスバルは不適に笑った。

「その程度なの？」

「え……？」

「君の辛さはその程度？」

「クッ……！？」

今度は無数の音符がスバルに襲い掛かり、頭のヘルメットが吹き飛んだ。

パキンッ……

音を立てて崩れるヘルメットも気にせず、スバルは歩を進めるスピードを止めなかった。

「来ないで!？」

逃げ出しそうにミソラはギターを鳴らし、攻撃を繰り返した。

だが、どれも、スバルを止める決定打にならず、気付いたら、目の前まで侵入を許していた。

そして……

ぱぁん……

「え……？」

自分の頬を叩くスバルにミソラは信じられない顔で彼の顔を見た。泣いていた。

まるで信じていた人から裏切られたみたいに悲痛な目で泣いていた。

「ごめんね？」

「スバル……くん？」

いきなり謝りだすスバルにミソラは訳がわからず顔をしかめた。

「ずっと、そんな目で僕を見てたんだね？　ずっと、辛かったんだね？　僕、気付いてあげられなくて、ごめんね？　でも……」

ゆっくり、彼女の手を包んだ。

「それでも、ミソラちゃんには大切なものがあるじゃないか？　僕はお母さんの代わりにはなれない。でも、お母さんと同じくらい大切な存在だと自惚れた。だから、今回のミソラちゃんの暴走を止められなかった」

彼女の身体を抱きしめた。

「でも……でも……やっぱり、過去にすがっちゃダメだよ。僕を嫌いになってもいいから、今の自分を否定しないでよ。人は今を生きなきゃいけないから。昔を学び、今を行き、まだわからない未来を進まないとは生きたことにならないから？」

「す……ばるくん？」

ツツツといつの間にか自分の頬を伝う涙にミソラは驚き、泣き出していた。

「ごめ……なさい」

「うん、ごめん、ミソラちゃん……ごめんね、ミソラちゃん。僕、ミソラちゃんと会いたい」

「え……？」

その瞬間、ミソラたちの周りがゆがみだした。

「これって……？」

「まずい!？」

慌ててミソラから離れ、スバルは折れている左腕を振り上げた。

「スバル君!？」

今になって、スバルの左腕が折れていることを知ったのかミソラは不安そうな顔で彼を見た。

「バトルカード、バリア!？」

二人の姿が時限の彼方へと消えた。

地震が起けるとミソラは自分の下敷きになっているスバルを認めた。

「大丈夫、スバル君!？ 怪我してない？」

《もう、怪我してるけどね?》

ハープの突っ込みも無視して、怒鳴った。

「なんで、怪我してたのに、バトルカードなんか使ったの？」

《ミソラ、気付いてなかったの?》

「え？」

拍子抜けした顔をするハープにミソラは問うた。

「どういうこと？」

「次元の彼方に飛ばされたとき、スバル君はミソラを守るため、バリアを使ったのよ。もし、裸のまま次元をさまよえば、危険だから？」

「……だから、腕を折ってたの？」

自分が軽傷だったのは運が良かったのではなく、スバルが守っていたからだと気づき、改めて、ミソラは自分の行動を恥じた。

「ごめんね……スバル君……ごめんね？」
気を失っているスバルの胸にすがりつき、泣きながら謝るミソラを発見したのはすぐのことだった。

「あう……」

病室に入ると、スツカリ調子を取り戻したミソラは垢抜けた顔で泣き出した。

「天地さんと宇田海さんにこっぴどく叱られた……」

「当たり前だよ？」

全身包帯まみれでミソラに微笑むとスバルは隣で睨むルナを見た。
「僕もついさっきまで、委員長に叱られてたから……無茶するなっ
て？」

「あ……っそ？」

急に不機嫌になり、ルナの顔を見ると彼女も怖い顔でミソラを見た。

「……」

「……」

しばらくして、ルナは呆れたようにため息を吐き、剥いていたりんごの皮を用意していた生ゴミ用の袋に捨て、イスから立ち上がった。

「アナタが食べさせなさいよ？ スバル君、当分、手足どころか、用足しだって難しいらしいんだから？」

「はあ……い！」

元気良く返事をするミソラにルナもクスツと笑い、部屋から出て行った。

「……ごめんね、スバル君？」

イスに座り、最初に出た言葉であった。

「私、考えなしだった……もうちょっとで大切なこと忘れるところ

だった？」

「……ミソラちゃん？」

ピンツとデコピンし、クスツと笑った。

「二度と、こんなことしちゃダメだよ？」

「もししたら？」

悪戯っぽく聞くと、

「何度だって連れ戻すよ……例え、痛めつけたとしてもね？」

「意外と過激な発言……でも」

そつとキスをし、微笑んだ。

「そんなスバル君が大好きだよ？」

「うん！」

ふふつと微笑みあい、不意にミソラは思い出したように聞いた。

「でも、なんで、スバル君はあんなに必死に私を止めようとしたの？」

「私がお母さんに逢っても、対した歴史修正にはならないと思うけど？」

「はは……」

ホトホト呆れた顔で笑い、スバルは人差し指を自分の口元にやった。

「その考えじゃ、まだまだ、僕の切実な思いはな・い・しょ？」

チュツと投げキッスされ、ミソラは顔を真っ赤にした。

想う時間るとき (後書き)

珍しくシリアスです。

スバルとミソラの心情を書きたくって書きました。
意外とよく出来てるのではと自画自賛してます。

ママ

「はい、ミソラ……」

スツと渡されたギターを見て、ミソラは目をパチパチさせた。

「ママ……これって？」

「オーディションを受けるためのママからのプレゼント」

ニッコリ微笑み、母は咳き込んだ。

「マ、ママ、大丈夫!？」

慌てて苦しむ母の背中を摩り、ミソラは心配そうに聞いた。

「でも、これって……高かったんじゃない？」

「ミソラのためですもの……たいした事ないわよ？」

「やっぱり、ギターを買うのにムリしたんじゃない？」

「もう……」

ツンツとおでこを小突き、ニコツと微笑んだ。

「ママはね、ミソラの歌が大好きなの……ミソラが歌える環境を作れば、ママは幸せよ？　ねえ、聴かせて、ミソラの歌？」

「う、うん……」

一瞬、迷いながらも、ミソラは頭の中で思い浮んだ詩を歌い始めた。

「あ……？」

カーテンの隙間から日差しが差し込み、ミソラはムクリとベッドから起き上がった。

「……夢か？」

ベッドから出て、部屋の隅に丁寧に置かれたギターを手に取った。

「ママが必死になって貯めたお金で買ってくれたギター……」

ポロンツとギターを鳴らすと、ミソラは自分の持ち歌の一つ、「グッナイママ」を歌い始めた。

もしかしたら、ギターを買うために無理をしたから死んだのかもしれない。

もしかしたら、自分がオーディションを受けることを承諾しなければ、もっと長生きできたのかもしれない。

でも……

「歌のおかげでスバル君と会えたのかもしれない……」

ゆっくり、ギターを演奏を止めると、うつむくようにギターを抱いた。

「ママ……会いたいよ」

「……お昼はこんなものかしらね？」

作り上げた料理をテーブルに並べるとアカネはうんつと満足そうに頷いた。

「我ながら上出来！」

うんうんつと頷き、ちょっとだけ味見をするとアカネはニコツと微笑んだ。

「私って、才能あるかも？」

などと、自画自賛した。

「さて……後はスバルが帰ってくるのを待つだけね？」

ピンポーン……

「うん……お客さんかしら？」

はっといと大声を出して、玄関までエプロンを脱ぎ、玄関のドアを開けた。

「どちら様？」

「こ、こんにちわ……」

「あら？」

ペコリと頭を下げる少女にアカネは意外そうな顔をした。

「ミソラちゃん？」

「お久しぶりです」

また丁寧に頭を下げるとミソラはスバルはいないか聞いた。

「あの子なら、委員長に呼ばれて、繁華街に買い物に行ったわよ？」

「そう……ですか？」

「ミソラちゃん？」

いつもと違い、元氣のないミソラにアカネは少し心配そうに顔を覗きこんだ。

「なにか悩み事？　もしよかったら、私に話してくれないかしら？」

「……」

今にも泣き出しそうに肩を震わせるミソラにアカネは優しく微笑んだ。

「ミソラちゃん？」

「あ……」

いきなり、抱きしめられミソラは顔を真っ赤にした。

「ミソラちゃん……一人で悩みを抱えてないで話してみて？　意外

と解決の道は近いかもしれないわよ？」

「……ママの匂い」

「え？」

今度はアカネが顔を赤らめた。

「なるほど……」

ミソラにお茶を出すとアカネは朗らかな笑顔で頷いた。

「お母様の夢を見たのね？」

「そしたら、すごく寂しくなって……なんだか、スバル君に」

「会いたくなったんだ？」

「……」

カア〜と赤くなるミソラにアカネはクスクスといったずらっ子のように笑った。

「私じゃ……駄目かしら？」

「え？」

「私じゃ、ミソラちゃんのお母さんになれないかしら？」

「スバル君のお母さんが……私のママ？」

信じられない顔をするミソラにアカネはコクリコクリと頷いた。

「ねえ？」

いつの間にか、頭を撫でてくれているアカネにミソラは今度こそ本当に決壊したように泣き出した。

「ママ……ママは本当に私のママになってくれるの？」

「ええ……ミソラちゃんみたいな娘なら、こっちからお願いしたいくらいよ？」

「うん！」

ガバツと覆いかぶさるようにアカネに抱きつくミソラにアカネも優しく受け止め、いい子いい子した。

「ママの身体って柔らかくっていい匂いがする」

「ありがとう、ミソラちゃん？」

アカネも嬉しそうに微笑みお互い抱きしめあうように抱擁を交わした。

その時……

「ただいま……お昼、出来てる？ 実はすぐに委員長に来いっていわれて……」

家に入るとスバルの顔が真っ青になった。

「あ……？」

ミソラの顔も真っ青になり、慌てて抱きついていたアカネから離れた。

「こ、これは違うよ、スバル君！？」

「え……えっと、人の趣味はそれぞれだから……ぼ、僕は」

ボタンツと逃げるように家を出て行くスバルにミソラも慌てて後を追いついて誤解を解こうと走り出した。

「スバル君……これは誤解だよ！？」

砂煙を撒き散らし消えていくミソラとスバルに残されたアカネは目をパチパチさせた。

「本当に可愛い娘だこと？」

ママ（後書き）

前回の内容から私が少し引っ張ってしまった感がありました。
でも、ミソラちゃんって、明るく振舞ってるけど、その実、不幸な
少女なんですよね？

チョコキツス

「……」

その日、スバルは学校からの帰り道、様子が変だった。

片手にはチョココの詰まった紙袋を握り締め、一様に辺りを伺うように首をキョロキョロさせていた。

まるで、腕利きのスナイパーに狙われてるかのような惨めな姿だった。

家に辿り着くとスバルはキョロキョロと家の中を見回し、コソ泥のように、部屋の中へと入った。

「いないな？」

いつものように不法侵入を当たり前のように犯す少女の姿がないことを確認すると、スバルはホッとため息を吐いた。

「よかった……」

「なにが、良かったのかしら？」

「ギクッ……!？」

ヒョロリとまるで幽霊のように紙袋が奪われ、スバルは真っ青になった。

「ミ、ミソラちゃん……いたの？」

「隠れてたの。だいたい、予想がついてたから」

紙袋の中のチョココを見て、ミソラの目が険しくなった。

「モテるんだね、スバル君って？」

「い、いや……モテる男は辛いな？」

必死にごまかし笑いを浮かべるスバルにミソラはギンッとギターを構えた。

「ショックノート当てていい？」

「……」

脂汗をかきながら、スバルは弁明した。

「チョコ、チョコを貰うくらい、男のステータス……」

グイツと母の形見のギターをまるでライフルの銃口のようにスバルのアゴに押し当てると、

「ゴメンナサイ……ライネンハゼンブ、コトワリマス」

あまりの恐怖に片言になり、土下座した。

「もう……」

ぷうっと頬を膨らませ、ミソラは、スバルが貰ったチョコをベツドに置いた。

「いっぺんに食べないでね？」

「食べていいの？」

「女の子の気持ちを無碍に出来ないでしょう？」

とくに委員長のは、他と違って、義理というわけじゃなさそうだし……

「い、いや……さすがミソラちゃん、わかってるね？」

「……」

すごい剣幕で睨まれ、スバルはまた顔を真っ青にして震えた。

「まあ、いいや……今回、私がここに来たのはスバル君を責めるためじゃないし？」

「ホッ……」

心の底からホッとするミソラは口の端がニヤツと吊り上った。

「今回の私からのバレンタインプレゼントはこれで……す！」

ジャーンと出されたリップを見せられ、スバルは首をかしげた。

「口紅？」

「ふふ……驚いてるでしょう？ 実はこれ……」

柄の部分を捻った。

「なんと、紅の部分がチョコになってるの！？」

「おお、すごい！？ どこで買ったの！？」

「テレビ関係で知り合った人に頼んで作り方を教わったの。意外と難しかった……」

苦労の分か、いつも以上に彼女の笑顔は輝いていた。

「でも、なんで、口紅状にしたの？」

チョコなら、もっと簡単に作る方法はあるのに……

「それはね？」

捻り突出したチョコの部分を舌で舐め、軽く溶かすと、ミソラは自分の唇にチョコを塗った。

「え……まさか？」

顔を真っ赤にするスバルにミソラは顔を動かさないよう両手で彼の顔を固定した。

「ッ……！？」

いきなり、チョコ味のキスをされ、スバルは仰天した。

「ぷはあ……」

糸を引き、キスをやめるとミソラはいたずらっ子のようにチョコ味の口紅を見せた。

「実はね、これ……あるマンガを見て、思いついたバレンタインネタだったんだ……想像以上に良かったね？」

「う、うん……甘かった。チョコ味の唇」

「もっと、味わいたい？」

答えを聞く前から、唇にチョコを塗るミソラにスバルは何も言わず、今度は自分からキスをした。

「うじゅ……むぐ……じゅじゅ」

「はう……むじゅ……ううう……」

どこか、小学生のキスとは思えない、嫌らしいキスをする、二人はまた、離れた。

「なんだか……癖になりそう」

「私もスバル君となら、中毒になってもいいかも？」

また、キスをする、二人はチョコの存在も忘れ、唇だけじゃなく、首筋や、鎖骨など、色っぽい部分にまでキスをし、まるで、獣のようにキスをむさぼった。

チョコの味がしなくなったと思ったら、また、ミソラはチョコを唇に塗り、キスをし、また、しなくなれば、チョコを塗りを繰り返し、気付いたら、

「ぷはあ……はあ……はあ、もう限界」

「私も……」

お互い口の周りをチョコと唾液で汚し、床に倒れるとふふつと笑いあった。

「いいね、このバレンタイン……来月のホワイトデーが難しくなつて、大変だよ？」

「あ、それならね？」

ゴロリと起き上がり、ミソラはテヘツと笑った。

「ホワイトデーは三倍返しだからね……意味、わかる？」

いたずらっ子のように舌を出すミソラにスバルの顔が若干、青ざめた。

チョコキッス (後書き)

この時、ちょうど、k i s s × s i s にハマッてて、底から今回の内容を引用しました。

k i s s × s i s、面白いですよね？

巷で人気

『え〜〜……巷では戦うアーティスト、ハープ・ノートに人気が集まってる模様です』

『ハープちゃん？ 可愛いよね？』

『ハープ・ノートのブロマイド、コンプリートしてます！』

『正直、もう、ロックマンいらなくない？』

プツンツとテレビを消すとミソラはバフンツとベッドに横たわった。

「……」

《怖い顔してるわね？》

「だって……」

あぐらを組むようにベッドの上から起き上がると、ミソラはぷくうと頬を膨らませた。

「スバル君をいらない奴扱いなんって許せないもん」

《それだけ、アナタが注目されてる証拠でしょ……もっと、胸を張らなきゃ？》

「ヒーローはスバル君だもん！？」

《はいはい、ご馳走様？》

惚気に近い不貞腐れ方をするミソラにハープは苦笑した。

ぴるるるる……

「ッ!？」

慌ててハンターV Gを手に取り、電源をオンにした。

「スバル君！ どうしたの、いきなり電話して？」

『あ、うん……テレビを見て、ミソラちゃんが絶好調なのを知って、なんだか急に話したくなって』

「えへへ……でもね、世界のヒーローはスバル君だけだよ？」

『じゃあ、ミソラちゃんは僕のヒーロー……いや、ヒロインだね？』

「え……?」

『ヒーローはヒロインがいるから戦えるんだよ。今も昔も……そして、これからも?』

「ス、スバル君……」

顔を赤らめるミソラにスバルは照れたように笑った。

『これから、どこかに遊びに行こうよ? 最近、寒いし、南国の地に行くとか……どう?』

「いいねいいね? 水着、用意してるから、期待しててね?」

『はは……じゃあ、電波空間で待ち合わせね?』

「りょうか……い!」

シュビンツと敬礼し、ミソラは電源を切った。

《スバル君も最近、電波空間を私用に使うこと多くなったわね?》

悪いとは言わないが、良いとも言い難い。まあ、自分が言えた義理じゃないけど……

「さあ……て……水着に着替えないと。変身を解いた瞬間にスバル君をビックリさせないと?」

素晴らしい、ミソラは勝負下着ならず、勝負（上下分かれた、かなりきわどい）水着を取り出し、微笑んだ。

「脱・少女かしら?」

《いい加減にしないと、あっちこっちからクレームが来るわよ?》

「大丈夫、肝心な部分は（自主規制）がかかるから?」

《……》

ハープはなにも言えず、呆れた。

巷で人気 (後書き)

これをサイトに掲載してたとき、ちょうど、「ハートキャッチプリキュア」にハマッてて、ハープ・ノートにも力を入れたいなど考えてました。

でも、結果的にハープ・ノートの出番はさらに減ってしまった気がします。

二人だけの雛人形

「ふうんふうんふうん……♪」

鼻歌を歌いながら五段に並べられた台の一番上に二体の人形を置くと、ミソラは満足げに腰に手を置いた。

「完成！」

自信満々に目の前に飾られた人形たちに、額に流れた汗をふうとため息を交えながら拭いた。

「スバル君、入っていいよ？」

「わかった……！」

ガチャリとドアが開き、スバルが入ってくるとミソラはジャーンと今、飾ったばかりか人形たちを見せびらかした。

「綺麗でしよう、私の雛人形！？」

「おお！？」

部屋に入り、いきなり目に入ってきた人形たちにスバルは顔を真っ赤にした。

「……お雛様とお内裏様の顔がボクとミソラちゃんに似てない？」

「えへへ……？」

顔を赤くし、両手を後ろにやるとミソラはテレ臭そうに笑った。

「実はこの日のためにオーダーメイドしたんだ。いや……高かった？」

「オ、オーダーメイドって？」

バカップルじゃないんだから、そんなことしなくても……

いや、普段からの言動を見れば、十分バカップルだが、いくらなんでも、お金を使ってまで、バカップルにならなくても……

スバルは色いろな心の中のツツコミを飲み込み、息をすった。

「さて……スバル君に見せたいし、片付けようか？」

「え……出したばかりでしょう？」

いきなり片付け始めようとするミソラにスバルは慌てて叫んだ。

「だって、雛人形は片付けるのを遅れると婚期を逃すって言うでしょう？　こんな事でスバル君と結婚を逃すのはバカバカしいでしょう？」

「う……！？」

キッパリと結婚まで考えているミソラの未来計画にスバルはタジタジとなった。

「でも……」

出されたばっかの雛人形にスバルは、どこか同情を覚えた。

「出したばっかなのに……」

もっと、一緒にいたかっただろうに……

出会って早々にもう押入れの中に閉じ込められる自分たちの人形にスバルはふと思いついた。

「ちよつと待って？」

「え……？」

片付けようとするお内裏様を手に取り、スバルはニコツと笑った。

「また、来年、逢おうね？」

そういうと、スバルはミソラ似のお雛様に自分似のお内裏様の顔を近づけ、

「あ……？」

ミソラの顔が真っ赤になるのも気にせず、スバルは人形たちをキスさせた。

「じゃあ、片付けようか？」

スバルも満足したのか、ニコツと笑うとどれから片付ければいいのか、聞いた。

「……そ、そう思ったけど」

「……？」

「もうちよつと出してようかな……ひな祭りは今日一日残ってるし？」

スバルも嬉しそうに、うんつと頷いた。

「じゃあ、今日は二人でお雛様とお内裏様を見ながらお菓子を食べ

ながら、話し合おう？」

「うん！ きっと、お雛様たちも喜んでるよ？」

そういうとミソラはそっと絨毯の敷いた床に座り、スバルにも座るように促した。

スバルもミソラと同じようにお雛様を見て座り、そっと肩をくつつけた。

「お花を上げましょう？」

「ぼんぼりにくく……」

二人は綺麗に声を合わせながら眠るように目を細め歌い続けた。不思議と雛人形の顔が微笑んだように二人は見えた。

二人だけの雛人形（後書き）

本来、雛人形は魔除けで人形の折り紙を川に流して悪霊を追い返すのが始まりといわれています。

ホワイトリング

「……」

休日のショッピング街でスバルはウィンドウを眺めながら、ハアとため息を吐いていた。

「参ったな……ホワイトデーのお返し、まだ決まってる……」

《適当にキャンディーでもやればいいんじゃないのか?》

「それはダメだよ!」

キッパリ言い返し、ガクリ項垂れた。

「下手なもの贈って、ミソラちゃんにガツカリしてほしくないし……」

《地球人ってのは難儀な生き物だな?》

やれやれと首を振り、スバルと一緒にホワイトデーのプレゼントを探すアツと声を上げた。

「どうしたの、ロック?」

《スバル……あれなら、いいんじゃないのか?》

「……あ、あれって?」

ウォーロックの指差すものを見て、スバルは顔を真っ赤にした。

「スバル君、用ってなに?」

電波空間を伝ってスバルの部屋に入るとミソラは満面の笑顔で彼を見た。

どう見ても、呼ばれた理由をわかってる顔であった。

「……ミソラちゃん」

「はいはい?」

ニコニコの笑顔で顔を近づけるとミソラは早く早くと期待するものを待った。

「目を瞑ってくれる?」

「オッケー！」

姿勢を正し、小首をクツと上げるとミソラは待ち遠しそうに唇を前に出した。

「……」

だけど、ミソラの思惑は中々、やってこず、堪えきれず、目を開けた。

「あ……？」

目を瞑っていたため、気付かなかったが、いつの間にか自分の手を握り、薬指にはめる指輪を見てミソラは顔を赤らめた。

「こ、これって？」

「ハイ……ホワイトデーのプレゼント！」

ニツコリ微笑むスバルにミソラは顔をカアアと赤らめ、

「ススススススバル君、これって！？」

「ふ、深い意味は無いよ……自由に使っていいよ？」

「あ……うん」

左手の薬指を見て、ミソラは真っ赤な顔をさらに真っ赤にし、首を強く振った。

そして、

「スバル君！」

「うんっ!？」

唇を奪われ、背中から倒れ込むスバルにミソラは唇を離すとチョッピリ涙目で微笑んだ。

「サイコーのプレゼントだよ……今度は本物の指輪を頂戴ね？」

そういい、ミソラはイミテーションの指輪を愛おしそうに眺めた。

「……」

その喜ぶ姿にスバルはさらに用意しておいた、あるサプライズをいつ言おうか考えた。

指輪の裏に彫られた彼女と自分の名前が書かれたイミテーションの指輪の仕掛けに……

ホワイトリング (後書き)

本当に毎年、ホワイトデーの小説だけは困ります。

私自身、返す相手がいないんですから返す気持ちが見えないのが一番の悩みどころ……

仕事はマジメに

ピピピピピピ……

「う、うん……」

けたたましい目覚ましのアラームにミソラは鬱陶しそうにベッドの中で寝返りを打ち、器用に耳をふさいだ。

ピピピピピピ……

「まだ、眠いよ」

ピピピピピピ……

「もう後、五分……」

ピピピピピピ……

「大丈夫……電波空間を使えば、すぐだから……」

ピピピピピピ……

《ミソラ、仕事の時間五分過ぎてるわよ？》

ガバツと起き上がると全身の毛穴が広がるのを感じた。

「なんで撮影時間に目覚ましが鳴るの！？」

《昨日のことを思い出しなさい。すぐに答えは出るわよ？》

「え……確か昨日は？」

よし、明日はこの時間に起きよ？

ミソラ、その時間、撮影始まる五分前じゃない？

大丈夫よ。電波空間を使えば、十分間に合うから？

ミソラ……そうやって、人は墮落するのよ？

宇宙人がよく言うよ？

遅刻しても起こさないからね？

いいも……んだ！

「……」

顔がみるみる真っ青になり、大声を上げた。

「なんで、起こしてくれなかったの!？」

《起こさないって約束したでしょう? 社会人なら自分の管理くらしい自分でしなさい》

「そんな〜……」

涙目になりながらも急いで用意してあった普段着に着替え始め、部屋に備えた姿鏡を見た。

「ああ、髪、整える時間もない!」

《だから、言ったのに……》

「うるさい!」

八つ当たり気味に怒鳴り、服に着替え終わると、

「現場で髪は整える!」

ハンターV Gを手に取り、上空に掲げた。

「電波変換! 響ミソラ、オン・エア!」

ミソラの姿が光となって消え、電波空間にハープ・ノートとして降り立った。

「急がないと!？」

慌てて仕事場に向かおうと走り出した。

その時、ハープの怒鳴り声が響いた。

《ミソラ、危ない!？》

「え……キャッ!？」

頭に強い衝撃が降り、パキンツとヘルメットが割れた。

「ウ、ウィルス……?」

額から血が流れ、朦朧とする意識の中、ハープ・ノートは攻撃を仕掛けたウィルスにバトルカード、『ガトリング』を使い、瞬殺すると糸が切れたように倒れだした。

「うう……ここは?」

目を覚ますとハープ・ノートは見覚えのある部屋のベッドで眠っていた。

ちよつと高額な雰囲気のある天体望遠鏡に地理を知るためというよりも星を見たいという目的のために備えられた地球儀……

ここは間違いなく……

「スバル君の部屋だ？」

ベッドから出るとハープ・ノートは

「うっ……」

軽い眩暈を感じ、よろけると、トンと誰かが自分の身体を支えてくれた。

「……？」

顔を上げるとハープ・ノートの顔がパアアと輝いた。

「スバル君！？」

「ミソラちゃん！」

ちよつとだけ怖い顔をし、ハープ・ノートをベッドに寝かせつけるとスバルはメツと人差し指を立てた。

「さっきまで脳震盪で倒れてたんだよ？　ちゃんと寝ないと危ないよ？」

「う、うん……」

いつもと違う厳しい表情のスバルにハープ・ノートは顔を赤らめた。

なんだか、格好いいな……怒ってるスバル君も。

「あれ、でも、なんで、私、スバル君の家に？」

「それはこっちのセリフ！　春休みだから、少し寝坊しようとしたら、いきなりハープからすごい剣幕で助けてくれといわれて、指定場所まで来ると、ヘルメットを無くしたミソラちゃんが変身も解かず、倒れてるんだもん。本気で心配したんだよ？」

「変身も解かず……え？」

今更になって、ハープ・ノートは自分の身体が電波体から元に戻っていないことに気付き、顔を真っ赤にした。

「なななななんで、私、ハープ・ノートのままなの！？」

別に裸じゃないのになぜか、胸を隠すハープ・ノートにスバルは

困った顔をした。

「それは恐らく……」

スバルが答えるよりも先にハンターV Gからウォーロックが現れ、説明した。

「恐らく、これのせいだな？」

ハープ・ノートのハンターV Gを手にとると、ウォーロックは画面を指差した。

「画面がノイズで動いてない？」

「さっきまで、電波ウィルスにやられてたぞ？ 俺とスバルが倒してやったが、しばらくはこのままだな？」

「ハープは無事なの？」

「お前が変身してるのが大丈夫な証拠だろう？」

「そっか……」

ホッとするハープ・ノートにスバルも安心した顔で聞いた。

「ところでなんで、あんな所で倒れてたの？」

「ドキッ……!？」

脂汗をかいて胸を押さえた。

「し、仕事に遅刻しそうで……電波空間を」

「もういいよ」

心底呆れた顔でハープ・ノートの口をふさぐとスバルは厳しい口調でいった。

「いい、ミソラちゃん？ 電波空間はズルするためにあるんじゃないの？」

「わ、わかってます」

「じゃあ、次からは仕事はちゃんと自分の足で行くって約束してくれる？」

「……」

ぷいっとバツの悪い顔でそっぽを向くとスバルの額に青筋が浮かんだ。

「ミ・ソ・ラ・ちゃ~~~~ん!？」

思いつきり怖い顔で睨まれ、慌てて謝った。

「ご、ごめんなさい！　これからはズルしません！？」

「まったく……」

今度はスバルがぷいっと顔を背けた。

「スバル君？」

顔を向けられ、ハープ・ノートは不安そうにスバルの顔を見た。

もしかして嫌われた。

そんな不安がハープ・ノートの心に広がった。

「……」

しかし、その顔は怒ってるというよりも、どこか紅潮していた。

「もしかして……スバル君、ヘルメットの無くなった私に新鮮さを覚えてる？」

「ドキ！？」

今度はスバルが胸を押さえ、ハープ・ノートは喜ばせた。

「それならそれだと、そう言うてくれればいいのに？」

ベッドから飛び出し、背を向けるスバルに肩から抱きつくようにくっつくと、ハープ・ノートは彼の頬にキスをした。

「そうだよね？　私って変身すると髪の色も変わるし、いつもと違う響ミソラが堪能できるもんね？」

「い、いやらしい言い方しないでよ、まったく」

ふんつと鼻を鳴らすスバルに、ハープ・ノートは気にも留めず、スバルの身体を無理やり自分の方へと向かせた。

「いつもと違う、響ミソラを君にプレゼントしてあげる……」

「え……？」

いきなり、キスをされスバルはなんとも言えない顔で目をギョツとさせた。

しかし、次第にギョツとなった目はトロンと潤み、気付いたら彼女の身体を強く抱きしめていた。

「うん……くちゅ」

スバルの口に舌を入れ、中を舐めると、今度はスバルがハープ・

ノートの口に舌をいれ、お互いの舌を舐めた。

くちゅ……ずちゅ……じゅじゅ……

いやらしい音が十代の少年の部屋に響き渡り、二人は餓鬼のようにお互いの唇を奪い合った。

そして……

「ッ……!？」

ギュウンと光の旋風がハープ・ノートを包み、彼女の身体が元の響ミソラの姿へと戻った。

「元に戻っちゃった？」

どこか残念そうな顔をするミソラにスバルはトンツと床に座り込み、肩で息をした。

「ミソラちゃん、今日はいつになく、激しいよ？」

「それはこっちのセリフ？」

軽くウィンクし、ミソラは時間を確かめた。

「この時間なら、そんなに怒られないかも？」

ハンターV Gを手に取り、上空に掲げた。

「あ、ミソラちゃん、約束……!？」

「べ……!」

可愛く、あっかんべーされ、ミソラの姿が光とともに消えた。

「……」

(精神的に) 疲れたのか、スバルはさっきまでミソラ……いや、ハープ・ノートの寝ていたベッドに座り込み、掛け布団に鼻を近づけた。

「……ちよつとだけ、残り香が残ってる」

女の子のいい匂いが鼻腔をくすぐり、スバルは顔をカァと赤らめた。

「こ、このベッド洗うべきかな？」

十代の男の悩みをスバルは十日間悩み、その間ベッドが使えなかった。

仕事はマジメに (後書き)

アイドルは立派な社会人です！

アイドル願望のあるそのアナタ！

華やかな世界にばかり目を向けてると痛い目見ますよ？ (私みたいに……)

看病は私にお任せ♪

ゆらゆらとまだ、段々と青みがかった落ち葉が落ちる公道の帰り道、スバルはハアツと手に息を吹きかけ、微笑んだ。

「スツカリ、外も暖かくなったね？」

「スバル君、気を抜いてない？」

ギロツと睨まれ、スバルはちよつと驚いた顔でルナを見た。

「気を抜く？」

「そう！」

ビシツと指差され、怒鳴られた。

「季節の変わり目が風邪の引き始め！ この時期、風邪を引いて学校を休む子、多いのよ……」

「そんな大げさな……僕は大丈夫だよ。ほら、こんな元気なんだよ？」

いっちにっとなラジオ体操をするスバルにルナはピンツとデコピンした。

「調子に乗りすぎ……そうやって、毎年、ゴン太や、体力に自信のある男子が毎回、風邪を引いてるのよ？」

「まあまあ……大丈夫だよ？」

弾かれた額をスリスリ摩り、スバルは苦笑いした。

「じゃあ、また明日ね！」

「ちゃんと、布団をかけて、お腹出さずに寝るのよ？」

「は……い！」

元気良く返事を返すスバルにルナは本当に大丈夫かという顔でうなだれ、スバルと分かれた。

自宅へ帰っていくルナの背中を見送り、スバルは笑いを堪えながら頭の後ろをかいた。

「本当、口うるさいんだから……クシゅんッ」

……あれ？

次の日。

「あう~~~~頭も喉も痛い~~~~」

「三十九度……完全にコジラせたわね？」

口に咥えるタイプの体温計を見上げると、母・アカネは呆れたようにため息を吐いた。

「最近、温かくなって油断したわね……お母さん、仕事があるから、家を留守にするけど」

「いってらさ~~~~ごほごほ」

「……」

真っ赤な顔で咳き込むスバルにアカネは心配そうな顔をした。

「その様子じゃ、一人にするのは心配ね……」

「お、お構いな……ごほごほ!？」

「まあ、ちゃんと、お世話係を呼んであるから、安心して？」

「お世話係？」

ドリル委員長の顔を思い浮かべ、すぐに否定した。

今日はまだ平日だ。

あの石頭が学校をサボってまで、自分の見舞いに来ると思えない。

じゃあ、誰が……

「お邪魔しま~~~~す!」

「ドキッ!？」

真っ赤な顔に青みが係り、紫色になるという器用な顔色になるスバルにアカネはニコツと微笑んだ。

「ミソラちゃん、今日、仕事、オフなんですって……良かったわね、スバル」

ニタ~~~~と顔がいやらしく緩んだ。

「人気アイドルに風邪の面倒なんて、男誉れに尽きるじゃない？」

「母さん……倫理を守って……ガクッ」

ショックのあまり、気を失ったのか、スバルは目を回し布団に倒れこんだ。

「お〜い、スバル〜?」

ペチペチと頬を叩き、ため息を吐いた。

「女の子がお世話に来てくれたのに、こんなんじゃ、まだまだだね?」
部屋のドアを開けるとニコニコ顔のミソラが自分を見上げ、微笑んでいた。

「お邪魔します、おばさん!」

「今日はよろしくね、ミソラちゃん?」

「はい! もう、任せてください!」

力いっぱい胸を叩くミソラにアカネもうんうんと満足そうに頷いた。

「じゃあ、私、近所の奥さんとお茶会に行ってくるわね?」

「じゃあ、仕事(戦略的撤退)……頑張ってくださいね?」

背中を向けながら親指を立てるアカネにミソラもふんつと鼻を鳴らし、スバルの部屋に入った。

「スバル君……寝てる?」

というよりも、気を失ってるスバルに近づき、おでこをくっつけた。

「やっぱり、ちょっと熱いや?」

よっこいしょと、かけてあった布団をはがすとミソラはスバルの着ていたパジャマのボタンを一個一個、外していった。

「うう……」

ちよつと寒いのか、うなり声を上げるスバルにミソラはパジャマの上着を脱がせ、用意してあった濡れタオルを取り出した。

「すごい汗……」

そつとスバルの汗ばんだ肌に浴室で濡らした絞りタオルを当てる
と優しいタッチで彼の身体の汗を拭い始めた。

「スバル君って、こう見ると結構たくましいよね……鍛えてるわけ
じゃないけど、無駄な脂肪がないというか」

むしろ、映えるくらいにいい筋肉があり、見た目の華奢さとは裏腹な男らしさがあった。

少し、胸がドキドキするのを押さえ、真っ赤になりながら、スバルの身体の汗を拭いていくと、スバルの目がそっと開かれた。

「あ、あれ……？」

そっと目を開かれるとスバルはギョツとなった。

「ミソラちゃん、なにしてるの……！」

上半身を脱がされ、間近に迫るミソラの姿を認め、スバルは紫色の顔が真っ赤に戻り、ベッドから飛び降りた。

「あ……」

だけど、すぐに眩暈が起こり、膝を突くとミソラは慌ててスバルの身体を支えた。

「ほら、風邪を引いてるのに無理しちゃダメだよ？」

「だからって……隙を突いて襲うのは反則」

「違うって！ ちょっとそれもありかと思ったけど、してないから？」

ムリヤリ、スバルをベッドに寝かせつけるとミソラは優しく微笑み、濡れタオルを見せた。

「身体の汗をぬぐってただけだよ……風邪を引いてると汗をたくさんかくからね？」

「あ……そ、そうなんだ？」

自分が勘違いしていたことに気付き真っ赤になるスバルにミソラはムフフと笑った。

「もしかして期待してた？」

「そ、そんな事ないよ……」

全力で否定するスバルにミソラはぷうと頬を膨らませた。

「もう……素直じゃないんだから？」

身体の汗を拭い終わると、ミソラはスバルの身体をベッドに寝かせつけ、掛け布団をかけた。

「朝ごはんまだでしょう……実はおばさんがお粥作ってくれてたの。」

食べて？」

「う、うん……」

部屋から出るミソラを見送り、スバルは少し安心した顔でベッドに身体を預けた。

「さすがに今日はミソラちゃんも暴走しないか……だって、風邪引いてるし？」

「持ってきたよ？」

「はやっ!？」

トレイに乗せたお粥を持ってベッドまで近づくとミソラはチョコッンと床に正座した。

「ありがとう、お粥……ハイ、頂戴？」

「……」

ニコニコ顔のまま、お粥を渡さないミソラにスバルは不思議そうに首をかしげた。

「どうしたの……早く頂戴？」

「はい、あゝゝん!」

「イッ!？」

レンゲに乗せたお粥を差し出すミソラにスバルは真っ赤な顔をさらに真っ赤にした。

「ほら、スバル君、あゝゝん!」

ズイズイとレンゲを差し出すミソラにスバルは真っ赤になりながら叫んだ。

「い、いいよ、ちゃんとそれくらい自分で食べれるから？」

「なに言ってるの!？」

ガツと怒鳴られ、スバルは目をキョトンとした。

「風邪拗らせてるのに見栄張らないでよ……ママだって、風邪のときは大変だったんだよ？」

「……」

涙目で母の言葉を発せられ、スバルは言う言葉を失った。
観念したように口をあけた。

「あゝゝん！」

「はい！」

そっとレンゲが口の中に入り、スバルはあふあふと口の中のお粥を冷ました。

「あ、熱かった？」

「だ、大丈夫だよ？」

ニコツと真っ赤な顔を微笑むとミソラはぶるぶる首を振った。

「大丈夫じゃないよ……冷まさないとダメだからね！」

そういうとミソラはまたレンゲにお粥を乗せ、ふうふうと息を吹きかけた。

「ミ、ミソラちゃん……それはやりすぎ」

いくらなんでも、それじゃあ、バカップルだよと言いたかったけど……

「はい、これで冷めたよ……ゆっくり食べよう？」

有無を言わさぬ迫力でレンゲを差し出され、スバルは今度こそ観念した。

「あ、あゝゝん……」

恥ずかしそうに顔を赤らめるスバルにミソラは嬉しそうに食事をよそった。

三十分経ち、小鍋の中のお粥を全て食べ終わらせると、ミソラは満足そうに頷いた。

「はい、お粗末さま？」

朝食を済ませるとスバルはやっと解放された気持ちでため息を吐いた。

「じゃあ、最後は葉だね……これ飲んで、ちゃんと寝るんだよ？」

「あ、うん……」

スツカリ、憔悴してるのか生返事を返すスバルにミソラの唇がぶつかった。

「ッ！？」

いきなりキスをされ、驚きを隠せないスバルにミソラはさらに驚

きの行動に出た。

「ウツ……!?!」

なんと、ミソラの口から水と一緒に風邪用のカップセル錠剤が流し込まれた。

ゴクンッ……

思わず、ミソラの口から流し込まれた水と薬を飲んでしまい、スバルはカァアと真っ赤になった。

「あ……ミ、ミソラちゃん？」

「……えへへ？」

ブイと日本の指をさすと、微笑んだ。

「一度、やってみたかったんだ？」

「あ、あううう……」

今度こそ限界に達したのか、スバルはボタンッとベッドに倒れこみ、目を回した。

「あ、スバル君、大丈夫!?! 返事して!?! おくくい!?!」

ミソラの叫び声も聞こえず、スバルの意識はドンドンとだんだんと混沌へと沈んでいった。

目を覚ますと外はスツカリ夜になっていた。

目線を少し上に上げたが、頭痛はすでにしない。

声を軽く上げても、喉は痛まなかった。

「風邪が治ったのか？」

ホッとしたような、残念なような、顔をスバルはした。

「まあ、いいや、今日はもう朝まで寝よう？」

そーいい、ゴロンッと寝返りを打った。

ムニユッ……♪

「ムニユ？」

寝ぼけ眼でもう一度ベッドの中のムニユを確認した。

ムニユムニユ……

「ああ……スバル君、ダメだよ……えへへ♪」

「ミミミミミミソラちゃん……なんで、僕のベッドに!？」

パジャマの上着のボタンをかけ外したミソラの寝顔を見て、今更、スバルは自分が触っているのが、彼女の生の胸の感触だと知り、仰天した。

「か、帰ってなかったんだ？」

どうしようか考えるスバルにミソラの寝言が聞こえた。

「スバル君……早く元気になって、一緒に遊ぼうね？」

「……」

ギュッと自分を抱きしめるミソラにスバルは、一瞬、考えた後、彼女の身体を抱きしめ返した。

「今日の日曜……どこか遊びに行こうか。映画とかいいかも？」

「スバル君……意外と痛くない」

「どんな夢見ているの？」

若干、顔を青ざめさせ、スバルとミソラは夜が明けるまでお互いのぬくもり感じあいながら眠りについたのであった。

看病は私にお任せ♪ (後書き)

実はこの時、すでに風引きネタをやっていたことを忘れていました。
なにが奥義だ、笑わせてくれるなんて言わないでくださいね？

実際、風引きネタはどの二次創作でも面白く出来るネタの一つです
から？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4646v/>

響ミソラ小説 ときめきの恋心編

2011年8月7日03時21分発行